同心部屋御用帳

江戸の旋風

—冬衣おんな地獄—

島田一男

POPULAR BOOKS

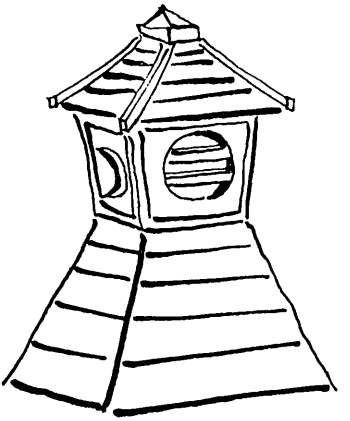


両国の「ももんじや」から、ししの肉を買っていた女掏摸のお銀が、色男のおたずね者の山犬の仙太郎と、しし鍋をつついていた筈なのに、二人はふぐの毒にあてられて死んでいた……定町廻り同心由良三九郎と千秋城之介の調べでは、お銀はししの肉を買ったといい、ももんじやではかもの肉を売ったといい、仙太郎はふぐだと言って息絶えた……金のため……女のため……男のため……身を亡してゆく哀れた人達を、江戸風物を背景に巧みに描いた同心部屋御用帳……事件記者時代版。

同心部屋御用帳

江戸の旋風

―冬衣おんな地獄―



島田一男

目次

色道丁半……五
娘七福神……一四
初庚申の女……二三
厄除け心中……二一
逢引き祓……三〇
女砂絵師……三五
切り髪屋敷……一六
色茶屋騒動……二〇七
女中変化……三三六
女難同心……二五五

裝幀　三井　永一

同心部屋
御用帳

江戸の旋風

―冬衣おんな地獄―

色道丁半

一

「――いい加減でいいぜ。ざアッとやっときな、ざアッと……」

不精たらしく、ふところに入れた手を襟もとから出して、顎を撫でながら、由良三九郎が言った。

師走の十三日は、すす掃きの日だった。――江戸御城内を始め、下々の民家まで、一年のすすを払うことになっていた。

すすを払う道具は竹だった。――四度目の竹は目出とう黒くなり……と言う川柳がある。正月、七夕、盆、そしてすす払いと、一年に四度竹をつかう。四度目のすす掃きが終ると、――いそがしさ十七寝るとお正月……と言うことになる。

御城内では、――御すす納め……と言い、城外の公儀のお役所――お船番所、金座銀座のお役人詰め所、伝奏屋敷、お台番所などでも、これにならって、御すす納めをしなければならなかった。

南北両町奉行所や、伝馬町のお牢屋敷もまた同じである。

御城内やお役所のすすを払う竹は、虎の門の藪小路から切って来たものが使われた。

その竹を、一本ずつ持って、三九郎のところの小者の六助や、千秋城之介の小者勘弁の勘八、日下

兵馬の小者針の嘉助達が、定町廻りの同心部屋の天井や壁を撫で廻していたのだ。

同心筆頭の早水茂太夫と、次席の高瀬儀右衛門は、御すす納めの御祝儀に奉行のお役宅へ出かけ、三九郎、城之介、兵馬、それに最新参の三保木大学が残っていた。

「なア城之介。あたしゃ一度でいいから、大奥の御すす納めが見てみてエよ」

「残念ながら、いささかお若過ぎますな」

「けッ！　嫌な男だよ、お前さんは……。フケ過ぎてると言わず、若すぎるとは憎いねエ」

ひと口に、後宮の美女三千……と言われるが、実際には、大奥の女は、それよりも遥かに大勢いた。その証拠に、三代将軍の家光が死んだ時には、次ぎの家綱が女中三千五百人をやめさせているし、八代吉宗の死後、九代家重は三千人の女を整理している。

まず、軽く見て五千人と言うところであったであろう。

その女達が、緋縮緬のしごきで襷をして、裾をとりあげ、二の腕もあらわに、大奥のすすはらいをするわけである。

このすす払いには、楽しい景物があった。——上は江戸城から、下は町人、職人の家まで、すすを掃き終ると、御祝儀の胴あげが行なわれた。

胴あげをされるのは、かねてから一同に憎まれている者か、睨まれている者だった。——十二日から色男ねらわれる……。奥家老まげをなくなす十三日……。前の川柳は、町家の方で、——あしたはやってやるぞ……と、色男ぶってるやつが睨まれることを言い、あとのは、城内のことで、平素厳しい奥家老が、胴あげをされすぎて付け髷が飛んでしまった……と言うのだ。

とにかく、大奥のすす払いは、華やかで、色っぽいものであったに違いない。ただ、大奥は男子禁制だ。将軍の後宮である。だが、特例があった。十五歳までの少年か、六十歳以上の老爺はお役向き

によって、大奥へ入ることが許されていた。

城之介が三九郎に、——若過ぎる……と言ったのは、このためである。

「あたしゃね、豊国が描いた〝源氏十二カ月〟と言う絵を見たんだ。その中の師走の絵が、大奥の御すす納めさ。十四、五のかわいいお小姓を、プリプリした肉づきのいい奥女中達が寄ってたかって胴あげにしている」

「可愛そうに……。そのお小姓は災難ですなア」

「飛んでもねエ。男ひでりのお女中達が、この時とばかりお小姓を可愛がってるのさ。あたしゃ、なぜ町奉行所同心の家なんかに生まれたんだろう」

「え!?」

「お目見得格の旗本の家に生まれて、お小姓にあがり、大奥付きにでもされていたら、さぞお女中達に騒がれたことだろう」

「由良さんがですか?」

「妙な念を押すなよ。それに引きかえ……」

三九郎は、すす竹を持って働いている勘八達の様子を見て、溜め息をついた。

「なんと色気のねエ、恰好だろう」

「しょうがありませんよ。ここにゃ女ッ気がないんだから」

「——十三日下女内股を出して逃げ……。天井へ下女のくッつく十三日……。そこいらの町家のすす掃きだって、とにかく色ッぽいんだぜ」

それから三九郎は、小者達へ手を振った。

「——御苦労御苦労、もういいからよしにしな。どうせ大晦日(おおみそか)までにゃ、またすすがたまらアね。形

だけでいいんだ、形だけで……。いつまでも戸口や窓をあけとくと、寒くっていけねエ……」

確かに、かなり部屋の中が冷えて来た。

「――今夜は、雪になるかもしれませんねエ」

そう言う兵馬へ、三九郎が、うム……と、尤もらしくうなずいた。

「降るかもしれねエ。あの夜もやっぱり、十三日の夕方から雪になった」

「ほう、いつのことです？」

「赤穂浪士が吉良邸へ討入ったときのことさ」

兵馬が呆れ、城之介が思わず吹き出した。

「どうです、由良さん。こちらも一ツ、両国橋を渡って、討入りと洒落ましょうか？」

「おッと！　深川辺りへ、シケのコミッて寸法かい？」

城之介が、ちょいと、口もとを崩した。

「さア……、そう言うことになるかどうか、そこまでは考えていませんよ。あたしゃ、牡丹か紅葉を食いに行こうと思ってるんですがね」

「なる程……。あったまるね」

「雪が降っても、平ッちゃらですよ」

「よかろう！」

三九郎は、兵馬と大学へ顔を向けた。

「お前さん達もどうだい、つきあわねエか？」

「牡丹か、紅葉を、食うんですか!?」

兵馬が、驚いたように、たずね返した。

「いやかい？」
「さア……、食ったことがありませんが……。牡丹の花や、紅葉の葉ッぱが食べられるのですか？」
「えー!?」
三九郎は、やれやれと言うように、城之介を見た。
「いけねエなア……。あたし達ア、お若い旦那方を、もっともっと仕込まなきゃ」
「あたしだって、まだまだ知らないことがありますよ」
「しかし、牡丹や、紅葉くらい知っていて貰いてエなア。仮に、或る女をとッ捕えて吟味をする。——あたしゃその時、牡丹を煮ていましたよ……と答えたらどうするんだい？」
「——毒になるやつが煮ている薬食い……ですか」
「さア、その洒落が兵馬や大学にゃ通じねエ。え、そうだろう。いま城之介が言ったことが、わかるかい？」
三九郎の言葉に、兵馬と大学は、首を横に振った。
「——薬食い……とはね、牡丹や紅葉を食うことさ。折角精のつく牡丹や紅葉を食ってもそばに毒になる別ピンが世話をやいてるんじゃ、なんにもならねエ……と言うのが、——毒になるやつが煮ている薬食い……なのさ」
「その、牡丹や紅葉が、薬になるのですか？」
「あたりきよッ！　じれッてエなア、牡丹に唐ジシ、鹿に紅葉じゃねエかッ」
「えッ!?」
「牡丹はイノシシの肉、紅葉はシカの肉だッ」
「よ、四ツ足を食うのですか!?」

「勝手にしやがれ！」
三九郎は、いまいましげに城之介を振返った。
「――駄目だよ。お若い旦那方は、顔色を変えやがった。あたし達だけで、出かけようよ……」

二

向両国――大川を九十六間の両国橋で本所へ渡ったすぐ右手の尾上町に、奇妙な形の看板が出ていた。
朝顔型の大行燈で、正面の上には赤い牡丹の花、下には〝山くじら〟と書いてあった。右と左の横ッ腹には、赤い紅葉の葉ッぱを散らして〝もみじ〟と黒く書いてあるのだ。
これが、〝けだもの屋〟とも、〝ももんじ屋〟とも呼ばれた港屋だった。
なんと言っても一番の売り物はイノシシの肉だったが、その他に看板に出ているシカやサクラと呼ばれた馬肉、カモなど鳥の肉も売っていた。
「――おや……」
港屋に近づいたとき、三九郎が、ふッと立ち止まって、城之介を見た。
「珍しいのがいるぜ……」
そう言って、港屋の店の方を顎でしゃくる三九郎に、城之介が、うなずき返した。
「――すばしりのお銀ですね」
「めッぽう、色ッぽくなりやがったなア」
そんな話し声が聞こえたのか、港屋の店先に立っていた女が振返った。

「おや、旦那方でしたの？」

女は、〝すばしり〟と異名をとった、お銀と言う女スリだった。——両国の広小路を稼ぎ場にしていたが、時には、日本橋辺りへも出没して、いままで、二、三度奉行所へお手数をかけていた。

「——お前エ、いいのでも出来たのかい？」

「おや……、いけすかない……」

お銀は、色っぽい目で、三九郎を睨み返した。

「だってさ。あたし達の調べでは、お前エはひとり暮らしの筈だ」

「そうですよ。お蔭さまで、あれ以来、ずーッと、味気ない暮らしをしてますのさ」

「山犬の仙太郎が高飛びをしてから、二年になるかな」

「旦那……」

お銀は、ひと目をはばかるように、辺りを見廻した。

「いいから、ついて来な……」

三九郎はお銀にそう言うと、浜屋へ入って行った。

浜屋では、小売りもしたし、客をあげて、獣肉を食わせる座敷の用意もあったのだ。

「——旦那、見逃がしておくんなさいよ」

お銀は、座敷の入口に坐って、三九郎と城之介の顔を眺めた。

「——お銀……、ここへなにしに来たんだい？」

「牡丹を買いに来たんですよ。いけませんか？」

「悪かアねエさ。が……、寒中獣肉を食えば、精を補い、気を益し、血脈を調う……と、ここのチラシにゃア書いてある。まッことお前エがひとり暮らしなら、牡丹を食って、困りゃアしねエかい？」

「どうしてでしょう?」
「男はいいさ。精がつき過ぎりゃ、吉原へ行こうが、岡場所へ駈け込もうが、相手にする女に困りゃアしねエ。そこへ行くと、女は気の毒だ」
「そうでもありませんよ。女だって、役者も買えれば、かげま茶屋へ遊びにも行けますよ」
「おい、芝神明前のかげまの相場はいくらだい?」
「さア……」
お銀が、ツンと横を向いた。
「ざまア見やがれ。あたしゃお前エをからかったんじゃねエぜ。お前エは、かげまの相場も知らねエ。つまり、役者や色若衆を買ったことはねエんだ。包みかくさず申上げな」
「話そうにも、話すことがありませんよ」
「浮気の相手は誰だい?」
「そんなものは、ありませんよ」
「じゃ、仙の字が戻って来たのかい?」
「帰って来る筈がないでしょう」
「そろそろホトボリのさめる頃と考えて、江戸へ舞い戻って来る頃だよ……。が、まアいいや。まだ戻っていねエものとして、仙太郎はいま、どこにいるんだい?」
「知りませんねエ。江戸を飛び出してッたきり、音沙汰無しですからねエ」
女中が、シシ鍋とシチリンをはこんで来たので、三九郎はお銀を許してやった。
「けッ! 情夫があるに違げエねエぜ、お銀にゃ……」
三九郎が、いまいましげに言った。

「あるでしょうなア」

「花吉か三日月の万五郎だと思うが、どうだろう？」

花川戸の吉蔵……、花吉と呼ばれるいい男だった。万五郎は、左の頬に、三日月なりの刀傷があった。——共に、両国から本所、深川にかけて、ひとさまのふところを狙うスリだった。

「二人共、仙太郎の弟分でしょう」

「どうせ商売往来にねエ御政道の裏を歩く連中だ。兄弟分の情婦だろうがなんだろうが、構っちゃアいねエさ」

「それにお銀の目つき、体つき、きらいな方じゃなさそうですからなア」

「きらいなもンか……」

三九郎は、煮え立ったシシ鍋をつつきながら、クスリッと笑った。——どんなに熱い肉を口へ入れても、やけどをしないのがシシの面白いところである。

「わけがありそうですね？」

「両国の見世物小屋で、お銀が、お店ものらしい男のふところをハタこうとした。その手をあたしが摑んだ。するとね、お銀のやつ、少しも騒がずニヤリッと笑って、そのままあたしの手を内ふところへ引ッぱり込み、やわらかいおッぱいへ押しつけやがった」

「どうしました？」

「——ふざけんな……ッてね、あたしゃ手を引こうとした。ところが、逆にお銀の方が離さねエ。小声で、こう言いやがった。——あたしン家、すぐ近くなんですよ。ネコが一匹いるだけなんです……ッてね」

「行きましたか？」

「行かねエよ……」

三九郎は、熱い肉を口の中で、フーフーと転がした。

「かりにも、定町廻りの旦那だからな……。いくらいい女でも、女スリと寝るわけにゃいかねエやな」

「その頃、仙太郎はどうしてたんです？」

「もう、高飛びしたあとだったよ」

山犬の仙太郎は、スリ仲間ではいい顔だったが、ふところを抜く腕は大したものではなかった。狙った相手に喧嘩を吹きかけ、なぐりつけ、蹴飛ばし、相手がひるんだ時に胸ぐらをとって、こづき廻し、その間に財布や巾着を奪う……と言う荒っぽいやり方だった。

誰かれなしに噛みつく……。それで山犬と異名をとったのだが、その腕っぷしの強さで、スリ仲間の兄貴株となったのだった。

「お銀も、力づくで、情婦にされていたのかもしれませんな」

「始めはそうかもしれねエな……。が、お銀だって、仙太郎のガッチリした体は、まんざらいやだったとは思えねエよ。おッと、そうそう……」

三九郎は、窓をあけた。——座敷は大川に面していたが、その窓をかすめて、白いものが、チラチラと、大川へ舞い落ちていた。

「とうとう降り出しましたなア」

「うム……。あの辺りだよ、お銀が住んでた家は……」

三九郎は、対岸の薬研堀の辺りを指さした。

「やっぱり、お銀の家へ行ったんですね？」

「え?!　いやア、そうじゃねエけどさ……」
三九郎は、ちょいと照れたように笑ったが、その笑いが、ふッと消えた。
「――城之介、ちょいと、待ってな……」
三九郎は、あわただしく座敷を出て行ったが、すぐ、長い遠眼鏡を持って戻って来た。
「――帳場から借りて来たんだ……」
そう言って、三九郎は対岸を眺めていたが、すぐ、それを城之介へ渡した。
「のぞいてみな……、米沢町のはずれ、薬研堀と元柳橋のあいだ辺りを……。河岸ッぷちの仕舞家で、川に向って障子をあけ放してる家があるだろう」
「あ――！」
その家をさがし当てた城之介が、思わず驚きの声をあげた。――いまさっきここを出て行ったすばしりのお銀が、ひとりの男と肩をくっつけ合うようにして、鍋をつついている姿が、遠眼鏡で、手にとるように眺められたのだ！
「――由良さん！　あの男は……」
「そうよ、御存知、山犬の仙太郎さ……。スリ損った相手を殴りつけ、大怪我をさせて高飛びした、おたずね者の仙太郎だよ」
「どうします？　江戸へ舞い戻ったおたずね者、放っておくわけにゃ行かねエでしょう」
「まア……、急ぐこたアねエやな……」
三九郎は、城之介の手から遠眼鏡をとると、再び対岸を眺めた。
「お銀のあま、素ッとぼけやがって、やっぱり、仙太郎が戻ってやがった。あッ……、糞ッ！」
三九郎が、奇妙なうなり声をあげた。

「どうしたんです、由良さん？」
「お銀のあま、仙太郎に獅噛みついて、口を吸ってやがる……。あ、仙太郎の手がお銀の裾へ……。畜生ッ！　お銀め！　煙管にひっかけて、障子を閉めやがった……」
三九郎は、ガッカリしたように、遠眼鏡を顔から離したが、やがて、吐き出すように言った——
「——行こう、城之介……。行って、仙太郎のやつをふン縛ろう！」

三

寒い川ッ風が、両国橋を渡る三九郎と城之介の裾を吹きあげた。
五時を過ぎて、そろそろ川面を宵闇がはい上がり、雪は次第に激しさを加えていた。
城之介は、ちょいと馬鹿々々しい気がしないでもなかった。
舞い戻って来た山犬の仙太郎は、いずれ、なんとかしないわけにはゆかない男だ。が……、スリと泥棒は違う……。
スリ……、つまり巾着切りだが、御法でも、ちゃんと区別されていた。——泥棒は、盗んだ金が十両を越えると、死罪——首をはねられた。ところが、巾着切りは、金高の多少にかかわらず、たいていは、たたき放しだった。
余程お奉行から憎まれていた巾着切りでも、せいぜい入墨で済んだ。
しかし、——くじら三ツに満つれば死罪……と言う定めもあった。〝くじら〟とは、腕にいれる入墨の筋のことだ。この筋が三本入ると、スリでも首を斬られたわけである。
だが、捕まっても多くの場合は〝たたき〟で済んだし、入墨の場合も、〝入れ直し〟と言って、

一度いれた墨の上へ重ねるだけの場合が多かったので、なかなか死罪にはならなかった。

——巾着切りは、起きている人間から、堂々とふところを抜く。ただの泥棒とは違うのだ……と、スリも考えていたし、役人達もそう考えていたのだ。

その巾着切りの山犬の仙太郎が、久し振りに江戸へ帰って、恋しい女のお銀と抱き合っている。

「——そんなところへ踏み込むのは大人気ない。きょうくらいは見逃がしてやってもいいのに……」

城之介は、そう思ったのだ。

しかし、三九郎は、鼻の頭を寒風に赤くして、息をはずませていた。

「——お銀のあま、ふざけやがってッ」

「由良さん、とッ捕まえるなア仙太郎で、お銀じゃねエでしょう」

「き、決まってらアね。やつアおたずね者だぜ」

「フフフ……、由良さん、お銀の味をみたことがあるんですね？」

「そ、それとこれとは、別だよ」

「フフフ……、わかるような気がしますよ」

「城之介、あたしゃ何も、焼き餅をやいてるわけじゃねエぜ」

「そうでしょうとも……、仙太郎は、確かにおたずね者ですよ」

「そうなんだよ。仙太郎が舞い戻ると、また巾着切り共がのさばる。少くともだな、花吉や、三日月の万五郎が、肩で風を切るこたア間違いねエ。その他にも、弁天お春や、おさすりお蝶が、また稼ぎまくることは明らかだ。この連中は、仙太郎の仲間だからな。あたしの考えは間違ってるかい？」

「いや……、そうかもしれませんね」

「賭けてもいいぜ。仲間のやつ等は、仙太郎の腕ッ節が頼りだ。やり損ったときにゃ、仙太郎が飛び

出して暴れ、そのスキに、逃げちまうんだ」
「そうかもしれませんねエ」
「気のねエ返事をするなよ。とにかく、仙太郎を押さえなきゃ、両国界隈が騒々しくなる。だから、あたしゃ――」
「わかりましたよ。じゃ、仙太郎を、とッ捕まえますか……」
それからしばらくして、薬研堀に近い仕舞家の格子戸を、三九郎が手荒く開いた。
「――お銀！　由良三九郎だ。上がるぜッ」
が……、家の中は、シーンと静まり、返事はなかった。
「けッ！　居留守は通用しねエぜ。ちゃーんとお見とどけの上でのお出張りだ――城之介」
三九郎は、城之介に合図をして、さっき、川向うから眺めた座敷へ踏ン込んで行った。が……、あ……と、二人は、息を呑んだ。
プーンと、こげ臭い匂いが、鼻をついた。鍋が、煮つまっているのだ。
その鍋の横に、裾を乱して、男と女が、倒れていた。
「――いけねエ……。死んでやがるッ」
お銀の手を握った三九郎が城之介を振返ってそう言ったとき、突ッ伏していた仙太郎が、苦しげに顔をあげた――
「――フグ……、フグにやられた……」
そう言うなり、仙太郎は、ガボッと血を吐き、二度と動かなかった……。

四

「――フグ?! さっきの話じゃ、お銀は牡丹を買いに来ていたと言うことだったが……」

次ぎの朝の定町廻り同心部屋で、同心筆頭の早水茂太夫が、けげんそうに由良三九郎と千秋城之介とを見比べた。

「おッ死ぬ前に、山犬の仙太郎がフグだと言いやがったんですよ。ところが……」

三九郎は言葉を濁して、城之介へ顔を向けた。

「ところが、どうかしたのかい?」

次席の高瀬儀右衛門が、城之介へ促すように言った。

「はア……。あたしは、煮つまってる鍋を調べて見ました。仙太郎とお銀がつついたなア、フグじゃないと思うんです」

「やっぱり、牡丹かい?」

「いいえ……カモだと思います」

「カモ?!」

高瀬儀右衛門と早水茂太夫が、顔を見合わせた。

「牡丹のイノシシが、テツのフグにかわり、それが二転してカモになった……。妙な話じゃないか」

「妙な話ですよ。しかし、あの鍋にこびりついた脂から判断して、フグだとは思えません。あれは、カモの脂です」

「フグとカモじゃ、味が違うだろう」

そう言う儀右衛門に、三九郎が、ニヤリッと笑った。
「フグはうまいですよ。が、カモもうまいですからなア……。従兄妹同士はカモの味なんてね。チンチンカモカモと言う言葉もある程ですから」
「学があるねエ、由良の旦那は……」
儀右衛門の言葉に、日下兵馬と三保木大学がクスリッと笑った。
「笑いごとじゃねエよ」
三九郎は、若い二人を睨みつけてから、茂太夫の方へ顔を向けた。
「もし、城之介が考えるとおり、フグでなくてカモだとすると、お銀と仙太郎はなぜ死んだんです？フグにゃ当ったッて話をちょくちょく聞きますよ。しかし、カモにあたったッて話は――」
「聞いたことがないねエ」
茂太夫は、そう答えてから、城之介を見た。
「仙太郎は、血ヘドを吐いて死んだんだね？」
「はア……、ドス黒い血でした。いままでにも、二、三度あんな色の血を見ています。全く、毒殺でした」
集まっていた五人の定町廻り同心は、城之介の言葉に、一様に黙りこくった。
「――旦那……」
上りガマチの障子をソッとあけて、勘弁の勘八が、遠慮がちに、城之介へ声をかけた。
「勘の字か……。モモンジ屋へは、行ったのかい？」
「へえ……。お銀のことは、よく覚えてましたよ。イノシシの肉を、三百文がとこ買って帰ったと言ってます」

「牡丹を?!」

城之介は、そう言ってから、三九郎を見詰めた。

「あー、煮つまってたから、よくはわからなかったが、あっしもあの鍋のものが牡丹だとは思わねエなア」

「その鍋はどうした?」

茂太夫が、城之介にたずねた。

「柳橋の自身番へ持たせました」

「一度、確かな料理人に調べさせちゃアどうだい……」

「はア……。早速、やってみましょう」

それから一時間ばかりして、城之介と三九郎が柳橋の自身番へ行くと、もう、勘八が、料理人を三人、自身番へ呼んでいた。

三人のうち、二人は柳橋の料理屋で働いている板前と煮方、残るひとりは、川向うのモモンジ屋港屋の職人だった。

「――待たせたなア……。こいつを見て貰いてエ……」

三九郎は、土間の隅においてあった包みを、番屋の男に持って来させると、包みを解いて、中の鍋を見せた。

「――わが身を亡ぼすとも知らず、よく食いやがったよ、全く……。しかし、二きれか三きれ、こびりついてる。これがなんの肉だか目ききをして貰いてエ」

三人の料理人は、ペコリと頭を下げると、同時に、鍋の中をのぞきこんだ。

煮つまって、汁はなくなり、黒くひからびた肉片が二ツ三ツ、野菜といっしょに、鍋の底へ、はり

ついていた。
「――どうもこいつア……」
中年の男が、困ったように、首筋を掻いた。
「――お前エの名は？」
城之介が、男にたずねた。
「へエ……、柳橋〝川長〟の板に坐ってる粂吉と申します」
「庖丁を握って、どれくらいになる？」
「かれこれ二十年で……」
「それでも、これがわからぬのか？」
「魚だってことはわかりますが……、アンコウだか、コイだか、フグだか……」
「魚肉だと言うのか?!」
城之介が、せきこんで、念を押すと、粂吉は、自信なさそうに、頬を撫でた。
「――お前エは？」
三九郎が、若い男にたずねた。
「へエ……、板前さんにわからねエんですから、あっしなどにはとても……」
「お前エ煮方だそうだが、粂吉の下で働いてるのかい？」
「へエ……。四年ばかり、働かせて貰ってます。伊三郎てんで……」
三九郎と城之介は、ガッカリして、三人目の男――港屋の職人へ視線を向けた。
「吾八と申します」
そう言う男は、五十がらみだった。

「どう考える。モモンジ屋の職人なれば、魚肉か、鳥肉か、獣肉か、その区別は出来るであろう」

そう言う城之介へ、吾八がすぐ答えた。

「けだものの肉ではございませんよ」

「では、鳥肉か、魚肉か？」

「その前に旦那……、フグ作りてエのをご存知でしょうか？」

「知ってるよ。川魚の身などを、紙のように薄く刺身にするのだろう」

「それを、カモでもやるんですよ」

「カモを、刺身で食うのか？」

「食えますよ。うまいものです。だが、カモ鍋を、フグ作りにしたカモのササ身でやることもあるんです」

「なにを言おうてんだい？」

「フグ鍋も、ぶツ切りでやるとは限りません。刺身のように、薄くしたやつで鍋をすることもあるんです。とすると、ちょいと見ただけじゃ、フグ鍋かカモ鍋かわからなくなりますよ」

「つまり、この鍋では、見わけがつかぬと言うのか？」

「こう消し炭みてエになっちゃっては、見ただけじゃわかりません。一ツ、食ってみましょうか」

城之介と三九郎は、顔を見合わせた。

——この鍋のものを食って、お銀と仙太郎が死んでいる。まさか、吾八に食ってみろとは言えなかった……。

五

城之介は、薬研堀のお銀の家へ廻ってみた。

「――おや、旦那……」

仇っぽい女が、貧乏徳利を、半てんの袖で抱くようにして、お銀の家から出て来た。――年の頃二十六、七……。江戸前のスッキリした細面で、殊に目もとの色気が凄まじかった。

「えーと……、そうそう、おさすりの姐御だったッけ」

「いけすかない！　旦那から姐御なんて言われると、ゾーッと背筋がチリ毛立っちゃいますよ」

ひと呼んでおさすりお蝶……。両国の見世物小屋で平場を稼いでいる女巾着切りだった。――娘の綱渡りや、女太夫の足芸に、ポカンと口をあけている男達が、お蝶のお客さまなのだ。ソッと男に近づいて、さりげなく、男の手を握る。男の目からは、お蝶も、曲芸に見とれて、思わず男に綯りついたとしか思えない恰好なのだ。

――いい女だ……

そう思って、お蝶の手を握り返したり、肩を抱いたり、背中さすったり……。そしてふッと気付いた時には、ふところを抜かれ、女は消えている……と言ったわけなのだ。

見世物の見物衆からスリ取るのを平場を稼ぐと言う。男に体をいじらせる……、だから〝おさすり〟の異名が生まれた。

――いい女でなければ出来ないスリの手段だった。

「――旦那、まアおあがんなさいよ。すぐお酒を買って来ます」

「いやに浮き浮きとしてるじゃねエか」
「ホホホ……、酔った時にゃ、こわいものなしですからねエ……。でも、この辺りのやつは不人情もの揃いですよ。お銀がフグで死んだてエのに、酒も持って来なきゃ、煮しめも出さない。仕方がないから、自前で飲んでるんですよ」
「自前と言うが、それももとはと言えば他人さまの銭だろう」
「――おや、あたし達が、何をしたと言うんです……と、他のひとへなら啖呵を切るところだが、こんなセリフ、旦那にゃア通用しませんねエ」
お蝶はケラケラと笑いながら、駈け出して行った。
家の中では、別の女スリが、立て膝で茶碗酒をひっかけていた。
「――なんだ、お町の旦那ですかア……」
弁天お春と呼ばれる女だった。――年はお蝶と同じくらいだろう。お蝶ほどいい女ではなかったが、体は遥かに豊かで、温かそうだった。
「仏は？」
「いましがた、花吉と万五郎が、花川戸の寺へはこんで行きましたのさ」
「そうかい……。線香でもあげる積りで来たのだが……」
お春は、茶碗を持った手を立てた膝にあずけて、ジロリッと、城之介を見た。
「旦那……。あたし達の泣きどころを心得ておいでのようですけど、あたしは、その手にゃア乗りませんよ」
「どうしてだい？」
「お線香の一本でも……なんてお町の旦那に言われると、つい、ホロリとしてしまう……。そんなあ

たし達から、何を聞き出そうッて言うんです」
「お前エ、あまり酒癖のいい方じゃアねエなア」
「そうでしょうかねエ」
「あたしゃね、妙な因縁だと思ってるんだ。——きのうの夕方近く、お銀と話をしている。お銀と仙太郎が、この座敷で抱き合ってるところを見ている」
「嘘ッ！」
「本当なんだ。実ア、川向うのモモンジ屋の座敷から、遠眼鏡で眺めたんだ。それで、仙太郎が江戸へ戻ってることを知り、お縄にしようと、ここへ乗り込んで来て、二人が死んでいるのをめッけた」
「へエー、そう聞くと、尽きせぬ縁があったようですねエ」
「だから、定町廻り同心に巾着切り夫婦としてではなく、ただの知りあいとして、線香をあげに来たのさ」
「旦那……」
お春は、膝を直して、コックリと、頭を下げた。
「勘弁しておくんなさい。ひがみッぽいんですよ、育ちが悪くッてね」
「恐れ入ったなア。すばしりのお銀、おさすりお蝶、弁天お春……、女だてらの巾着切りだ。育ちがいいたア思わねエ、そう神妙に出られると、なんと言ったらいいのかわからなくなっちまうぜ」
「みんな苦労してますよ」
「そうだろうとも……。親のため、好きな男のため、いつか陥ち込んだ渡世だろうよ」
「ちょいと待っておくんなさい……」
お春はそう言うと、ヨロヨロッと立ち上がり、スルスルスルと帯を解くと、フワリッと、肩から着

物を落して、城之介へ背中を向けた。
「ふーム……、美事だ！」
思わず、城之介が、お春の背中を見詰めた。——琵琶を抱いた弁財天……。それも、素ッ裸の若々しい弁天さまが、お春の白い背中に、色あざやかに刺青されていたのだ！
「あたしゃ、巾着切りの娘なんです」
「そうだったのかい」
「だから、いつの間にか、指先を動かすことを覚えちゃいました。親のために、スリになったのじゃありません。また、男のためでもありませんよ。嘘だとお思いでしょうけど、あたしゃこの年まで、男を知りません」
それから、お春が、クスリッと笑った。
「いつだったか、花吉のやつが、あたしを手ごめにしようとしたことがあるんです」
「やつアいい男だ。巾着切りの他に、大勢の女を泣かせてるッてことも聞いている」
「あたしゃその時、素ッ裸になって、うつ伏せになりましたよ。——さ、この弁天さまを汚せるものなら汚してごらん……てね。花吉のやつ、シュンとしちゃいましたよ」
「なる程、男除けの弁財天かい」
お春は着物を着て、帯を締めた。
「こんな渡世をしてると、つい、やけッぱちで、男と寝ちゃうんですよ。お蝶だって、それで苦労してるし、お銀だって、仙太郎と出来なけりゃ、嫌いなフグをつきあうようなこともなかったでしょうよ」
城之介が、ハッと、顔をあげた。

「お銀は、フグが嫌いだったのかい？」
「昨日のお昼前のことですよ。人なみにあたしがすす払いをしてると、御丁寧に、頬ッかぶりをして、すすまみれになった仙太郎が、ヒョッコリ、あたしンとこへやって来たんです」
「すす掃き姿で、人目をだまくらかしたのか？」
お春が、コックリうなずき返した。
「――じかに薬研堀に戻るのはヤバい。夕方までに戻るから、フグ鍋をして待っていろ……、そうお銀に伝えてくれと言うんです」
「伝えたのかい？」
「伝えましたよ。するとお銀が、ギョッとしたような顔で、フグはいやだ……と言うんです。――じゃ、カモをフグ作りにしなよ……と言うと、お銀がよろこびました。――カモならあたらないね……ッて」
「ところが二人は死んだ」
「仙太郎が、カモでは承知しなかったんですよ。でも、すす払いの日にフグをたべるなんて、馬鹿ッちゃありゃアしない」
「あー、そうか」
――フグ売りに十三日は厄日なり……と言う川柳がある。すすのついたフグを食うと命とり、仏壇へ供えるシキミとすすは、フグの大禁物なのだ。
「さっき、あたしゃお銀と、きのうの夕方話をしたと言ったろ。それは、モモンジ屋でなんだ。お銀は、牡丹を買いに来た……と言ってたが、妙だと思わねエかい？」
「カモを買いに行ったんですよ。でも、おたずね者の仙太郎にたべさせるカモなんで、とっさに、牡

丹……と、嘘をついたんでしょう」
「しかし……、モモンジ屋でも、牡丹を売ったと言ってるんだ」
「吾八……、職人頭の吾八が言ったんでしょう？」
「吾八を知ってるのかい？」
お春が、クスクスッと笑った。
「あたし達はね、よく牡丹やカモをたべに行くんですよ。すっかり顔馴染み……。ところが、吾八がね、お蝶に足駄をはいちゃったんですよ」
「首ッたけかい？」
「なにしろ、お蝶は色ッぽいから……。吾八のやつ、年甲斐もなく……」
「それでお蝶は？」
「柳に風……。お蝶はお蝶で、花吉にのぼせてますからねエ」
それからお春は、ホーッと、溜め息をついた——
「どうして、あんな箸まめな男にのぼせるのかねエ。いろ男でござい……と書いた荷札を鼻の頭へぶら下げているような男、あたしなんか、まッ平なんだけど……」

六

〝川長〟は、柳橋では指折りの料理屋だった。——グルリッと囲んだ黒板塀の裏口で、勘弁の勘八が、使いから戻って来たらしい〝川長〟の女中をつかまえていた。
その日の八時ちょいと前……。辺りは暗く、四、五間先の河岸ッぷちに城之介はしゃがんでいたの

だが、女中は気付かなかった。
「――向う両国から来た。お前エだけに話したいことがある……、そう伊三郎へ耳打ちしてくんな……」
勘八は、いかにもやくざっぽい様子で女中にそう頼んだ。
しばらくすると、手拭いで片襷をした煮方の伊三郎が、あわただしく、くぐり戸から出て来た。
「――伊三かい？」
「なんだ、お前エは？」
そう言って闇をすかす伊三郎の前へ、グィッと十手をつきつけた。
「あ……親分で?!」
「大番屋まで、つき合って貰おうか」
「えッ?!」
自身番でなく、大番屋と言われると、伊三郎が、ギョッと顔色を変えた。――大番屋に連れて行かれると、まず間違いなく御牢送りだったからだ。
「親分、なんだって、あっしが――」
「白らッばくれるない。いま頃、モモンジ屋の吾八もひッくくられているだろうよ」
「あッしゃ、何も知らねエ。ただ、――何をたずねられても、わからねエ……と言え。そう吾八兄貴から言われただけなんですよ」
「吾八が？　間違いねエな？」
「嘘は申しませんよ。あッしも、板前の粂吉兄貴も、そう言われたんです。それに、あッしゃ本当に、あの鍋の肉の見わけがつかなかったんですから、吾八兄貴から頼まれなくたって、――わかりま

せん……としきゃ言えませんでしたよ。ね、親分。勘弁しておくんなさいな。妹が、病でろんで……、あっしが大番屋へ連れて行かれると……」

それからしばらくして、城之介が浅草に近い駒形堂へ近づいて行くと、荷を降ろしていた二八そば屋のやたいの陰から、ドンブリを持った三九郎が立ち上がった。

「――おう、ここだよ……。寒くッてやり切れねエ。ちょいとあったまっていたところさ」

「あたしも、つきあいましょう。一本つけてくんな……」

城之介は、そば屋へそう酒を注文して、三九郎に並んだ。

「やっぱり、吾八のカラクリでしたよ」

「そうかい……。いま六助がしらせに来たが、〝おさすりの〟家にゃ、花吉が来てるそうだぜ」

「そいつア、ちょいと面倒なことになりそうですなア」

「吾八が、やって来ると言うのかい？」

「来ると思いますねエ……。お銀と仙太郎が死んだからッて、吾八があたふたすることはない筈ですよ。それが、粂吉や伊三郎の口をふさいだと言うのは、誰かから頼まれたからでしょう」

「おさすりのお蝶に頼まれた……と言うのかい？」

「惚れてるんですよ、吾八は……。五十近い野郎の恋ッてなア、手がつけられませんよ」

「フフフ……。城之介、年寄りみてエなことを言うぜ……」

が、三十分もしないうちに、城之介の考えは当った。勘弁の勘八が、川ッ風の中を、すッ飛んで来たのだ。

「――旦那！　吾八の野郎、お蝶の長屋へ入ってきましたぜ」

「よし……。由良さん、行ってみましょう」

おさすりのお蝶は、駒形堂に近い裏長屋に住んでいた。
「――旦那、旦那……、女ひとりに、男が二人。こいつアただでは納まりませんぜ」
長屋の木戸口へ飛び出して来た六助が、大げさな身振りで、そう告げた。
お蝶の家では、花吉とお蝶が仲むつまじく行火に入って、さしむかい……。差しつ差されつ酒を飲んでる横ッちょに、五十男の吾八が、眉を吊りあげて、突ッ立っていた。
「――邪魔だよ。消えちまいな……」
花吉が、からかうように言った。
「おう、消えるとも！　そのかわり、明日とはいわず、この足で、お奉行所へ訴え出てやるぞッ。お銀と仙太郎に毒を盛ったなア、巾着切りの花吉って野郎でございますッて」
「うるせえッ！　毒を盛ったって、証拠があるかッ?!」
「あるとも！　あの鍋の肉はカモだ。当る気づかいはねエ。それを、フグに当ったと見せかけたのは、鍋に毒が入れてあったからだ。そのことがバレては困る。だからお蝶がおれに、フグだと言ってくれと頼みに来た」
「お前はそれを、鳥だか魚だかわからねエ……と言ったんだってな」
「おれも年季を入れた職人だ。フグとは言えなかったから、わからぬと言ったんだ」
「つまり、お役人をだまくらかした。そのお前エが訴えて出る……と言うのかい？　お前エもいっしょに、しばり首。軽くて遠島だぜ」
「糞ッ！」
吾八が、手近にあった徳利を振り上げた。
「――待ちな！　その裁きはおれがつけてやるぜ……」

ガラリッと表戸をあけるなり、三九郎が大声で怒鳴った。

「――花吉は、お銀とも出来ていたんです。が、出し抜けに仙太郎が戻って来たので、花吉はあわてた。暴れものの仙太郎が、何をするかわからない……。丁度、モモンジ屋でカモを買ったお銀が、相談にやって来た。それで、ソッと、鼠とりの岩見銀山をカモにふりかけちゃった……ッてわけです」

城之介が、早水茂太夫へそう説明すると、三九郎が言葉を続けた――

「――ひでエ野郎ですよ、花吉は。お銀まで殺しちゃうなんて、もったいねエよ、全く……」

娘七福神

一

「――お宝、お宝、お宝……」

静かに更けた元日の町に、宝船売りの声が、遠く近く聞こえていた。

「――買いましょうか？」

女師匠のお薬が、城之介を色っぽいながし目で見た。

南町奉行所定町廻り同心千秋城之介……。父親のあとをついで奉行所勤めを始めて五度目の正月だった。

いまだに独り身……。家のことは万事小者の勘弁の勘八にまかせて、たいていは京橋に近い竹川河岸のお薬の家に来ている。――お薬との仲も、五年越しであった。

「――いまいく刻だい？」

「かれこれ十一時でしょうよ」

「売れ残りの宝船だぜ」

「だって、いいじゃないの……」

かなり酔っているお葉は、長火鉢越しに、シットリと、城之介の手を握った。
「――まず初春の暦には、ここちよいぞやひめ始め……」
低いが、さすがによい声だった。
「はっきり催促したなア」
「なにをさ？」
「勿論、当方もその積りで来ているのだ。言われなくたって、ひめ始めの行事は取り行ないますがね」
「え!?」
「〝梁塵秘抄〟に曰く、――正月始めて馬場殿に於て馬を御するを飛馬始めと言う……とね。また〝資兼王日記〟には、――諸社の遥拝の後、三献これあり、つぎに看経、次ぎに火水始め……とある。火と水、つまり炊き初めッてわけだ」
「ねエ、あんた、なにを喋ってるのさ、ベラベラと」
お葉が呆れたように城之介を見詰めたが、城之介は、洒ア洒アとお喋りを続けた。
「しかし、こんなこたア、どうもこじつけ臭せエよ。天明年間に出た〝故実大宝〟と言う書物に、ズバリッと、こう書いてある。――ひめ始めのこと、古来諸説紛々なれど、みなとるに足らず、古より世俗の伝承せる男女まじわりの始めこれなり。それ、子孫増大の大本、人間第一の大礼なりと言えども、その行は人の前にてすべきことにあらず。即ち、ひめ始めは秘め始めなり……ッてわけさ」
「なんだか難しいけど、――男女まじわりの始めなり……ッてとこだけわかったよ」
「フフフ……、一番肝腎のところさ、そこが……。早く言えば――かかアどのさアひめ始めと馬鹿をゆい……ッてわけだ」
「その方がわかりがいいねエ」

そう言って、ニッコリほほ笑むお葉の手を、グッと引き寄せて肩を抱いた。
「ぼちぼち、人間第一の大礼にとりかかるとするか」
「馬鹿ア……。ねエ、やっぱり、宝船を枕の下へ入れたいねエ」
「――女房と相乗りにする宝船……か」
「一枚買いましょう……」
お葉は、城之介の手を押し除けて、よろよろと立ち上がり、表側の窓を開いた。
「――お宝、お宝、お宝……」
三声ずつ呼ぶ宝船売りの声が、ちょいと遠かった。
本当は、大晦日から元旦へかけて見る夢が初夢である。しかし、大晦日の夜は殆んど寝ずに過ごす町家では、元日から二日にかけての夢を初夢と考えた。
どうせ見るなら景気のいい夢がいいに決まっている。そこで、宝船売りと言う商売が出来たわけだ。
七福神を乗せた宝船の絵を一枚ずりにして、これに画讃をつける。
――なかきよのとおのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな……。
長き世の遠の眠りのみな目さめ浪乗り舟の音のよきかな……と言う歌だが、上から読んでも、下から読んでも同じ文句になる廻文だった。
この絵を買って、枕紙にしたり、枕の下にひいたりして寝ると、よい夢を見る……と言うわけなのだ。
――一富士、二鷹、三なすび……と、夢にも等位があり、――めでたさは夜舟で春の富士を見る……と言う川柳がある。

「――寒いぜ……。窓を閉めな」

城之介がそう言うと、お菜はクスリッと笑った。

「なかなか宝船が港へ入ってくれないんだよ」

――宝船売り、まだ近くへやってこない……と言う洒落だったが、その時突然、にぎやかな囃子が、裏側から聞こえて来た。

「――なんだろう。元日の夜だと言うのに……」

お菜がいぶかしそうに、座敷を横切って、裏側の障子をあけた。

――裏は、京橋川だった……。

外濠の鍛冶橋御門から中ノ橋、京橋、中ノ橋、白魚橋、中ノ橋、そして、稲荷橋から海に出るのが京橋川だった。

中ノ橋が三ツあるが、中間の橋と言う意味で、江戸の人々はこんなことを気にしなかった。

それどころか、竹川河岸の東側――つまり京橋川で言えば竹川河岸の下流の町を竹町と呼んだ。しかも、江戸には、竹町と呼ばれるところが六ツもあるのだ。

浅草竹町、下谷竹町、駒込竹町、麹町竹町、四谷竹町、そしてこの京橋竹町……。

京橋竹町は、この川岸にずらりと竹の問屋が並んでいたからで、本当の町名は炭町だったが、いつか炭町ではどこのことかわからず、京橋竹町の方が通りがよくなっていた。

囃子は、京橋川の川下から聞こえて来た。

白魚橋辺りから、だんだん大きく聞こえて来たが、すぐとなりの竹町に来ると、一段とにぎやかになったが、やがて、カン高い幾人かの女の声も聞こえて来た。

「――お宝、お宝、お宝……」

「――めでたい宝船……」
「お宝、お宝、お宝……」
「――尾張屋さんへ宝船を着けましょう……」
いつか、城之介も、お薬と並んで、声の方を眺めていた。
一日(ついたち)の空には月がなく、川面はまっくらだったが、どうやら、女達は船から呼びかけているようだ。
「――尾張屋と言うと――」
「竹問屋……。この河岸では一、二と言っていいんじゃないかしら?」
「それは知ってる。確か女主人だったな?」
「旦那が去年……、じゃない、きょうとなっては一昨年なくなって、おかみさんが店を切り廻しているそうだけど……」
「確か、後妻だったな」
お薬が、こっくり、うなずいた。
「本当は、先妻に出来た山三郎ッてあととり息子があったんだけどねエ」
「覚えてるよ。お香、山三郎心中ばなし……、あれは、由良さんの係りだったよ」
「やだねエ、あんた……。元日だってエのに、心中だの、先妻だのッて……」
「違げエねエ。もっと目出てエことを話そうか……」
その時、ちょっと静まり返っていた川下のほうから、またにぎやかな囃子が聞こえて来た。
しかも、段々それが近づいて来るのだ。
「――おや! 七福神だよ」
暗がりをすかしていたお薬が、驚いたように言った。

船が近づいて来ると、いくらか様子がわかった。

「――灯りを持って来な……」

城之介は、お葉に手燭を持って来させて、川の方へ差し出した。

とても手燭の灯では、はっきりしなかったが、それでも、七福神に仮装した女達が乗っていることがわかった。

それぞれ、それらしい着物を着て、顔には面をつけているのだ。

乗っているのは猪牙船だったが、漕いでいるのは毘沙門天だった。弁天さまが琵琶ではなく三味線をひき、大黒天が打ち出の小槌ならぬ小鼓を鳴らし、太鼓腹の布袋さまが太鼓を、恵比須さまが鉦を叩いていた。

「――まア、寿老人が笛で、福禄寿が拍子木を叩いてるよ。笑わせるねエ……」

お葉がそう言ったとき、城之介が、ちょいと首を傾げた。

「もうひとりいるぜ」

「あ、そうだ……。なんだろうあれは……」

「七福神の宝船に八人とは妙じゃねエか」

「酔っぱらってるようじゃないか……。男だよ、あれは……」

そんなことを言っているうちに、猪牙船は、お葉の家の下を漕ぎ抜けて行った。

「――おめでとうございい……」

「――お宝、お宝だよ……」

口々に叫ぶ女達の七福神を乗せた船は、やがて、京橋の方へ、見えなくなってしまった。

二

勘弁の勘八が、遠慮がちに、ソッと、お葉の家の格子戸をたたいたのは、二日の朝が、やっと明けかけた頃であった。

「――がさつもののお前エも、正月ともなれば、おしとやかじゃねエか」

「あたしだって、馬鹿じゃねエでしょう」

「うン、立派なもんだ。あたしが帰る前に迎えに来て、お葉から年玉をせびろうなんて、馬鹿じゃ出来ねエ芸当だぜ」

「旦那……」

勘八が、塩っぱい顔で生唾を呑みこんだ。

同心の外泊は禁じられている。――一応、表向きのことではあるが、城之介はいつも、白々明けに八丁堀へ帰ることにしていたのだった。

「正月ですぜ。せめて年に一度くらい、旦那が姐さんとこでゆっくりしたって、あたしがうまくとりつくろっておきますよ。あたしゃ、それほど不粋な男じゃありませんよ。だけど、妙な出来事があっちゃ、しようがねエでしょう」

「妙な出来事！」

「京橋の擬宝珠に、男が縛りつけられてやがったんで」

「京橋に?! 擬宝珠を縛ったのと違うのかい?」

「擬宝珠に男が縛りつけられてるんですよ」

「妙な話だぜ……」

城之介がこう言ったのにはわけがあった。——京橋の擬宝珠にかける左縄、結んでとける咳のまじない……と言う狂歌がある。つまり、どんなわけからか判明しないが、その頃の江戸には、京橋の擬宝珠を縛ると咳が止まる……と言う迷信があったのだ。

——京橋の擬宝珠罪なく縛られる……と言う川柳もある。

従って、擬宝珠だけが縛られているなら、格別のことはないが、それに人間が縛られていると、ことはいささか面倒になる……。

「男は、なにものだい？」

「わかりませんよ。四十六、七……。まッすぐにしようが、横にしようがどっちから見ても、ちょッとした大店の番頭ですよ」

「一ツ年をとったせいか、ちょくちょく気になることを言うじゃないか」

「なにか気に入りませんか？」

「まッすぐに見る……てエのは、どう言うことなんだ」

「だって、その野郎は、逆さまに京橋の男柱の擬宝珠に縛りつけられてやがんですよ」

「逆さま！　血が下るじゃねエか」

「下る前に、吹き出しちゃったようですよ」

「勘の字ッ！」

城之介が、キッとした声で、勘八を怒鳴りつけた。

「死んでるのかッ?!」

「ここんところから……」

勘八は、左の胸を押さえた。
「ドックドックドックと、体中の血を吹き出したってわけですよ」
「行こうぜ……」
京橋は、日本橋につぐ江戸名代の橋だ。通行人も多い。いくら朝が早くても、忽ち弥次馬が集まる筈だが、そんな連中の姿は、殆んど見えなかった。
——正月早々縁起でもねエ……、そう考えて、寄りつかないのだろう。
だが、左手で顎をつまみながら、ためつすがめつ、死骸を眺めている男がひとりいた。——同じく定町廻りの同心、由良三九郎だった。
「——よう……、お気の毒だなア……」
城之介を見ると、三九郎が、おかしな挨拶をした。
「何がです？」
「正月早々、死骸いじりッてなアどうだろうねエ」
「町医者は、元日から病人がやってくれば、本年は商売繁昌と喜ぶんじゃありませんか？」
「そうかもしれねエな」
「坊主は、元日からでも枕経を読むでしょうな」
「お布施にありつけるからなア。喜んで、死人に引導を渡すだろうよ」
「あたし達だって、これが商売ですよ。今年ア、いろいろと変ったことにぶつかりそうですぜ」
「しかし城之介……。こいつア少々、変り過ぎているよ」
三九郎が、死骸の方を顎でしゃくった。
なる程、変った死骸だった。——あらましを、勘八から聞いておいてよかった。もし、何も聞かず

にこの死骸を見せつけられたのなれば、城之介も思わず驚きの目を見張ったに違いないのだ。

男は、京橋の橋ぎわ、男柱の擬宝珠に、両膝と両足首を縛りつけられていた。そのまま、うしろへひっくり返り、ブラリン……と両手を下げて死んでいたのである。

こんな恰好になるのは、一度、擬宝珠の高さまで男を抱えあげて、縛りつけねばなるまい……。

城之介は、勘八へ顔を向けた。

「――お前エ、さかさに縛られていると言ったが、これはまともに縛られてから、体がうしろへそッくり返ったんだぜ」

「なんしろ、あたしが見たのは、やっと明るくなりかけた頃だったんですよ」

「最初に、死体をみつけたのは？」

「両替町の番太ですよ」

京橋は、両替町と畳町の間にかかっている橋だった。

「そうなんだ……」

三九郎も、うなずいた。

「番太が見つけ、町役人に報らせ、町役人から奉行所へ、奉行所からわれ等の筆頭早水の旦那ンところへ、そして、早水の旦那ンとこの小者が千秋城之介旦那のところへ素っ飛んで行ったんだが、城之介旦那はどっかの女ンとこへシケ込んでたらしい」

「済ンません……」

城之介がペコリと頭を下げた。

「それで、由良さんとこへお鉢が廻ったんですか？」

「そう言うわけ……。だがね、城之介。あたしゃらせて貰ってよかったよ。まんざら知らねエ男じ

ゃアねエ」
「知ってるんですか、仏さんを?!」
三九郎がうなずいた。
「――京橋の男柱に縛られた上、胸をひとえぐり……。この男らしい最期だよ。これはね、すぐそこの竹町の尾張屋の一番番頭で、与兵衛ッて男さ」
城之介が、ハッと、三九郎を見詰めた。
「――尾張屋の!」
「心当りがあるのかい?」
「自身番で、お話をしましょう」
三九郎は、うなずいてから、折よく近づいて来た両替町の番太郎に、死骸の取り片づけを言いつけた。

三

「――じゃ、その女七福神の猪牙船に乗っていたのが、与兵衛だった……てエわけかい?」
城之介が、昨夜の女宝船の話をすると、三九郎が、そうたずね返した。
「いや、顔が見えたわけじゃありませんから、そうだと言い切れませんが、尾張屋へ寄った女七福神の船に、男がひとり乗っていたこと……。その宝船が京橋の方へ上がって行ったことは間違いありませんよ。勘の字を、竹町へ走らせて見ましょう……」
城之介から言いつかった勘八が、両替町の自身番を出て行くと、こん度は三九郎が話を始めた。

「城之介……。お香、山三の心中ばなしを知ってるかい？」
「昨夜、お葉とその話をしましたよ」
「けッ！　おむつまじいことだ……」
三九郎は、ニヤリッと笑った。
「ひめ始めかい？」
「ひとさまのしないことをしたわけじゃありませんよ。お宅でも、おごそかに取り行なわれたんでしょう？」
「えーえー……。ま、同じことだが、考えようによっちゃ大した違いでもないわけだ。川柳点のざれ句にあるだろう、――その味も相変らずのひめ始め……。おかしくも、面白くもねエやな」
「ところで、お香、山三のことをうかがいましょう」
「それが、ひめ始めにかかわりがあるんだ。去年の元日……。年始廻りに歩いていた尾張屋の息子山三郎が、浜町の通りで、顔見知りの芸者花叶のお香と、パッタリ出会った」
「その時、二人は顔見知りッてだけだったんですか？」
「きれいな仲だったが、お香は前から山三郎に岡惚れしていた。――ちょっと、お寄ンなさいよ……てなことで、山三郎はお香の家へ連れて行かれた。ねエ、城之介、若者達が正月のひめ始めを、どう考えてるか知ってるかい？」
「そりゃア、好きな男に抱かれたいでしょうなア」
「それも、ただの姿じゃいけねエ。出の晴れ着で、裾を引いて、髪がこわれねエように左手でかばいながら、鏡餅をかざった床の間のかまちを枕に、嬉しい転び寝の夢を結ぶ……。勿論相手は、惚れた男じゃねエといけねエよ。それが出来たら、一年間はお茶を引かずに、商売繁昌ッてわけだ」

「じゃ、お香は山三郎と……」
「ひめ始めをやっちまったのさ。お互に屠蘇機嫌だったからね。ところが、これが悪縁で、ズルズルと深か間になっちまった。たった三月で、忍び会う銭にもつまった。お香にゃ、さるお留守居の旦那がある。山三郎の母親はまましい仲だ。とうとう……」
「心中ッてことになった……」
三九郎が、痛ましそうに、うなずいた。
「しかも、やり損ったからみじめだ。御定法通り日本橋で三日間晒した上、山三郎は品川の非人頭松右衛門へ、お香は浅草の非人頭車善七へお下げ渡しだ」
「由良さんが扱ったんですね？」
「あたしゃ、そんな扱いをしたくなかった。尾張屋から、二人を夫婦にするから許してくれ……と、嘘でもいいからそう言って来たら、内済にするよう骨を折る積りだった。ところが、あの野郎だよ……」
三九郎は、京橋の方を見た。
「与兵衛の野郎が、尾張屋の後家お高の名代だと言って、わざわざ奉行所まで出て来て、——山三郎は勘当しました。御法通りになすッて下さい……と、でけエ声で言いやがった」
「どうにもなりませんなア、親元からそう言われては……」
「そうなんだよ……」
三九郎は、気をきかせた町役人が、番茶がわりに出した冷や酒を、キューッとひと息に飲みほした。
「可哀そうに、山三郎は、相対死を企てたときの傷がもとで、ひと月もしねエうちに、品川の非人小屋で死んじまったそうだ」

「お香は？」
「まだ、車善七ンとこで働かされているだろう。江戸前のいい女だったよ」
「なんだか、筋が読めたような気がするじゃありませんか……」
そう言ってから、城之介が声をひそめた。
「昨夜の女七福神は、お香とその仲間だった……てな筋書きは気に入りませんか？」
「気に入ったねエ……。お香が、山三郎の仇討ちをしたッてわけかい？」
「仇討ち……とは言えねエでしょう。が、恨みを晴らした……とは考えられますよ」
その時、勘八が、三十二、三のお店者風の男を連れて入って来た。
「――やっぱり、与兵衛は女七福神の船に乗せられてッたそうですよ」
城之介は、三九郎と顔を見合わせた。
「お前は？　尾張屋のものかい？」
城之介が、男にたずねた。
「ヘエ……。波之助と申します。二番番頭で……」
「洒落た名前だなア」
「房州の漁師の倅だもンで……。あちらじゃ、波之助だの、岩吉だの、舵右衛門だの、そんな名前が多いんで……」
「与兵衛が猪牙船へ乗ったなア、どんないきさつだい？」
「酔ってたんですよ、与兵衛さんは……。お宝、お宝、お宝……と、七福神に化けた女達が河岸口から入って来ると、すッかり喜んじゃいましてね。――よし、おれは福の神の国へ行ってくる……ッて、無理矢理女達の船へ乗っちゃいました」

「誰も、とめなかったのかい？」
「止めたって、ひとの言うことなんか聞くひとじゃありませんよ」
三九郎が、突然、口を出した。
「女七福神の中に、お香はいなかったかい？」
すると、波之助が、ハッと、顔をあげた。
「実は旦那……、女達がひきあげてしばらくすると、——若旦那の心中相手の女がまじっていた……ッて、誰言うとなく……。それで、あたしも内々、与兵衛さんのことを心配していたんですよ……」

四

「——しかし、お香らしい女が混っていた……と言うだけでは、証拠にならぬな——」
同心筆頭の早水茂太夫が、そう言って、ポンと、煙管のガン首をたばこ盆の灰吹きに叩きつけた。
八丁堀の同心屋敷——、陽あたりのよい縁側で、由良三九郎と千秋城之介が、京橋での一件を報告したのだった。
正月の二日——、町奉行所も門を閉ざし、外廻りは若い者にまかせて、年配の同心達は自宅でくつろいでいたのである。
「しかし、話の筋は通っているように考えられます」
三九郎が、そう言うと、茂太夫がうなずいた。
「お香、山三郎の心中のとき、番頭の与兵衛が取りなせば、若い男女は非人頭あずけにならなかった。従って、山三郎は死なずに済んだかもしれぬ。つまりは——」

「山三郎を死なせたのは与兵衛のやつだ……と、お香は恨むでしょう」
「それは、逆恨みと言うものではないかな。心中の仕そこないを非人におとすのは、元々天下の御法なのだからな。もし、それが理由で、与兵衛を殺したとなると、お上の御沙汰にもさからったことになる。筋が通っているようで、実は通っておらぬのではないかな」
そう言う茂太夫を、ジッと見詰めていた城之介が、ゆっくりした言葉でたずねた——
「お香は、下手人ではない——と、仰有りたいようですな」
「わかるか？」
「なんとなく……」
「実はな、お香が、そんな馬鹿なことをする筈はない……と、わしは考えるのだ。と言うのが、お香は春早々、〝足洗い〟をすることになっているのだ」
俗に、——足を洗う……と言う言葉がある。或る仲間、或る世界から脱け出す場合の言葉だが、それと全く同じ意味で、非人が良民に戻ることも〝足洗い〟と言われていた。
ただし、やくざが足を洗ったり、人足が足を洗うのと、非人の場合は大変異っていた。
非人は、生まれ在所の人別から省かれ、良民としての戸籍はないわけである。殊に、心中の仕そこないや、不義密通のために非人頭にあずけられたものは、刑罰として良民の資格を奪われたものであるから、勝手に、足を洗うことは許されなかったのだ。
が——、法には、必ず裏があった。——非人におとされたものの親類や友達が連名で奉行所に嘆願し、体刑にかわるつぐない金を納めると、格別のおなさけをもって……と言う断り書き付きで、良民にかえることを許されたものである。
これが、法のゆとり……と言うのだった。

非人仲間で行なわれる〝足洗い〟の作法は、ちょっと変ったものであった。

まず、足を洗う本人は、四季それぞれの着物を、上から下まで、二タ重ねずつこしらえねばならなかった。更に、大ダライが二ツ、手桶、大鍋が一ツ。また、剃刀、櫛、油、もっとい、下駄を揃えねばならなかった。

非人小屋を出るのは、たいてい夕方だった。

それを、親類か友達が、三人で迎えに行くのも古来の仕来たりである。

出迎えの三人は、まず、非人小屋の出入口から五間離れたところへ、タップリ塩を撒いて清め、その上にムシロを敷いて、タライを据える。

一方では、切り火をして火を燃やし、用意しておいた大鍋で湯を湧かして、タライへ湯をくみいれる……。

この湯の中へ、素ッ裸にした良民戻りの非人を入れて、頭のテッペンから爪先までを洗う……。つまり、非人の垢を流すわけである。しかも、この垢落しは、三度繰り返され、その都度、塩をふりかけて清めるのだ。

これが済むと、まず髪を結う。それから着物を着せる。そして、非人小屋を振返らず、まっすぐ、二、三丁歩く。この間、もとの仲間の非人達とはもとより、迎えに来たものとも、ひと言も言葉を交わすことは出来ない。

非人達は、小屋のものが総出で土下座して、仲間の良民戻りを送る……。これが、非人の〝足洗い〟の作法だった。

「――誰が、お香の足洗いの費用を出してくれるんです？」

三九郎が、茂太夫にたずねた。

「あの女が芸者のときに稼がして貰っていた浜町の料理屋の女将達だよ。お香は、三味線を抱えて、門つけをしてたんだってな」

「そうでしょうね。女はいいし、もともと芸者だ。三味線は達者でしょうし……。まさか——右や左の旦那さま……なんてやらなかったでしょう」

「その門つけの姿を、中山の法華経寺へ月参りに行った女将達が見かけてね、——あんまり可哀そうだ……てンで、銭を出しあうことにして、あたしンところへ頼みに来たんだ」

「いつ頃のことです？」

「暮れの十日頃だったかな」

「お香は、知ってるんですか？」

「知ってるよ。あたしは浅草の非人頭善七ンとこを訪ね、お香を呼んで貰った。勿論お香は、涙を流して喜んだよ」

城之介が、腕を組んで、首を傾げた。

「あたし達の見込み違いかもしれませんなア」

「あたしゃね、三九郎……。城之介も聞いてくれ。お香をそんな義理知らずたア思いたくねエんだ。〝足洗い〟の時にゃ、人がいやがる非人小屋へ、浜町の〝京屋〟の女将が自分で出かけ、お香の体を洗ってやる……と言ってるんだ」

「——〝京屋〟の女将が?!」

城之介が、驚いてたずね返した。

〝京屋〟とは、当時名優嵐三五郎の屋号であった。——そして、浜町の料亭〝京屋〟は、三五郎の女房の店だったのである。

「〝京屋〟の女将はね、役者の女房が非人女の体を洗っちゃ、亭主の人気にかかわるかもしれない……。また、浜町で一、二と言われる料理屋の客が落ちるかもしれない……。けれども、お香の姿を見ちゃ、じッとしていられないのだ……と言ってるのさ」

「与兵衛殺しの下手人は、お香じゃありませんよ」

城之介が、思わず、そう断言した。

「うン、お香じゃなさそうだ」

三九郎もうなずいた。

「お香が、それほどまでにしてくれる〝京屋〟の女将達のなさけを踏みにじり、人殺しをやらかすとは思えねエ。が……、城之介。下手人はお香ではねエかもしれねエが、仲間の非人女かもしれねエぜ」

それは、考えられることだった。——お香の身の上に同情した非人女七人が、七福神の仮装で猪牙船を宝船に仕立てて、竹町の尾張屋へ乗りつけ、与兵衛を連れ出して殺害した……、まんざら、在り得ないことではなかった。

「しかも……、二番番頭の波之助は、七福神の中に、お香が混っていた……と言ってるんだからなア」

「それは、波之助の言葉を信用した上での判断でしょう」

「じゃ、城之介は、波之助が嘘をついてると言うのかい？」

「いや……、そうは言いません。こんな私事の気持ちで吟味を左右しようとは思いませんが、あたしは、波之助ッて男、気にいらないんですよ」

「実を言うと、あたしも、あのノッペリとした面ア好かねエ。やつア下三方白眼だ。年中、ひとの顔

色を、うわ目使いに見てやがる証拠だよ」

すると、茂太夫が二人の顔を眺めた——

「——春早々気の毒だが、もう一度、念を入れてみてくれぬか……」

五

追い羽根の音と、万歳の鼓の音が聞こえる町を、城之介は小者の勘弁の勘八を連れて浜町へ行った。

「——どうぞお上がり下さいまし……」

〝京屋〟へ行って、女将に会いたいと言うと、取次いだ女中が戻って来て、城之介を奥へ案内した。

「——ちょいと話をするだけなんだ。帳場でいいんだぜ」

磨き込んだ廊下を歩きながらそう言ったが、女中は会釈しただけで、一番奥の座敷へ通した。

その座敷も初春らしく、床に松と苔梅を生け、鏡餅が飾ってあった。

「——おめでとうございます……」

座敷の下座で待っていた女将が、手をついて挨拶をした。——自分の古女房にさえ惚れなおすと言う正月の女だ、それが料亭の女将で、役者の女房だ、女将は、匂うような年増振りだった。

「それが、余りめでたい話で来たのではないんだ」

「わかっております。お香のことでしょう」

「京橋での出来ごとを聞いたかい？」

「ええ……、飛んだことでしたねエ」

「で……、おかみは、どう思う?」
「旦那方は、お役目がらお見通しでしょう。あたしなんか、とても……」
「話の筋道から考えると、下手人はお香だ。しかし、いろいろの事情を考えると、お香がそんな馬鹿なことをするとは考えられない。そこで、お香のひと柄をよく知っているおかみの考えが聞きたくて来たわけだ」
「有難うございます。そんなにおなさけを掛けて頂いて、お香もどんなにか喜んでいることでしょう……。なにはともあれ、本人から話を聞いてやって下さいましよ」
「え?! お香が来ているのかい?」
女将は、ちょいと会釈をして立つと、庭に面した障子をサラリと開いた。
「――おう……」
城之介が、思わず目を見張った。――そこに、鳥追い姿の女が七人、三味線を抱えてしゃがみ、右手をついて、頭を下げていたのであった。
一番前にひとり……。その後に、三人ずつ二列に並んでいた。
「――ほう……、昨夜の七福神が、きょうは鳥追いかい……」
「おそれいります……」
七人の女が、いっせいにおじぎをした。
「苦しかろう……。体を起こして楽にしな」
城之介が、いたわるように言った。
鳥追いは新春の景物である。非人の娘や女房……、それも、顔形の美しいものだけが、三味線をひき、祝い歌を唄って江戸の町々を流した。

——若水くみにくるま井戸、音もせわしき鳥追いや……と、歌にもある艶姿ではあるが、もともと非人であるこの女達は、絹物を身につけることは許されなかった。

縞の木綿布子に、凝った中形の帯を引ッ掛けに結び、水色の脚絆に、白足袋……。紅鹿子の絞りの紐をつけた笠をかぶった。——白いうなじに鹿の子の紐が美しく、袖口と半襟は紫縮緬……。さっぱりと、さわやかだが、いかにも江戸好みの色気にあふれていた。

ただ、鳥追いは、あくまでも町を流して歌うものであるだけに、いやが上にも、立ち姿を美しくしようと、胸から腰まで、キッチリとさらし木綿を巻いていた。従って、坐ったり、前かがみになるのは苦しかった。

城之介が、体を起こして楽にしろ……と言ったのも、女達へのおもいやりであった。

「——お前が、お香かい？」

城之介は、一番前にひとりでしゃがんでいる女にたずねた。

「はい……、非人頭善七預り人、お香でございます」

お香は、チラッと、城之介を見上げてから、悲しそうに名乗った。

「つまらねエ悪戯をしたもんだなア」

「済みません……。こんな騒ぎになるとは、夢にも思いませんでした」

「女七福神を乗せた宝船……。あたしゃ、竹川河岸で見ていたぜ」

「あれ！　旦那が?!」

「お前が考えたことなのかい？」

すると、うしろにいた六人の中の、一番年かさらしい女が顔を上げた。

「——旦那さまへ申し上げます。わたくしは、浅草非人小屋小頭笠松の七造の女房でお三と申しま

す。七福神の趣向を考えたのは、わたくしでございます」
「お前がねェ……、勿論、七福神のひとりなんだろう？」
「はい……、房州の海辺育ちなので、船が漕げます。毘沙門天になって、宝船の船頭をつとめました」
「ほう……、あの毘沙門さまかい。が、なぜ、女七福神なんてことを考えたんだい？」
「いろいろとわけがございまして……」
「お香に同情して、尾張屋へいやがらせをしようと考えたのか？」
「それも、ございます」
「与兵衛に恨みごとの一ツも言おうってわけだったのかい？」
「それも、ございます」
「まだ何かあるのか？」
「相済みません……。実は……、波之助の横ッ面をひッぱたいてやろうと思っていました」
「波之助?!　あ……、あいつも房州生まれだったッけ」
城之介は、驚いて、お三と言う女の顔を眺めた。——大して美人と言うほどではないが、鳥追いに出るだけあって、かなりの色ッぽさを持った女だった。
「そうかい、尾張屋の二番番頭と知りあいだったのかい？」
「房州と申しても広うございます。あたしと波之助は浜金谷の生まれで、三年前に、あたしは、あたしを捨てて逃げた男を追って、江戸へ参りました」
「それが、波之助だったのか？」
「はい……。男をさがして歩いているうちに病気になり、暮らしに困って、とうとう非人小屋へ…

…。そして小頭七造の女房になりましたが、去年、尾張屋に波之助がいることを知りました」
「で、昨夜、ひっぱたいたか？」
「いいえ……、それが、いなかったんです」
「それで、与兵衛だけを連れ出したのか？」
お三が、うなずいたが、お香が顔をあげた。
「申し上げます。あたし達で、与兵衛を連れ出しました。でも……、殺しません」
「お前エは昨夜、なにに化けた？」
「あの……、弁天さまに……」
城之介が、二、三度、うなずいた。——七人の中で、弁財天になれるのは、やっぱり、お香だろう……。
「与兵衛を、京橋の男柱に縛りつけたのは？」
「あたし達です。でも、殺しません」
すると、〝京屋〟の女将が前へ出た。
「このひと達は、こう言ってるんです。——与兵衛を殺す気があるなら、自分達の仕わざとわかるようなことはしやしません……。ちゃんと、名札がわりを残して来ています」
「名札がわり?!」
お三がまた顔をあげた。
「与兵衛を、擬宝珠まで担ぎあげて縛ったことです」
「あれに、わけがあるのかい？」
「膝を折って、与兵衛がさかさまになります。さか吊りになっても、与兵衛に代りはありません」

城之介が、クスリッと笑った。——横から見ても、起こしてみてもお店者……と言った勘八の言葉を思い出したのだ。

「あたしにゃ、そのわけが読めねエが……」

「宝船の画讃は廻し文でございます」

「うン……、なかきよの、とおのねふりの、みなめさめ、なみのりふねの、おとのよきかな……。上から読んでも、下から読んでも同しだ」

「お香の名も廻文です」

「え?! おこお……か。なるほど」

「山三郎さんも、さんさ……で、廻文です」

「面白れエなア」

「廻文のお香、山三のお香が、廻文の宝船に乗って尾張屋へ行き、与兵衛を逆かさ縛りにしたんです。こんな名札がわりを残して来たあたし達が、人殺しをするでしょうか?」

他の女達も、揃って手をついた——

「——下手人は他におります。お上の御威光で、お召捕りをお願いいたします……」

六

正月二日の夜は、どの家もにぎやかだった。——元日の夜は、大晦日のつかれで早や寝をするが、二日は、かるた、双六などに興じたり、お店ものも、大ッぴらに酔って歌などを唄った。

やがて、その夜も十時……。

一隻の猪牙船が、静かに京橋川をのぼって行った。

猪牙船には、人影が九ツ並んでいた。——女七福神と男が二人……。男は、由良三九郎と千秋城之介だった。

「で……、これからどうなるんだい？」

三九郎が、城之介にたずねた。

「出たとこ勝負です。どんなにうまく仕組んでも、人間のすることですからな、どこかに手落ちのアナがあいてることと思います」

船を漕いでいた毘沙門天のお三が、低い声で言った——

「——着けますよ……」

しばらくすると、七福神に化けた女達と三九郎、城之介が、尾張屋の河岸口に並んだ。

竹問屋のことで、まるで簀のように、いろいろな竹が立てかけてあった。

「——いいですか？」

城之介が、三九郎に声をかけてから、ホトホトと、裏戸を叩いた。

「——誰だい？」

酔っているらしい男の声がたずねた。

「済みません。あたしですよ……」

お三が答えた。

中の男は、女の声に安心したらしい。ゴトゴトと閂をはずす音が聞こえて、ガラリ……と戸があいた。

「——あ……」

声を呑んだのは、竹を切る職人らしい男だった。
「――ごめんなさいよ。昨晩はおやかましゅう……」
そう言うお三を先頭に、女達は、ドヤドヤッと、中へなだれこんだ。
十人余りの男女が酒を飲んでいた。――店の者や職人……、女は女中達だった。
一同が、ギョッとしたように、女七福神を眺めた。
「――昨夜も、こんな様子だったかい？」
「はい……、このひと達のまん中で、与兵衛がグデングデンに酔っぱらっていました」
城之介の言葉に、お香が答えた。
「波之助は？」
「やっぱり、いませんよ……」
こんどは、お三が答えた。
「――おい……。波之助は？」
城之介が、手代風の若い男にたずねた。
「に、二階だと思います」
「二階が、番頭の部屋かい？」
「い、いいえ……。おかみさんのお部屋なんで……」
とたんに、お三が憎々しそうに言った――
「あの悪性男ッ！　ここの後家さんとちちくりあってやがるんですよッ」
「あたしにまかしときな……」
三九郎が、城之介へニヤリと笑って、階段の方へ行った。

「――この女達が来たときも、波之助はいなかったそうだな？」
「大番頭さんと言い争いをして、外へ出て行ったあとだったんです」
手代風の男が答えた。
「何を、争ったんだい？」
「それは……、どうも……」
手代が口篭ったとき、二階から三九郎の声が聞こえて来た――
「――城之介、ちょいと来てみな。ひとりで見物するなアもってエねエや……」
二階の座敷では、尾張屋の後家と二番番頭の波之助が、素ッ裸に近い恰好で震えていたのだ。
「やっぱり、お三が言ったとおりだったぜ」
三九郎が、ニヤリッと笑った。
「――波之助……。着物を着な。自身番へ行って貰わンきゃならねエからな」
そう言う城之介に、波之助が、唇を震わせながら、叫ぶように言った――
「な、なぜですッ。お、おかみさんはひとりものだッ。あたしといい仲になったからッて、不義でも、密通でもないでしょうッ」
「ひとさまの情事まで一々調べようたア思わねエよ。が……、とかく情事ッてやつはいざこざのもとでなア。時にゃ、人の命がなくなることさえあるんだ」
「あ、あたしがなにをしたと言うんですッ。与兵衛さんを殺したとでも、おっしゃるんですかッ?!」
「おッしゃるんだよ。擬宝珠に縛られて、身動きの出来ない与兵衛だ。殺すにゃ手間ひまはかからなかったろう」
「違います！　あれは、お香の仕業ですよッ。あたしは、女達が来る前に表へ出ました。刀なんか持

っていませんよ。匕首も、庖丁も持っちゃアいません。店の者は、みんな知っていますよッ。どうして、どうやって、与兵衛さんを刺し殺すことが出来るんですッ」

喚めき続ける波之助へ、城之介が、ゆっくり答えた——

「それが、出来たのさ……。竹槍ッて重宝なものが、この辺りにゃゴロゴロしている」

「——こん度ばかりは、当てずッぽうで波之助を引ッぱりました。が、幸い、竹槍のひと言がきいとみえて、すッかり泥を吐きましたよ……」

茂太夫にそう言う城之介の言葉に続いて、三九郎が口を開いた。

「——飛んでもねエ色後家ですぜ、尾張屋の女房は……。亭主が死んで、与兵衛と出来た。そして、義理ある山三郎を非人小屋へ追いやったが、そのあとで波之助ともくッついた」

「波之助は、尾張屋の主人になりたくッて、与兵衛を殺したのかい？」

「ちょいとした大店ですからねエ。色と欲ッてやつですよ……」

城之介が、茂太夫へ言った——

「——お香の〝足洗い〟……、是非ともお願いします。なんなら、〝京屋〟の女将といっしょに、たしが迎えに行ってもいいですよ」

すると、三九郎が言った——

「あたしも行くよ。体を洗う役は、あたしが引きうけるぜ……」

初庚申の女

一

「――けッ……、つまらねエ日だよ、全くなア……」

四時になるのを待ちかねるように、南町奉行所を出た由良三九郎は、あとから来る千秋城之介と日下兵馬を振返って、いまいましげに言った。

正月なかばだと言うのに珍しく雨が降って、三人は傘をさしていた。――細身の洒落た傘だった。傘屋に注文して、別誂えにした傘で、つまりは同心好みと言うやつである。

「全くですなア……。きょうは十六日、折角の藪入りだと言うのに……。宿元へ帰った小僧達が、さぞガッカリしてるでしょうよ」

「小僧なんか、お袋にあまえて、大飯を食うだけだからいいやね。可哀そうなのは、二年に一度か、三年に一度しか宿下りの出来ねエ御殿勤めの女達さ。ウズウズしていたろうに、役者も買えねエ、かげまも買えねエ。それどころか、恋しい男があっても、抱っこして貰えねエ」

「そんなことはないでしょう。別に、雨の中でねンねするわけじゃなし」

「庚申だよ」

「え?!」
「――庚申はせざるを入れて四猿なり……ッてね、藪入りの十六日が庚申にぶっつかるたア、うまく行かねエもんだ」
「庚申ですかア！　そいつア気がつきませんでしたよ」
庚申……、つまり、かのえさるの日のことである。この日は、男女の精進日とされ、もしこの夜同衾して姙娠すれば、生まれた子供が盗ッ人になると言われていた。
――人間の体には、三尸と言う虫が巣くっている。この虫は、一年に六回、人間が眠っているうちに体を脱け出して天へのぼり、神に、その人間の悪事を全部告げてしまう。神は、その報告によっては、直ちにその人間の命をちぢめてしまうから、もし三尸の虫に上天してもらいたくなかったら、ひと夜は寝ずに明かす他はない……。ところで、年に六回と言うのは、六十日毎に巡ってくる庚申の日のことである……。
と言うのが、庚申迷信の始まりであるが、これは、支那から入った道教の信仰に始まるものだった。
だが、罰が当る……。悪いことがある……と言われると、気味の悪いものだ。お稲荷さんの鳥居に小便をひっかけるものがないのと同様、庚申の夜は、夫婦でさえも別々に寝るのが、この頃のならわしだった。
――庚申をあくる日聞いて嫁こまり……、庚申をうるさく思う新世帯……、庚申の夜は持ちのよい嫁の髪……。そして、――寝て用がないで庚申夜をふかし……と言うことになり、大勢が集まって馬鹿ッ話で夜あかしをするのが〝庚申待ち〟であり、いつとはなく、集まる仲間が決まると〝庚申講〟と言うことになったのであった。

運の悪いことに、今年は、藪入り、お宿下りの十六日が、庚申にぶっつかり、しかも雨だった。

「――実はね、あたしの従姉が、雲州家へ御奉公に上がっている。それが、きょうは宿下りで実家へ帰って来てるのさ」

「由良さんの従姉なら、もうお年ですなア」

「老女格だよ。と言っても、三十越したばかりだ。しかも、うまいものを食って、奥方のお相手をしてりゃアいいんだ。一昨年会ったときは、まるで、二十四、五の肌だった」

「ちょっと！」

城之介が、驚いて、足を止めた。――お数寄屋河岸の松並木の下で、こまかい雨脚が、お濠の水を叩いていた。

そろそろ、辺りが暗くなるころなのだ。

「二十四、五の肌と言われたようですな？」

「どうかしたかい？」

「どうかしますよ。肌とは、どこのことです？　まさか、頬っぺたじゃないでしょうなア」

「ウフフ……、胸だよ。下ッ腹だよ。二の腕だよ。それから――」

「わかりましたよ。結構なお従姉さんをお持ちですなア」

兵馬が、横でクスリッと笑った。

「おや！　気にいらねエぜ、兵馬。なんで笑った？」

「済みません……」

「お前エ、――従兄妹どうしは鴨の味……てエのを味わったことあるかい？」

「いや……。ありません」

「ざまア見やがれ……。あたしに、男女の楽しみを教えてくれたのが、この従姉なのさ。十年余り前の、やっぱり宿下りの時だったッけ……」

こん度は、城之介がクスリッと笑った。

「鴨の味と、タイの味を一度に賞味したわけですね」

「ウフフ……、そう言うわけだ。以来二、三年毎に頂戴している。つまり、従姉のお宿下りの度にね。勿論、わが家の奥方は知っちゃアいねエ」

兵馬が、遠慮がちに、城之介にたずねた。

「先ほどの、鴨の味とタイの味……とは、どう言うことでしょう」

「鴨の味はわかってるなア？」

「はア……、うかがいました」

「御殿女中はタイの味……ッてね。従姉で御殿女中なら鴨とタイだ」

「なる程……」

三九郎が、溜め息をついた。

「それでよく定町廻りが勤まるなア……。まだ修業が足りねエぜ」

「はア……、世事に通じるよう、心掛けます」

城之介は、ニコニコ笑いながら、三九郎と兵馬の間に挟まって歩いた。——城之介は、この二人が好きなのだ。

いっぱし〝いろごと師〟振って、その癖女房の尻に敷かれている三九郎……。朝は十時ぎりぎりに同心部屋へ顔を出し、三時になると帰り仕度を始める三九郎……。危い捕り物には決して出て行かないが、女出入りのもめごとだと聞くと、江戸のはずれまで素ッ飛んで行く三九郎……。憎めない男だ

った。

一方、兵馬はどこからどこまで、三九郎とは正反対だった。旗本の次男坊から、日下家の婿養子になり、先代が隠居したので、奉行所へ出仕した。義父につかえ、妻を愛し、お役目大事と、持ち場をコツコツ歩いている。論語は空ンじているが、世の中のことは殆んど知らない。しかも、知らぬことを少しも恥とせず、なんでも城之介にたずねる。知ったかぶらず、高ぶらぬ素直さが好ましいのだ。

「――それからどうしたのさ？」

その夜、竹川河岸のお葉の家で、三九郎と従姉のことを話すと、お葉が面白がってたずねた。

「三九郎旦那かい？　本郷の伯父上の屋敷へ行ったよ。従姉ッてひとに会いにね」

「だって、庚申じゃつまらないじゃないのさ」

「だから、お閻魔さまへ参りに連れ出そう……なんて言ってたッけ」

「あー、きょうはお閻魔さまの日だった……」

江戸の正月は、なにかとせわしい……。七種（くさ）までは正月行事が続き、八日が薬師参り、十日が新田（にった）明神参り、十一日が鏡開きと蔵開き、十二日がまたまた薬師の日で、十三日がお祖師さま、十四日が年越し祝いで、十五日は稲荷参り、そして十六日がお閻魔さまの日だった。

閻魔参りでは、蔵前の花延寺や牛込寺町の養善寺、芝の如来寺が名高く、朝から夜中まで、参詣人が絶えなかったものである。

「あたし達も、お参りに行きましょうか？」

「へエー、お前エ、お閻魔さまの信者だったのかい？」

「いいえ……。だって、こうして鼻をつき合わしてもつまんないじゃないか、庚申だしさア……」

城之介が、思わず吹き出した。

「――庚申で、することがねエからお参りかい。閻魔さまが、いやアな顔をするだろうぜ……」

二

「――旦那ッ！」

翌朝、町内の湯屋の女風呂で、ノンビリ顎までつかっている城之介へ、ザクロ口から勘弁の勘八が声をかけた。

「待ってな。すぐあがる」

「そんなッ……。旦那ッ、ノウノウとしていねエで、人殺しですぜ」

「お前エのおッぴろげた鼻の孔を見りゃア、なんかあったな……とわからアね。いずれにしても裸じゃ道中は出来ねエ。待ってな」

城之介は、湯を出ると、着物を着ながら勘八を振返った。

「いつ、どこで、誰が殺された？」

「昨夜、茅場町薬師の閻魔堂前で、祈祷師の千賀ッて女が殺されたんですよ」

「薬師の境内となると、お寺社のかかりじゃねえか」

「その寺社方のお奉行さまから、町方へ、下手人吟味のおたのみがあったんでさア」

「わかったよ。千賀ッて女は、幾つだい？」

「三十七とか……。茅場薬師のすぐ横の提灯かけ横丁に住んでたそうですよ」

「出かけてみよう……」

八丁堀から、茅場町は、ほんの七、八丁だった。

日本橋茅場町と言えば、江戸のド真ン中である。土一升金一升と言われる土地だが、茅場町薬師はかなり広い敷地を占めていた。——と言うのは、ここは薬師堂だけではなく、山王さまのお旅所にもなっていたし、別に閻魔堂や、地蔵堂、行者堂、稲荷の社などが集まっていたからである。

表通りには傘屋が多く、その床店と床店の間に、境内へ入る黒門があった。

「——ご苦労ですが、よろしくご吟味をお願いします。どうも、われわれは、人殺しなど不得手でしてなア……」

黒門の前に寺社奉行手付きの同心が待っていたが、こう挨拶すると、さッさと帰って行ってしまった。

「けッ！　ひでエもんですねエ、旦那」

「まだ、お寺社の旦那方は、屠蘇機嫌が抜けないのだろう……」

城之介は笑いながら黒門をくぐり、石だたみを踏んで、閻魔堂の前へ行った。

「——御苦労さまでございます……」

待っていた町役人と、白衣の老僧が、城之介を迎えた。

「——ほう……」

城之介は、女の死骸を見ると、ちょっと、目を見張った。

女は、ねずみ色の綿入れに、行者袴をはき、首から大ぶりの珠数をかけていたが、その着物と袴を朱に染めて、閻魔堂の格子の前、踏み板の上に突ッ伏していた。

傷は、背中——右の貝がら骨の下を、短刀か匕首のようなもので、グリグリグリッと、えぐられているようだった。

着物は、雨に濡れそぼれていた。

「――わしが考えるところではじゃな、この女は、石だたみを歩いているところを、うしろから刺され、この閻魔堂まで逃れて、パッタリ倒れて息絶えた……。どうじゃろう。そんなところではなかろうかな？」

そう言って、老僧は、石だたみから、閻魔堂までの地面を指さした。――雨に叩かれてはいるが、かすかに、黒ずんだ血のあとらしいものが残っていたのだ。

「なる程、そのようでありますな。ところで、御僧は？」

城之介は、丁寧な言葉でたずねた。

「わしは、この薬師の別当、智衆院の恵仙じゃよ。けさ、夜明け方に、犬がけたたましく吠え立てるのでな、起きて見ると……」

老僧は、女の死骸を指さした。

「では、お僧が、最初に死骸をみつけられたのですな？」

「犬の次には、わしじゃよ」

「とすると、一ツおうかがいしたい？　あれは、その時から書いてありましたかな？」

と言って、城之介が、死骸の頭の方を指さした。

女は、突ッ伏してはいるが、右手を伸ばし、手拭いを握っていた。その手拭いが血に染まり、踏み板に大きく、大王と書いてあったのだ。――勿論、血で書いた文字である。

「左様々々……。わし等も先ほどから、あの文字を見ていたのじゃが、確かに、わしがみつけたときから書いてあった――と言うより、この女が、断末魔の死力をつくして、書き残したものなのじゃよ」

「――大王……とありますな。なんのことかおわかりですかな？」

「わかるようでもあり……、わからぬようでもあり……。ここは閻魔堂の前じゃからなア」
「閻魔大王の大王ですかな？」
「他に、考えようがない……。が、まさか閻魔大王に殺されたと言うわけでもあるまい。そのところがわからぬのじゃよ」
「では、死骸をあらためますから……」
城之介は、老僧と町役人を遠ざけると、勘八に手伝わせて、死骸を裸にした。
「――てエした体をしてますぜ……」
勘八が、驚いたように言った。――年に似合わず、若々しい体で、胸も腰も、豊かなしし置きだったからだ。
「しかし、この女、相当な情事好みだったらしいな……」
城之介が、ちょいと苦笑いをした。――女の乳首と肩口に、まぎれもない歯型が残っていたからだった。
「勘の字、提灯かけ横丁へ行って、この女の身状を洗って来な。俺は番屋へ行ってるから……」
茅場町には、大番屋があった。――普通、町々にある自身番は九尺二間だったが、大番屋は、その倍以上の広さがあり、仮り牢の設備もあった。
城之介は、死骸のあと始末を町役人に言いつけてから、老僧を連れて、大番屋へ行った。
「お僧は、あの女をご存知でしたか？」
「知っている。よく、薬師の境内を通り抜けるところを見かけたし、時には、薬師の堂へ入って、礼拝などもしていたからな」
「どんな女でした？」

「さて……、親しく話をしたことはないが、なかなか抜け目のなさそうな女じゃったよ」
城之介が、老僧を返したところへ、せかせかと、三九郎が入って来た。
「――どうもどうも、あったかそうないい女じゃねエか……」
「死骸を見て来たんですか？」
「見たよ。町役人共が、乳房の歯型を見、エヘラエヘラと笑ってやがった。あの女に、歯を残したのは、どこのどいつだろう？」
「その男が下手人だと思いますか？」
「そいつアわからねエ。が、あの女の乳房へ吸いついた野郎の面が見て見てエよ。でもさ、間に合ってよかった。もうちッと遅く帰って来たら、あの乳房は見物出来なかった」
「申良さん……」
城之介が、三九郎の顔を見て、ニヤリと笑った。
「奥方を、なんと言ってごまかしました？」
「え？！」
「朝帰りらしいですなア」
「あ……、まずいこと言っちまったなア。済まねエが城之介、――昨夜は庚申待ちで、城之介や兵馬と、ひと晩中深川の料理屋で飲んでいた……、かみさんにはそう言ったんだ」
「ひどいもんですなア！」
「庚申待ち……と言ったんで、女房どのは安心してやがる。が……」
「――筒井筒六庚申もなんのその……と言う川柳がありましたなア」
「フフフ……、そう言うわけ。なにしろ、二年振りの宿下りだ。そのまま返すわけにゃ行かねエ。そ

れに、本郷から浅草の閻魔参り……、途中に、不忍の茶屋があるだろ。ついフラフラと入っちゃった」

「おッと……、それで思い出しましたよ」

城之介は、ちょいと首を傾げて考えた。

「殺された女祈祷師の千賀は、提灯かけ横丁の長屋へ帰るのに、薬師境内を通り抜けようとした。と言うことは――」

「薬師の東側へ行ってたんだ」

「つまり、新堀辺りから浜町……。あの辺りにゃ、船宿や料理屋が多いですなア」

「よし……。うちの六助に洗わせてみよう」

城之介は、ちょいとうなずいてから、言葉を続けた――

「血染めの手拭いで、いまわの際に書いた大王のふた文字。この謎がときてエですなア」

三

その日の昼過ぎ、城之介は同心部屋へ行って、筆頭の早水茂太夫へ千賀殺しの一件を詳しく報告した。

「それで、千賀の情夫はわかったのかい？」

「勘八がさぐり出して来ました。いま頃、茅場町の大番屋へしょ引いている筈です」

「なに者だい？」

「時雨の松五郎ッて博奕打ちですよ。千賀が怪しげな祈祷で稼いだ銭をまきあげては、賭場へ入りび

たってる半カ打ち……と言うことです」
「よく調べて見なきゃ、はっきりしたことは言えないが、その野郎は下手人じゃなさそうだな」
「実は、あたしも、そう考えています」
「松五郎に限らず、女のヒモッてやつは、女をだいじにするものだ。言わば金づるだからな。女を殺しちゃ、玉なしだ。だが、その女が逃げようとした時は別だがね」
「いや、千賀は松五郎から逃げようとはしていなかったと思います」
「そうだろうな。体に男の歯型が残っている。まだまだお熱い最中だったと考えていいだろう。とすると、松五郎に千賀を殺さなきゃならない理由がない」
茂太夫の言葉に、城之介がうなずき返した。
「——ところで城之介。千賀の昨夜の動きはどうなんだ?」
「由良さんとこの六助が調べました。千賀は夕方から、浜町の〝吾妻〟ッて料理屋に祈祷に行ってます」
「〝吾妻〟……、知ってる。あそこは、料理屋と言うより、出会い茶屋だぜ。もっとも、不忍や湯島辺りの出会い茶屋と違って、ちょいと銭がかかるがね」
「そうらしいですな。銭に糸目をつけないお留守居役や、大店の主人などが、よく女連れでシケ込むと聞きましたよ」
「それから、大家の御後室だの、金持ちの後家などが、役者と忍び会いをしたり、宿下りの御殿女中がかくれ遊びをする家だ」
「ただ、昨夜は庚申でして……」
「あ! そうだったのかい」

城之介が、うなずいた。

「〝吾妻〟でも、今夜は客があるまい……と考えて、千賀を呼んだんだそうです。〝吾妻〟のおかみが、葬以来、どうも体の調子が悪いんで、お払いをしようッてわけだったそうです」

「〝吾妻〟から、提灯かけ横丁へ……。なる程、薬師の境内を突ッ切りゃア早いわけだ」

「そこまではわかりましたが、下手人の見当はまるッきし立ちません」

「寺社方から頼まれた吟味ものだ。特別、力を入れて、町方の面目を立てて貰いたいな」

城之介は、大番屋へ引返して、茂太夫の言葉を三九郎に伝えた。

「けッ！　いやな殺しを背おい込んじまったなア……」

三九郎は、土間の隅で、窮屈そうに膝を揃えている男をジロリと見た。三十二、三……、苦が味走った、ちょいとした男前だった。ハケ先を曲げた髷と、寸の詰まった着物など、ひと目でわかるやくざ姿である。

「――城之介……、あれが、歯型のお兄さんなのさ」

「何か、喋りましたか？」

「昨夜は雨が降ってたんで、ずっと、四ツ谷の馬方宿で博奕を打っていた……ッてさ。ケチな野郎だよ」

「松五郎……」

城之介の声に、松五郎が顔をあげた。

「四ツ谷の馬方宿にいたッて、証人があるのかい？」

「大勢いますよ。みんな顔馴染みの新宿の馬方ですから……。それから……」

松五郎は、ちょいと照れたように、頭を掻いた。

「それから？」
「実は、珍しくメが出ましてね、ちょっぴり小遣いが出来たんで、宿の女中に少しばかり握らせて布団部屋へ引っぱり込んだんで」
「この野郎！」
三九郎が怒鳴った。
「大それた野郎だ！　昨夜は庚申だぞッ」
城之介が、呆れて三九郎を見た。——自分が庚申破りをしておいて、ひとのことを責めている……。いい気なものだ……。
「松の字……、昨夜の雨はいつ頃あがったか知ってるかい？」
「いいえ、存じませんが……」
「十一時頃だ」
「へへへ……、済ンません。その頃あたしゃ、女中といっしょに寝ていたんで」
城之介は、松五郎は白だと思った。——千賀は雨が降ってるうちに殺されたのだ……。
その時、勘八と六助が、息を切らして戻って来た。
「旦那ッ……。昨夜、浜町の〝吾妻〟に、客がなかったなんて、嘘っぱちですよ」
「あったのかい？」
三九郎が、膝を乗り出した。
「あったんですよ。〝吾妻〟の下働きの女が買い物に出たのをとッ捕まえて、おどかしたんです。ベラベラ喋りましたよ。材木町河岸の呉服屋越前屋の若主人で市三郎。他に番頭や手代が三人……」
「野郎ばかりか？」

三九郎が、つまらなさそうに言った。
「いいえ……。他に、どっかの御守殿者らしいシイタケたぼの女が二人と、その相手の若衆姿の男が二人……」
「どこの屋敷の女かわからねエのか？」
「下働きの女は知らねエと言うんです」
「よし……」
三九郎は立ち上がると、城之介へ顔を向けた。
「――あたしゃ、その奥女中共を洗い出してみる。城之介、越前屋の方はまかしたぜ……」

四

由良三九郎の前に、膝の丸まっちい、太った女が、デンと坐っていた。
浜町の料理屋〝吾妻〟の帳場である。女は、〝吾妻〟の女将で、お杉と言う女だった。
「――うちは昨夜、早よから寝てましてん……」
お杉は、ねッとりとした上方言葉で、三九郎に答えた。
「しかし……、どんな客が来たか、それくらいのことは知ってるだろう」
「それが、お客のことは、女中頭のお芳まかせどっさかいなア」
「じゃ、そのお芳ッて女を呼んで貰おうじゃねエか」
「済んまへん……。お芳は、けさ早よから、実家へ帰りましてん」
「いねエのかい？」

「ヘエ……。昨日が、十六日の藪入りどっしゃろ。若い女中を休ませて、お芳が働き、お芳はきょう、休みとりましてん」

——糞ッたれめ！

三九郎は、腹の中で舌打ちをした。——お杉の堂々とした体の前では、痩せた自分が、ひどくみすぼらしく見えたのだ。

そこへ持って来て、たずねることを全て、軽くイナされているのだ。たいてい、腹も立とうと言うものである。

〝吾妻〟は、同心筆頭の早水茂太夫が言ったように、料理屋ではあるが、一種の留守居茶屋であった。——各藩のお留守居役が、酒を飲み、女に戯れる料理屋なのだ。「親子草」と言う書物に、こう書いてある——

——町々に料理茶屋これあり、住居も至って手広にて、諸家の留守居に限らず、有福なる町人も寄合などいたし候茶屋にて、これを号けて留守居茶屋と言う……。

お留守居役と言うのは、大名の江戸屋敷の外交官で、公儀と藩の中間に在って公務を伝達したり、同格大名との交際を行なうのが役目であったが、いまも昔も、外部とのつきあいとなると、まず一献と言うわけで、毎日のように料亭に出入りしていた。

なにしろ、自腹を切らず、藩の金で遊ぶのだから費用おかまいなしの豪勢さで、自然、留守居茶屋もなかなかの実入りだった。

——数十騎舌一枚であしらわれ……、と言う川柳は、古来、不見転芸者が野暮な国侍を、口先一ツで手玉にとることを皮肉ったものと言われているが、これは、留守居茶屋の女将の凄腕と解釈した方がよさそうだ。

とにかく、陪臣とは言え、留守居役ともなれば相当な侍である。それを毎日、幾人となく応対している〝吾妻〟の女将お杉にとっては、三九郎などは軽いことであったに違いない。

「だがよ。昨夜、客があったことは間違いねエ。お上の方じゃ調べがついているんだ。日本橋の呉服屋越前屋の若主人が来ていただろう」

「あー、市三郎はんどっか？　そうどすか、うち、知りしまへなんだんどっせ」

「来てたんだッ。番頭や手代といっしょにな」

「あ……、わかった！　そら、庚申待ちどっしゃろ」

「庚申待ち?!」

「昨日は、庚申の日やおへんか……。越前屋の若旦那はん、ええ男はんどっしゃろ。おなごはんからえらいモテ方や……。そいで、せめて庚申の日だけでもおなご気抜きで過ごすのやゆうて、うちへ来やはるのンどっせ」

三九郎は、舌ッたるい上方言葉に、ジリジリして来た。

「その他に、御守殿女が二人来ていたろ？」

「知りまへん……。来ておいでやしたかもしれまへんなア」

「来てたんだよッ。それぞれ若衆をひとりずつ咥え込んでやがった。どこの奥女中だ？」

「さア……、どこのおひとどっしゃろ？」

「女中頭のお芳なら、知ってるわけかい？」

「なんとも言えませんなア。こう言うとこへ来やはるおなごさんのお名や、お屋敷、たずねんことにしてますねン」

三九郎は、噛んで吐き出すように言った——

「女行者の千賀が来たなッ？」
「ヘエ……、うちの体、悪うおすよって、おがんで貰いました」
「その帰エりに、茅場町薬師の閻魔堂前で殺されたんだッ」
「そやそうどすなア、可哀そうに……。そやけど、行者はんが殺されるようでは、そのお祈りも、当てになりまへんなア……」
結局、三九郎は、何も摑めずに、〝吾妻〟を出たが、その頃千秋城之介は、日本橋ぎわの番屋へ、越前屋の若主人市三郎と、番頭の伝七、手代の良助と安吉を呼び出していた。
番頭と言っても、伝七は三十をやっと越したばかり、あとは、若主人の市三郎を始め、二人の手代共、二十三、四と言う年恰好であった。
「――伝七、良助、安吉ッ……、生国と親もと、受け人を申し上げろッ」
城之介から言いつけられていた勘弁の勘八が、大きな声で、嚙みつくように言った。
「ヘエ、手前から申し上げます。生国は越前鯖江でございます。親もとも同様でございます。江戸表受け人は、四谷左門町にて旅籠屋を営みまする鯖江屋五兵衛にございます」
番頭の伝七が、お白洲向きの言葉で答えた。
「そう堅くならなくてもいいぜ」
城之介はそう言って、手代二人を見た。
「良助、お前エの親は？」
「はい……、品川で紙屋を営んでおります」
「両親無事かい？」
「はい……、幸い、父母共、丈夫です」

「勿論、越前のものだろうな？」
「はい……、それで、越前紙を扱っておりますんで……」
城之介は、視線を安吉へ向けた。
「お前エは？」
「お袋が、千住で茶店をやっておりますんで」
「父親は？」
「十年あとに死にました。それまでは、やはり、日本橋のお店で使って頂いておりましたんで……」
「親子二代、越前屋で働いてるッてわけかい？」
「ヘエ……、お袋も、もとはお店で女中をいたしておりましたんで……」
「そうかい……」
城之介は、ニヤリ……と笑った。
とたんに、若主人の市三郎始め、越前屋の使用人が、ギョッと、顔をこわばらせた。——それほど、城之介の笑いは、なにか意味ありげだったのである。
「市三郎……」
城之介が、出し抜けに、市三郎に声をかけた。
「越前屋の使用人の数は？」
「はい……、小僧から、下男、下働きの女中までいれますと、二十二、三人で……」
「大世帯だなア。大した儲けだとみえる」
「いいえ……、お出入りのお屋敷が多いので、人手がいりますが、その割には、利の薄い商売でございます」

「越前家お屋敷の外に、出入り屋敷はどんなところだい？」
「はい、あとは、お旗本のお屋敷ばかりで、お大名は――」
そう言いかけて、市三郎が、ハッと言葉を呑んだ。
が……、城之介は、それを無視して、勘八を振返った。
「――勘の字……、その手代を、茅場町の大番屋へ連れて行きな」
城之介は、キョトンとしている手代の良助を顎でしゃくった。
「だ、旦那ッ！　な、なぜわたくしだけ……」
「文句があるのかい？」
城之介が、冷やかに、良助に答えた。
「お前エにゃ、まだ聞きてエことがあるから、大番屋へ連れて行くんだ。――あとのものは、帰エっていいぜ……」

五

「――良助ッて手代、どこが臭いんだい？」
三九郎と城之介から吟味状況を聞いた同心筆頭の茂太夫が、城之介にたずねた。
「格別、臭いと言うわけではありません」
「じゃ、なぜ、ひとりだけ残したんだ？」
「市三郎始め、番頭、手代の四人……、どうも、口裏を合わせているように思われます」
「――そんな気がする……と言うだけじゃまずいぜ」

「いや……。昨日は十六日の藪入りですが、江戸に親もとのある良助と安吉、この二人の手代が親のところへ帰っていません」
「なる程……、奉公人にとっちゃ、一年で一番楽しい藪入りだと言うのになア……」
「しかも、由良さんのお話では、〝吾妻〟の女将は、市三郎達は〝吾妻〟で庚申待ちをしたのだ……と言ったそうです」
三九郎が、コックリ、うなずいた。
「城之介が言う通り、越前屋の四人は臭せエなア。正月で、藪入りだ。それが、親ンとこへも戻らず、若主人や番頭といっしょに、浜町の留守居茶屋で一夜を明かした……。どうかと思うねエ」
「それで、良助ひとりだけ、大番屋の仮牢へ放りこみました。二タ時余りしたら、帰してやる積りです。もう、四人はいままでのようには行かないでしょう。市三郎と番頭の伝七、手代の安吉は、良助が何か喋ったと思うでしょうし、良助は、他の三人が、妙によそよそしいと感じるでしょうからね」
茂太夫が、ニッコリ笑った。
「そして、四人が仲間割れするのを待つか……」
しばらくして、城之介と三九郎は奉行所を出た。
「これから、どうする気だ、城之介?」
「越前家の奥向きへ手を廻して、宿下りした女中を洗ってみようかと思います。——越前家お屋敷の外に、どこへ出入りしている……と市三郎にたずねると、他は旗本だけだ……と答えました。つまり越前家へ出入りしていることは認めたわけですよ」
「それで〝吾妻〟へ現われた御殿ものは、越前家の女中だと言うのかい?」
「気に入りませんか?」

「ちょいと、シコリがあるね。女二人は若衆をひとりずつ連れていたと言うぜ」
「市三郎達が、御機嫌とりに、色若衆を世話したのかもしれませんな」
「なる程！　大いに気に入ったぜ。越前家の女を洗うのは、あたしがやろう」
「由良さんが?!」
「だって城之介、お前さんは、大番屋の良助の始末をしなきゃならねエだろう」
城之介は、ニヤニヤ笑いながら、うなずいた。
「――おまかせしますよ。越前家の方は……」
城之介が三九郎と別れて、茅場町の方へ足を向けると、日下兵馬が追いかけて来た。
「――お手伝いしましょうか……」
「それほどせわしくはないが、手があいてるなら来なよ」
「まッすぐ、大番屋へおいでになりますか?」
「いや、提灯かけ横丁の千賀の家を訪ねてみよう……」
千賀が住んでいた長屋の入口には、むさくるしい姿の男女が七、八人集まっていたが、城之介と兵馬の姿を見ると、ペコペコと頭を下げた。
「――どうしたんだ?」
城之介がたずねると、職人風の男が、待ちうけていたかのように喋り出した。
「どうにもこうにも、ベラ棒な話ですよ。長屋のものが集まって、千賀さんの葬いをしようとすると、博奕打ちの松五郎が大番屋から戻って来て、――千賀はおれの女房だ。葬いはおれがする。さッさと出て行ってくれ……ッてね、あたし達を追い出しやがったんで」
「情夫にしちゃア上出来のセリフじゃねエか」

「あの野郎、なにかたくらんでやがるんですよ。やつが狸いなんかするもんですか」
「さし当って、何をたくらむだろう？」
「銭をさがすでしょうね。千賀さんは、相当貯めて、どっかに隠してるッて評判でしたからね」
「千賀の家はどこだい？」
「奥から二軒目ですよ」
城之介は兵馬を促して長屋の木戸をくぐった。
千賀の家の入口には、祈祷師らしくシメ縄がはってあった。そして、右側の柱には、——御祈祷加持処……と書いた看板を掛け、カモイの真ン中の上には、奇妙なものが吊り下げてあった。——なにかケダモノの革らしいもので作った巾着のようなものと、大きなくちばしを持った鳥の頭蓋骨、鋭い爪をつけた猫の片腕、枯れたヒイラギの小枝、アワビの貝がら等を、麻の緒でひとまとめにしたものだった。
更に、左の柱には、縦長の紙がベタリとはりつけてあり、それには、——天立大王と書いてあった。その紙は、まだ新しかった。
「——ちょいと来てくんな……」
城之介は、さっきの職人風の男を呼ぶと〝天立大王〟と書いた紙を指さした。
「これは、なんのマジナイだい？」
「知りませんよ。四、五ン日前までは、〝天罪大王〟と書いてあったんです」
すると、うしろについて来ていた女が、口を出した。
「旦那、大家さんが言ってましたけど、〝天罪大王〟の前は〝大釜（おおがま）大王〟と書いてあったそうですよ」

「〝大釜大王〟から、〝天罪大王〟になり、〝天立大王〟になったんかい？」
「ここ半年くらいの間に、三度変ったんですよ。イワシの頭も信心からと言いますけどねエ。どうでしょう、あの鳥の頭や、猫の手……」
「いや、有難うよ。いいことを聞かせてくれた」
城之介は笑いながら、家の中へ入ると、ククク……と、含み笑いをした。
家の中には、千賀の死骸を納めた早や柿が置いてあり、その横に、胸をはだけた時雨の松五郎が、ボンヤリした顔で、胡坐をかいていた。
畳はひンめくってあるし、床板は二、三枚はがしてある。天井板もゆがんで穴があいており、松五郎は泥まみれの顔で、髷にクモの巣がからんでいた。
「――どうしたい。千賀の隠し金はみつかったかい」
「ヘン！　そ、そんなもの、さがしちゃアいませんよ」
「そうかい……。あたしゃ、いまここへやって来たばかりだが、銭の隠し場所から、金額まで知ってるぜ」
「旦那……」
松五郎が、ゴクリッと、生唾を呑みこんだ。
「本当ですかい？」
「本当さ。金額は、二十六両一分三朱……」
「からかわねエでおくんなさいよ。一分三朱だなんて、そんなにこまかくわかる筈はねエ」
「兵馬……」
城之介は、表にいる兵馬へ声をかけた。

「その鳥のシャレ頭ンとこの革巾着をおろしてみな……」
しばらくすると、兵馬が驚いたような面持ちで、巾着を持って入って来た。
「――千秋さん！　どうしてわかったんです。確かに、二十六両一分三朱入ってましたよ」
「――〝天立大王〟とね、千賀がおしえてくれているのさ」
「わかりませんなァ……」
「あたしもうっかりしてたよ。――大天王罪吾立切釜丸……。これは、坊主や祈祷師の符牒で、一から九だ。つまり天立――は二十六、大王は一と三。二十六両一分三朱さ」
「大が一ですか」
「――大無人……と言うんだ。大から人を無くせば一だろ。天無人が天から人をとって二。王無棒……で三。罪無非で四、吾無口で五。立無一で六……」
「あ……、じゃ七は切無刀ですね。八は釜無金、九が丸無点……」
松五郎が、ノコノコとはい出して来た。
「旦那……、その銭はどうなるんで……」
「お前に預けよう」
「本当ですかい?!」
城之介は、ポンと、革巾着を松五郎の方へ投げた。
「――その銭で千賀の弊いを済ませ。すッかり払いをすませたら、受け取り証と残金を揃えて奉行所へ持って来るんだ。一文たりともごまかせば入牢だぞ。左様心得ろ……」

六

その夜、城之介と兵馬は、浜町の〝吾妻〟の中庭に忍んでいた。——すぐ目の前の座敷で越前屋の市三郎始め、番頭の伝七、手代の安吉が、もうひとりの手代良助を責めていた。

障子がしまっているが、声は手にとるように聞こえて来るのだ。

「——あたしは、何も喋りませんよ。本当なんです。第一、大番屋では、一ツも調べられなかったんです」

そう言ったのは、良助の声だった。

「信じられないな……」

伝七が、すぐ喋り始めた。

「ねエ若旦那……。奉行所の同心が、大番屋まで引ッぱっといて、調べもせずに返してくれますかねエ」

「だけど番頭さん、本当なんですよ。同心なんて、何もかも知ってるような顔をして、その実、何も知らないんですよ」

「うまいこと言うが、良助……、お前まさか、あたし達を裏切って、自分ひとり、助かろうと言うんじゃないのかい？」

「番頭さん、だったら今夜、みんなといっしょに、ここへやって来やしませんよ」

すると、別の声が聞こえた。

「——良助、山路さま達がみえたところへ、同心達を手引きしようと言うのじゃないのかい？」

「若旦那！　考えてもごらんなさいましよ。町方の同心ですよ。山路さまなどへ、手が出せるか出せないか、わかり切ってるじゃありませんか」

その時、城之介達が隠れているところへ、ソーッと、近づいて来た男があった。

「――あたしだよ……」

小声でそう言ったのは、三九郎だった。

「表で、勘八から聞いたんだ」

「どうしてここへ?!」

「越前家の女共だよ。中老の山路ッて女が、表使いの藤尾、女小姓のよ乃、とねッて三人の女といっしょに、三日間のひまを頂戴して宿下りしたことを聞きこんだ。山路ッて女は、中老に出世してるが、越前の札差の娘だ。張りこんでるとね、この四人の女が、家の前から、コッソリ屋形船へ乗りこみやがった。――昨夜のとおり浜町ですね……と船頭が言いやがった。で、あたしゃ、こちらへ素ッ飛んで来たわけさ。もうすぐ、女達はやって来るぜ」

「女四人ですか?」

「それが面白れエじゃねエか、女小姓二人は、大振り袖に袴をはいた若衆姿なんだ」

突然、カン高い女の笑い声が聞こえて来た。

「ホホホ……、良助は番屋へひかれたのか？　それは気の毒であったな。その埋め合わせに、よ乃からたんと可愛がって貰うがよい」

「でも、若旦那始め番頭さんは、わたくしを裏切者だと仰有います」

「市三郎、ここへ来や……」

女が、からみつくような声で呼んだ。

「――責める相手が違うぞえ。そなたが責めるのは、わしじゃわいな」
「あ、山路さま、このような広間で……」
「だいじない。今宵はここで、四組揃うて岩戸開きじゃ。初庚申も済んだし……。のう、藤尾どの」
「そうじゃ！　それが面白うございましょう。よ乃、とねも、早よう、良助や安吉に抱いて貰うがよい。わしは、番頭どのじゃ……。これ伝七、もそッと力を入れんかいのウ」
庭では、三九郎がキリキリッと、奥歯を噛み鳴らした。
「――ケダモノめ！　あたしだって情事は好きだが、あんなふざけた真似はしねエ」
「ここいら辺りで、幕を閉めますか」
「待った！　あたしに一番乗りをさせてくんな……」
しばらくして、サラリッ……と、座敷の障子が引きあけられた。ギョッと、息を呑んだ四組の男女は、あかあかとした灯火の下に、目もあてられぬあさましい姿をさらけ出していた。
「――ぶ、無礼なッ！」
まッ蒼になった山路が、それでも血を吐くような声で叫んだ。すると、城之介が、水のように、冷ややかな面持で言った――
「――越前家お女中方はお引きとり願いましょう……。市三郎始め番頭、手代は、女祈祷師千賀殺しの下手人とその一味として、お召捕りに相なる。神妙にせい……」
「わ、わたくしは何も知りません！」
番頭の伝七が、抱き締めていた藤尾と言う表使いを放り出して叫んだ。
「――若旦那です！　お女中方のお相手をしろと言ったのも若旦那です……。昨夜、あたし達のことをすき見した千賀を殺したのも若旦那ですッ。お女中方との情事で、強請られるかもしれないからっ

て、千賀を――」

「知っているぜ……。千賀は、ちゃんと、市三郎の名前を書き残していたからな」

ゆっくりそう言う城之介の言葉に、市三郎や女達は、シン……と、息をひそめてしまった。

それからしばらくして、八丁堀への帰り道、兵馬が、城之介にたずねた。

「千賀が、市三郎の名を書き残したって、本当ですか？」

「おや……、まだわからねエのかい?!　閻魔堂の踏み板に、大王……と、血で書いていた」

「あ！　大無人、王無棒で、一三ですね」

「一三――即ち市三さ。市三郎と書きゃア、必ず下手人に消される。それで、大王と書いた」

城之介は、スーッと、冷たい夜気を吸いこむと、痛ましそうに言葉を続けた。

「人の一念てやつア怖ろしい。断末魔の千賀に、それだけの判断があった。そして、最後の力を振りしぼって、書き残したのさ……。いずれにしても、庚申の夜は気をつけなきゃアいけねエなあ……」

厄除け心中

一

「――けッ！　気のきかねエ恰好だよ、全く……」

由良三九郎が、いまいましげに、つぶやいた。

高輪八ツ山下の番屋であった。房州から、品川の海を渡って袖ガ浦へ吹きつける風が、立てつけの悪いスキ間から、遠慮なく番屋の中を吹き抜けて行った。

「――八ツ山で日の暮れを待つけちなやつ……ッて川柳があるが、このあたしがだ、南町奉行所定町廻り同心由良三九郎が、こんなところで夜明かしをしようたア、夢にも思わなかったなア」

「なんですか、いまの川柳は？」

囲炉裡端に、キチンと坐っていた日下兵馬が、三九郎へとも、千秋城之介へともなくたずねた。

「目と鼻の先に、品川の女郎屋が、ズラーッと並んでるだろ」

「はア……、並んでいるようです」

「ジレッてえなア、全く。兵馬は、品川で遊んだこたアねえのか？」

「ありません」

「話にならねエ……」

そう言って、ソッポを向いた三九郎に代って、城之介が口を開いた。

「品川の女郎は、昼夜一貫の四六見世だ。女の揚げ代が昼間六百文、夜が四百文てわけさ。かりに、昼過ぎに日本橋辺りを出て、ブラブラやって来ると、品川がちょうど二里。ま、三時頃になるだろう。それから女郎屋へ行っても昼間の分をとられる。で、八ツ山下辺りでしばらく海でも眺めてると、日が暮れらアね」

「わかりました。それから品川へ行けば、夜の四百文だけで遊ぶことが出来る。そう言うわけですね」

「ついでに言っとくがね、品川女郎に限って、揚げ代を六百文だ、五百文だとは言わねエ。六寸、五寸、四百文で買える女郎は四寸玉だ」

「花火みたいですな」

「女ッてやつは、所詮花火みてエなものさ。みかけは派手だ。のぼせるとカーッと熱くなる。が……、それッきりのものさ」

すると、三九郎が口を挟んだ。

「中でも奥女中なんてものは仕掛け花火だよ。キンキラキンで、見てくれは美しいが、裏へ廻れば味もソッケもねエ」

「由良さん、ひどく奥女中に当りますなア」

「あたりきよ！　一月の二十日だぜ。この夜寒に大の男の急所をちぢこまらせやがる。あたしゃ腹が立ってならねエ」

正月の二十一日は、お大師さまの日だった。江戸では、川崎大師と西新井大師に参詣に出かける。

殊に、厄除け大師の川崎平間寺には、厄年はもとより、前厄、あと厄の男女が踵を接した。

男は、二十五と四十二が厄年だ。女は、十九と三十三歳である。

——うろおぼえ十五年目に来たお寺……。とは、十九で参詣した女が三十三でまたやって来ることだ。——水入らず七十五にて奈良茶なり……とは、夫が四十二、女房が三十三。夫婦仲よくお大師さまに参って、川崎の万年屋で奈良茶づけを食っていると言う風景である。

「ところで、本年、大奥西ノ丸では、御簾中さまが十九歳の春をお迎え遊ばされた。ついては、お年寄常盤井どのが、川崎大師へ御代参になる。お女中のこととて、途中、八ツ山下越後屋別宅へお泊まりになる御予定じゃ。御苦労だが、三人で警護して貰いたい……」

けさ、同心部屋で、三九郎と城之介、兵馬の三人に、同心筆頭の早水茂太夫が、そう言ったのだった。

「——なにも、あたし達を名指しにするこたアねエじゃねえか。年の若い順とかさ、筋の通ったやり方にして貰いてエよなア」

城之介が、クスリッと笑った。

「若い順と言うと、大学、兵馬、それにあたしッてわけですな」

「済まねエ……。じゃ、クジッてのはどうだい。六人いるんだからさ」

「ま、いいじゃありませんか。道路一ツ向うの越後家別宅にいる三十人近い女達が、あたし達三人の見張りで、安心して眠れる……、そう考えりゃ、悪い気もしねエでしょう」

「もったいねエ話さ、全く……。若い女が三十人、男ッ気なしでねンねしてるんだからなア……」

西ノ丸御簾中さまとは、やがて十二代将軍になる家慶公の奥方のことだった。奥方は、京都から下られた有栖川卿の姫君である。そして、御代参のお年寄常盤井は、京都からついて来た公卿侍の娘だ

った。

江戸城から川崎大師までは、ざっと五里余りである。往って戻って十里、しかも、途中六郷で渡し舟に乗り、平間寺では特別に厄除けの祈祷をして貰わねばならぬ。それも、女乗物に行列を揃えて静静とねッて行くのだから、一日ではとても無理だ。

そこで、大奥御用達呉服商越後屋の別宅が八ツ山下にあるのを幸い、往復とも、ここに泊まることになったのだ。

品川からだと、川崎まで二里ちょっとである。これなら、日があるうちに、行って帰ることが出来よう……。

その飛ばッちりが、城之介達三人へ来た。——日暮れ前から、それぞれ人数を連れて八ツ山下へ乗り込み、越後屋の別宅を取りまいて、警護に当ったのだ。

「——御苦労さまでございます……」

兵馬の小者針の嘉助が、腰をかがめて、番所へ入って来た。

「——お年寄お宿舎に変りはないか？」

兵馬がたずねた。

「へエ……、いまひと廻りして来ました。裏表、その他の通用門は、手のものでかためております。それから、五人ひと組で、屋敷のまわりを廻わっております。まず、こともなく夜明けを迎えることと存じます」

「御苦労であった。しばらく、あったまって行くがよかろう……」

すると、三九郎が、傍らの大きな土ビンを指さした。

「本当だ。御苦労だな、嘉助。景気付けに一ぱいやれ……と言いてエが、お役目中につき、酒ッ気抜

きだ。番茶で辛抱しなよ」
「へエ……。お淋しいことですなア」
「淋しいよ……」
三九郎は、城之介へ顔を向けた。
「厄年はいつだい？」
「あたしですか？　四十二にゃ、まだ当分ありますよ」
「逆げエねエ……。嘘にも、二十五前と言える程若かアねエなア。ざまア見やがれ」
「御機嫌ななめですなア」
「よかろう筈はねエやな。一体、この厄年ッてなア、誰が決めたことなんだ？」
「源氏物語の〝薄雲の巻〟に、——いとわかく、さかりにおわしますさまを、おかしく、かなしとみ奉らせ給う。つつしませ給う御年なるに……とあります。つつしませ給う御年とは、厄年のことでしょう。つまり平安朝の昔から厄年はあるようですな」
「お前さんてひとは、下らねエことを、よく知ってるなア」
兵馬が、城之介を眺めた。
「では、なぜ、男二十五と四十二、女十九と三十三を厄年と言うのでしょう？」
「易では、男にとって二は陰で、五は陽だ。また女には、十が陰で、九が陽となる。即ち、陰上陽下……、これは不吉なりッてわけさ」
「三十三と四十二はどうです？」
「三十三は散々に通じ、四十二は〝死に〟と訓がおなじだ」
「つまらんですなア」

「そうなんだ。厄年なんて、なんの理由もないつまらぬ迷信なんだ。ただね、大体男の二十五と四十二、女の十九と三十三と言やア、体がなんとなく変る頃だ。気を付けた方がいいッて意味では、厄年もまんざらつまらなかアないぜ」

すると、三九郎が、いらいらしたように舌打ちをした。

「その迷信ゆえに、あたし達アこの苦労……。大体ね、奥女中なんて、気がきかねエ。いくら酒ッ気禁制でもさ。さぞお疲れであろう。お茶代りに……ッて、一升くらいとどけて来ても罰は当るめエ…」

その時、ソッと、入口の油障子をあけて、初々しい高島田の娘がはいって来た。

「――常盤井さまが、お三方をお呼びでございます。おいでいただけましょうか?」

二

越後屋の別宅は、数寄をこらし、贅を尽したものだった。しかも、――町人の分際で……などと言われるため、目立たぬところに、金がかけられていた。

さりげなく庭石の一ツ一ツにも、心得のある城之介は、目を見張った。――佐渡の赤石、伊部の水石、紀州の苔石……。石ころ一ツになん十両とかかっているだろう……。

その奥行きの深い庭に面した奥座敷で、西ノ丸御簾中付きお年寄常盤井が待っていた。――お年寄とは役目のこと、年は、せいぜい二十三、四と思われた。

片はずしの髪も艶やかに、唇を染めた京紅が玉虫色に光っていた。

「――夜中……、ほんまに済みまへんなア」

笑顔の常盤井は、やわらかな京なまりで、三人の同心を迎えた。

「――火急のお召し、いかなる御用向きでしょうか？」
年かさの三九郎が、一同を代表してたずねた。
「ホホホ……、そう堅くるしゅうもの言われては、どもならんなア……」
常盤井はそう言うと、軽く手を叩いた。
すると、既に用意が出来ていたのか、数人の奥女中が、酒さかなの道具を捧げて現われ、三人の前に、それぞれ結構な料理の膳を並べた。
「――御苦労でしたなア。さぞ寒いことどしたやろ。ほんの心ざしどす。これからも、よろしゅうお願い申します……」
常盤井は、そう言って、丁寧に頭を下げた。
「――これは、恐れ入ります……」
三九郎が、あわてて、礼を返し、城之介や兵馬と顔を見合わせた。
「さぞ、気のきかん女やと、お思いやしたやろ……。でも、十時前は、人目がおすさかいなア、いままで、遠慮しておりました」
「いやいや、全くもって、思い掛けぬことです」
「嘘おいやす！　番屋で、奥女中は気がきかん、そうお言いやしたの、どなたどす？」
「や……、これは！」
すると、常盤井が、コロコロと笑った。
「さ……、お三人共お気楽に……。うちも、楽にさして貰います。大奥では肩がこって……。うちは、お年寄と言う役どすけど、もとは、六位の蔵人の娘どす。六位の蔵人と言えば、江戸の御家人衆くらいのものどっしゃろな……。そのお積りで、面白いお話でも、聞かせておくれやす」

それから、常盤井は、ひとりひとりの顔を順番に眺めた。
「――由良三九郎どの……、千秋城之介どの……、日下兵馬どの……。そうどッしゃろ？」
「ハハハ……」
突然、城之介が笑った。
「――一本、参りました。常盤井さまは、隠密をお使いですか？」
「めッそうな！　ほんまのことを言えば、大奥の女達は、男はんと話がしとうてなア……」
そう言いながら、常盤井は、控えている女中達を見廻した。
「みんなの顔を見ておみやす。ただもう、男はんのそばにいると言うだけで、あの嬉しそうな顔…」
「あれ！　お年寄さま！」
ちょいと、蓮ッ葉らしい女が、はずかしそうに、両手で頬を押さえた。
「でも、お年寄さまが仰有るとおりでございますよ。あたくし共の知っている男と言えば、役者衆の似顔絵ばかり……」
「それでなア……」
常盤井が、また話を引き受けた――
「きょう来てくれはる同心衆は、なんと言うお名、どんなおひと……と、もう昨日から、えらい騒ぎ」
「常盤井さま……」
城之介が、ニッコリ笑って、常盤井を見詰めた。
「それにしても、常盤井さま始め、お女中方御一同のお目は美しく、清々しく澄んでいます。淫らな光は、いささかも認められませんな……。従って、ただ男珍しさに、お呼び入れになった……とは考えられません」

「さすがは町奉行所定町廻り同心……。おそろしい御眼力じゃ」
ピタリッと、常盤井の言葉が、あらたまった。
「が……、大したことではありません。わたし共のささいな悪戯……。お末ひとり、この屋敷を出るのを見逃がして下さらぬか……。これ、お初をこれへ……」
やがて、お初と言うお末が呼ばれて来た。
「あ……、このひとは……」
三九郎が、驚いて、常盤井を見た。
——さっき、番屋へ三人を迎えに来た女だったからだ。
「お初は、とどろき坂の袋物屋角惣（かくそう）の娘御です」
「ほう……、角惣の？」
城之介は、受け持ち区域内の角惣を知っていた。当主は角屋惣兵衛……。市ケ谷では指折りの金持ちだし、袋物屋としては、名の通った店だった。
娘が二人あることは知っていた。姉がお初で、妹がお幸であることも知っていた。が……、当人を見たのは、今夜が初めてだった。
「そうですか、あの角惣の娘御か……。わたしは、市ケ谷・牛込を受け持っている同心なのだ。主人の惣兵衛はよく知っている」
城之介は、常盤井へとも、お初へともなく言った。
「では……、近くの米屋庄内屋をご存知か？」
お初より先に常盤井がたずねた。
「存じています。父親は先年亡くなり、いまは長男の六兵衛夫婦があとをとり、新七と言う弟が手伝

っています」
「お初は十九、新七は二十五になります」
「二人共厄年ですな」
「先程、ささいな悪戯と申しました。わたくし共は、お初と新七と二人揃って、川崎の大師参りをさせてやりたいのです」
それから常盤井は、キッとした態度で、三人の同心を見廻した。
「――こ宵のお三人のお役目は？」
「この屋敷の警護です」
三九郎が答えた。
「それだけでしょうか？」
「と、申されますと？」
「この屋敷から、女中が自まま勝手に抜け出したとしたら？」
「それは……」
三九郎は、言葉に詰まって、城之介と兵馬を見た。
「――と、取りおさえますッ……」
兵馬が、コチコチになって答えた。
「御代参はお年寄常盤井さま公のお役目です。そのお供の女中方も、公のお供です。たとえ、町人の別宅へお泊まりとは言え、大奥においての場合と異りません。従って――」
「自まままの行いは許されぬ……と、申されるのでしょう？」
「そ、その通りです。間違っているでしょうか？」

「待てよ、兵馬……」
城之介が、兵馬の言葉を押さえた。
「お前さんの言葉は間違っちゃいない。が、法は、これを扱うものによって、生きもすれば、死にもする……」
城之介は、常盤井へ顔を向けた。
「――おうかがい申します。お初どのと新七は、祝言する仲でしょうな？」
「近々に、お初はおひまを頂いて、角忽へ戻ることになっています」
城之介は、軽く、頭を下げた。
「――お初どのは、わたくしがお預りいたしましょう……」

三

次ぎの朝、三九郎達三人は、品川宿のはずれまで警戒して、御代参の行列が行きすぎると、ホッと、肩をおとした。
「――こん夜もまた夜明かしで警護だ。いまのうちに寝とこうぜ……」
そう言って三九郎は、目についた品川の遊女屋〝新々百足〟の店へ入って行った。
「――由良さん！」
兵馬があわてて引きとめると、振返った三九郎が、ニヤリと笑った。
「女郎を買おうッてんじゃねエぜ。御用筋でおつかれだ。手近かな町人の家で休むだけさ。見渡したところ、他に地道な店があるかい？」

そう言われてみると、そこは女郎屋町だった。——遊女旅籠と引手茶屋の他には、休めそうな家はないのだ。

「——あたしゃ、あとから行くよ。気にしねエで休まして貰いな……」

城之介は、兵馬を〝新々百足〟に押し込むと、店先に、腰を降した。

小者の勘弁の勘八が遊女町へ姿を現わしたのは、それから一時間ばかりしてからであった。

「どうだった？」

城之介が、お初のことをたずねた。

「なんとねエ旦那……。ちゃーんと、約束が出来ていたんですぜ。相手の男が、鈴ケ森で待ってやがったんで……」

「へエ……、なにかと厳しい大奥にも、どこか裂婆の風の吹き抜け口があるとみえるな。で、お初と新七は、お手々つないで、大師参りかい？」

「いえね……。新七には、とどろき坂の頭ンとこの若いもんで三次ッて男がついていましたよ。それから、角惣からは、後妻のお種と、妹娘のお幸が来ていました」

「なんでエ！　それじゃお初・新七、余り楽しい話も出来ねエな……」

「だけど、二人ッ切りでいられるよりは安心ですよ。暮れ六ツまでには、必ず八ツ山下の自身番へ顔を出す……、お初はそう言ってましたよ」

「大きに、母親や町内の若いもンが付いているなら、間違いはあるまい……」

城之介は、安心して〝新々百足〟に入った。

三九郎は、さっき客を送り出したばかりの女郎達にとりまかれ、いい気持ちで酒を呑んでいた。同じ部屋の片隅で、兵馬が、壁に寄りかかって、眼を閉じている……。

「あたしが呼んだわけじゃねエぜ……」
三九郎が、城之介を見上げて、ニタリッと笑った。
「女共が、勝手に集まって来やがったんだ。男ッ振りがいいとつれエよ」
「あたしゃ、寝させて貰いますよ」
城之介は、女に枕を二ツ出させて、兵馬の肩を叩いた。
「——町奉行所同心はね、どんなところでもグッスリ眠れる……。そうならなきゃア一人前じゃねエよ」
そう言って横になった城之介は、四時過ぎまで眠った。勘八が起こしに来なかったら、もっと眠っていたかもしれない。
「——御代参の行列が、鈴ケ森を通り過ぎましたよ」
「そうかい。お初は？」
「まだですが、ソロソロ、戻って来るでしょう」
「じゃ、八ツ山下の番屋へ行っていよう。もう少したったら、由良さんと兵馬を起こしてくんな……」
城之介は、よく眠っている三九郎と兵馬を残して、〝新々百足〟を出た。
八ツ山下の番屋へ着いたのが五時過ぎ……。もう房総の山々は暗く、西の方遥かに、富士の峰だけが、赤く照らされていた。
やがて、御代参の女行列が、ゆっくりと近づき、八ツ山下で左へ折れて、越後屋の別宅へ入った。
「——城之介、お初は？」
行列について戻って来た三九郎がたずねた。
「まだです」

「けッ！　だから御殿ものはいやさ。普段男ッ気のねエところにいるから、いざ男に出会うと、ソックイではり合わせた板みてエに、離れやしねエ」
「が……、二人だけじゃないんです。他にも、付き人がいるんですよ」
「へエー……。ところで、あの娘を女房にする米屋の次男坊てエなア、いい男かい？」
「ええ……、米屋らしく色が白くてね。ちょっと弱そうな男ですよ。それに、親父が死んでから、庄内屋はだいぶ左前のようなんでねエ、角惣とは、だいぶ格が違いますよ」
「当人達は惚れ合ってても、娘の親がなんと言うかな？　さしあたって、婿に入るわけだろう……」
「ええ……。が、娘の方じゃ、お袋がいっしょだと言いますから、まア、話はうまくいってるんでしょう」
その時、兵馬と勘八が、顔色をかえて、番屋へ飛びこんで来た。
「――千秋さん！　一大事ですよッ！」
「どうしたんだ？　なにか、あったのかい？」
そう言う城之介へ、勘八が、どもりながら言った――
「――あッあッあの女ッ……、しッしッ、心中しましたぜッ……」

四

「お初どのと新七は、御殿山の桜の下で、息絶えておりました……」
千秋城之介は、お初、新七の死体を検死して戻って来ると、その足で越後屋の別宅へ行き、お年寄の常盤井に様子を告げたのだ。

「――わからぬ……」
常盤井が、溜め息といっしょに、首を傾げた。
「あれほど喜んで行ったお初が、なぜ相対死などしたのであろう？」
「書きおきなどもなく、いまのところでは、なんとも申せませぬ」
「相対死に、違いないのであろうな？」
そう言う常盤井の顔を、城之介は思わず見詰めた。
御殿山は、江戸指折りの桜の名所である。とは言え、まだ一月のなかばを過ぎたばかりのこと、花はおろか、蕾さえまだふくらみを見せていなかった。
そのひともとの老木の下に、若い男女が倒れていた。
「体を、くくり合わせていましたか？」
「いや……、離ればなれになっていました」
「お初は、腰をくくっていましたか？」
城之介は、ゆっくり首を横に振った。
「それでも、相対死と言われるのか？」
「芝居狂言の心中ものではありません。揃いの衣裳で手に手をとって……、それは絵空ごとです。心中であろうが、ひとりで自害しようが、われとわが命を絶つ……、その時は、狂気しているのと同じと考えます」
「でも……、お初は、自害の作法を心得ております。大奥にあがり、あたくしの手もとに付くようになったとき、まず、事に臨み、最後を迎えたときの作法を教えました」
「しかし……、あの女は町人の娘……。袋物屋角惣の娘です。武家育ちではありません」

「一生の大事を教えたのです。そのように早く忘れるとは思えません」
「検死は、わたしひとりでしたのではありません。同役の由良三九郎、日下兵馬、三人です」
常盤井は、冷やかな目を城之介に向けた。
「お三人の御意見は、やはり相対死なのですね？」
「突かれたのでも、斬られたのでも、くびり殺されたのでもないのです。明らかに毒死です」
「毒を呑まされた?!」
「いや……。ご存知でしょうか、御殿山には、あちこちに、茶店があります」
「花見客のためですね？」
「いや、風流な町人が、雪見に出かけ、まばらな梅を見に行きます。そのため、昼のうちは、幾軒か茶店が開いています。そこの湯呑み二ツに水をくみ、お初どのと新七は、それぞれ、自分で呑んでおります」
「なんの毒です？」
「吐血の量が少ない割に、死相のすさまじさ……。服毒から絶命の間は短かかったものと思います。恐らく、南蛮渡りの毒でしょう」
「どこで、手に入れたのでしょう？」
「わかりません。川崎の米まんじゅうの包み紙が二枚、転がった湯呑みのそばに落ちていました」
「最後に、もう一ツたずねましょう……」
そう言うと、どうしたことか、常盤井が、ポッと、頬を紅くした。
「どのようなことでしょう？」
「万葉の古歌に、――高麗錦ひもときさけてぬるがへに、あどせろとかもあやにかなしき……とある

のを御存知か？」

そうたずねて、常盤井は、フーッと、せつなそうに息を吐き出した。

「その点、わたくしもいささか不審に思っております。お初どのは、童形と見ました」

「それはおかしい……。わたくしは明日、二時にこの屋敷を出て、大奥へ戻ります。それまでに、もう一度吟味を頼みます」

「実は、小者を川崎まで走らせています。何か摑んで戻ってくるかもしれません」

常盤井は、思いがけぬ好もしげな瞳を城之介へ向けた。

「――万葉のお心得があって、恥をかかずに済みました。礼を言います」

「大奥の御女中の中に、常盤井さまのような有情のお方がおいでとは、意外でした」

「このようなことでなく、ゆっくりお話がしたかったと思います」

城之介が黙って頭を下げると、常盤井は、ソッと、黒塗りの扇子を残して座敷から出て行った。

扇子を手にとってみると、ぷーンと、白檀の匂いがした。

――が……、所詮は高嶺の花さ……。

城之介がそう思ったとき、障子をあけて、三九郎と兵馬が入って来た。

「――余り遅いんで、心配して来てみたんだ。番屋には、早水さんも来ておいでだぜ」

「常盤井さまは、鋭いお方ですな……。あれでなけりゃ、お年寄は勤まりますまい」

「あたしゃ、最初から聞いていたわけじゃねエが、なんでエあの難かしい歌は？」

「――高麗錦……ですか？」

「高麗錦のひもが切れたとか何ンとか……」

「――高麗錦ひもときさけて寝るが上に、あどせろとかもあやにかなしき……。恋歌ですよ。錦のひ

もをといて、肌身を許しあって寝ているが、まだまだ足りない、じれったいねエ……と言うわけ。切羽詰まった女の気持ちですよ。男と相対死する時は、そんなものでしょう」

「――心中の満腹そうな顔二ツ……。とにかく心中する前の男と女は凄まじいッて言うからなア」

「それを、大奥女中のつつしみで、あからさまにゃ言えない。万葉の古歌にたくして、お初と新七は、死出の楽しみを交していたか……と、常盤井さまがたずねた」

「だが、城之介……。お初の股ぐらは、とっくりと調べたが、ありゃア未通(みつう)だぜ」

「ですから、――女は童形(どうぎょう)……と答えました」

三九郎は、兵馬を振返って苦が笑いをした。

「――城之介に来て貰ってよかったなア。あたしだったら、赤ッ恥をかくとこだった。万葉のなぞなぞなんて、てんで通じねエよ、あたしにゃア……」

三人が八ツ山下の番屋へ帰ると、同心筆頭の早水茂太夫が、イライラとした様子で立ち上がった。

「――お代参のお年寄は、お困りだったか？」

「お代参のお供の中から心中者が出たとあっては、勿論、御簾中(ごれんちゅう)さまへの首尾が悪く、お困りのことでしょう。が……、そのことにはひと言も触れず、お初は相対死に間違いないか……と、そればかりおたずねでした」

「では、お年寄は、お初が殺された……とでも考えておいでなのか？」

「いろいろお話しているうちに、なる程、そう言う考え方もあるのか……と思いました」

城之介は、常盤井があげた疑問の数々を並べてみた。

――まず、心中なのに、お初と新七が離れ離れになって死んでいたこと……。

――お初が御殿勤めの作法も忘れ、膝や足を綻っていなかったこと……。

――喜んで出て行ったお初に、死なねばならぬ理由が考えられぬこと……。

――死の直前に、この二人が最後の情を交していなかったこと……。

「――城之介……、その中の三ツ目、お初に死なねばならぬ事情はなかった……と言うが、男に生きていられぬ事情があったかもしれぬぞ」

「そうですとも。それに、心中者は、なにがなんでもいいことをしてから死ぬ……とは決まっちゃいねエでしょう」

茂太夫に続いて、三九郎がそうつけ加えた。

「ただ……」

茂太夫が首を傾げた。

「なア三九郎、言われてみりゃア、御殿姿の女が、股をおッぴろげ、裾を乱してもがき死に……と言うのは、ちょいとうなずけないような気がするなア」

「しかし、湯呑みと言い、米まんじゅうの包み紙と言い、毒をあおって死んだ……。そうとしか考えられねエですよ」

すると、城之介が、茂太夫を見た。

「角惣も、米屋の庄内屋も、とどろき坂で、あたしの受け持ちです。それに、お初を引きうけて、新七に会わせたのもあたしです……。再吟味は、あたしがやりましょう……」

五

御殿山は、品川北本宿二丁目の自身番が受け持っていた。

「――あ……、旦那……」

城之介が、番所へ入って行くと、三人いた町役人が、ちょいと慌てて立ち上がった。

「――御苦労だなア。かれこれ九時だろう。御殿山の一件で、こんなに遅くまで詰めているのかい？」

「それが……」

一番年かさの町役人が、揉み手をしながら、幾度も頭を下げた。

「――旦那……、一ツ、お目こぼしをお願い出来ませんでしょうか？」

「なんのことだい？」

「男と女の身よりの者が、いましがた、御殿山へ行きましたんで……」

心中者の葬いは、法度であった。

――男女の情死せしは、死骸とりすつべし。一人存命ならば下手人たるべし。死骸埋葬なさしむべからず。双方とも存命ならんには、三日が間市にさらして非人の手につけらるべし……。

こんなおふれが享保八年に出ているのだ。

が……、身内のものにしてみれば、むざむざと息子や娘の死骸が投げ込みにされるのを見ていられるものではない。やはり、墓の一ツも建ててやりたい。

――心中の追ッ手に親のゆるし文……と言うわけで、出来れば一ツところへ埋めて、比翼塚にしてやりたい……と言うのが親心というものであろう。

そこで、こッそり、町役人へ手を廻す。――御迷惑をかけました……と、相当の金を包めば、表向き取り捨てと言うことにして、内証で死骸を渡してくれる……。

城之介にしたって、それを目くじら立てるほどの野暮てんではなかった。

「誰が来てるんだい？」

「角惣の主人夫婦と、妹娘と、番頭……。それに、庄内屋の方は、兄夫婦が、とどろき坂の頭や若い者につき添われています」

「あたしゃ、目をつむってやるよ……。が、そのひとりひとりに会ってみてエ……。御苦労だが、御殿山へついて来てくんな」

「いえ……、それなら、呼んで参ります」

「いや、ここじゃ都合が悪いんだ。山へ行こう……」

城之介は、表へ出ると、町内の番太郎を呼んだ。

「——同役の日下兵馬、それから、あたしんとこの勘八てエ男が来る筈だ。山の茶店にいると伝えてくれ……」

城之介は、町役人三人に案内させて御殿山へ登ると、わりかし近くに並んでいる茶店三ツを指さした。

「——右端の茶店へ、身内のものを集めろ。あたしゃ、まん中の茶店で、話を聞く。用の済んだものは左端の茶店で待たせるんだ……」

そう言って城之介は、町役人のひとりから提灯を受けとると、まん中の茶店へ入って行った。

茶店と言っても、葦簀ばりに、床几を並べただけのものである。

城之介は、茶釜のそばの柱に提灯をくくりつけると、灯りを背にして、腰を降ろし、まず、角惣の主人を呼んだ。

「——どうも、飛んだお手数をおかけしまして……」

五十を過ぎた角屋惣兵衛は、ゲッソリと、気落ちした様子で城之介の前にしゃがんだ。——城之介からは、相手の顔がよく見えるが、相手からは灯りを背にした城之介の顔色は読めなかった。

「気の毒なことをしたな。子供は、娘二人だけかい？」
「へエ……、妹娘のお幸を生むと、前の家内が亡くなりまして……、それから十年余り、男手一ツで娘二人を育てましたが、縁があって、いまの女房を迎えました。ところが、これに子供が出来ませんので……」
「じゃ、いまのかみさんにとっちゃ、姉も妹も義理ある仲ッてわけか？」
「でも……、お種は、よく出来た女で、二人を実の娘のように可愛がっております」
「お初は、近々、大奥をさがる筈だったな？」
「へエ……、別に許婚と言うわけじゃございませんが、庄内屋の弟と好き合っていることは存じておりました。それで、新七を婿に迎える積りだったのですが……、なんだってまた早やまったことを…」
そう言って、涙にくれる惣兵衛だった。
城之介は、惣兵衛を左の茶店へ行かせると、角惣の後妻お種を呼んだ。
お種は、デップリと肉付きがよく、いかにも大家のお内儀と言った押し出しで、ちょいと垢抜けのしたいい年増だった。
「いくつだい？」
「四十三になりました」
「角惣へ嫁入りしたのは？」
「八年あとになります」
「じゃ、初めての亭主じゃねエな？」
「あたしは、とどろき坂の魚屋魚兼の娘なんです。十九の年に、家が左前になったので、芸者に出ました。それも、江戸じゃ世間にみっともないので、伊豆の下田へ行ったんです。でも、二年ばかり

で、伊豆松崎の網元にひかされて、囲われました。それから丁度十年、男に死なれて、江戸へ戻って来たんです」
「そして、角惣へ後妻に入ったッてわけか？」
「江戸へ戻って、三年ばかり、三味線の稽古などしましたよ」
「子供は？」
「伊豆でひとり、男の子を生みました。網元の家へ引きとられたので、生きてるか死んでるか知りません」
「けさ……、お初とは鈴ケ森で落ち合ったのだな？」
「五日前に、宿下りで戻って来たときに、そう決めたのです。お代参のお供に加わっており、常盤井さまが、多分大目に見て下さると言うものですから……」
「どこで別れた？」
「品川宿へ入ってからです。八ツ山下まで、新七さんと二人ッきりにしてやりたかったからです。でも、あの時別れなかったら……」
お種は、思い出したように、袖で目頭を押さえた。
次に呼んだ妹のお幸は、ただおろおろとするばかりで、まとまったことも言えず、せつなげに、肩で息をしては、涙をこぼした。
お初、新七と品川宿で別れたと言うことは、お種の口と合っていた。
新七の兄、庄内屋の六兵衛と、女房のお六は、共に、なにがなんだかわけがわからないと言った。
「――あたくしんとこは、角惣さんとは比べものにならぬ貧乏暮らしです。それで、婿入りのこともお断りしたのですが、どうしても……と仰有るものですから……」

「新七さんは、見かけはひ弱そうでしたが、シンは強かったんですよ。あたしが嫁に来てから、病気したこともございません。それはもう、お初さんとの祝言を楽しみにして……」

これが、六兵衛夫婦の言葉だった。

とどろき坂の頭好之助は、ただ首を傾げるだけだった。——身内でもなく、川崎へついて行ったわけでもないので、これは当然のことと城之介は考えた。

「どうだい、これから角惣はどうなると思う?」

「そりゃア、妹娘のお幸さんがいるんですから、あとつぎにゃ困らねエでしょう」

「お幸の好きな男は誰だい?」

「えっ?!」

好之助が、驚いて顔をあげた。その顔をじっと見詰めて、城之介が言った——

「——町内の頭は、いろいろのことが耳に入るだろう。お初には新七と言う恋しい男がいた。お幸だって、十七だ」

「まだ、子供ですよ」

「馬鹿ア言え! 十三パッチリ、毛十六……。十六で娘は道具みな揃い……。十七なら立派なもんだ」

「そ、そうですかねエ……」

好之助は、角ばった顎をなでてから、へへへ……と、頭を掻いた。

一番あとで呼んだ若い者三次は、品川からお種とお幸の供をしてとどろき坂へ帰ったと言った。

「——お前エ、いくつだ?」

「二十三です」

「生国は？」
「相州藤沢で……」
「いつから好之助のところにいる？」
「十五ン年からです」
「いい男っ振りだな」
「旦那……。からかっちゃいけません」
が……、城之介は、からかってはいなかった。——中肉中背……。ちょいといなせなその顔に、どっか見おぼえがあったのだ……。

六

勘弁の勘八が、御殿山の茶店へやって来たのは、十一時近くだった。
城之介は、幾度も提灯のローソクを点けかえ、薄ら寒い床几で、じっと考え続けていたのだ。
「なにしろ、厄除けで、大勢が川崎大師へ押しかけてるでしょう。角惣親子達に気付いたものは殆んどありませんよ。ただ、川崎の万年屋で、それらしい客があったと言ってるくらいのものです」
「それらしいとは？」
「母親と娘二人、若い男二人の五人連が奈良茶を食った」
「どうして覚えてるんだい？」
「供をしていた若い仕事師らしい男が、奈良茶をひっくり返したんだそうです。その男、みやげに米まんじゅうの上物を買ってったそうです」

「上もの？」
「鶴と亀の絵を刷りこんだつつみ紙で、一ツずつ饅頭がくるんであるんです」
心中した二人のそばに落ちていたのが、その包み紙なのだ。
「その饅頭に毒を入れて食ったんでしょうか」
「まごとじゃねエぜ。そんな色気のねえ心中ってあるかい？」
「そのままごとで思い出しましたが、変ンなことがはやっていますよ。厄落しに一度死ぬんです」
「死ぬ?!」
「毒のつもりに、砂糖を呑むんですよ。そしてパッタリ死んだまねをする。厄を落して生まれかわるってわけですよ」
「勘の字っ！」
城之介が、思わず息を呑んだとき、兵馬が針の嘉助をつれて、急ぎ足で茶店へ入って来た。
「――千秋さん、妙なことを聞きこみました。お種と言う角惣の女房、飛んだ食わせものですよ…」
それからしばらくして、城之介は、左の茶屋に待たせてある者達の中から、妹娘のお幸を呼び出すと、頭から、ポンと奇妙なことをたずねた――
「――お幸、腹の子の父親は誰だい？　おッと、隠すよりは現われる。せつなげに肩で息をしてる様子じゃ、かれこれ四月ってとこかな……」
――翌朝……。
城之介は、裏木戸から、越後屋の別宅へ入って行った。
――常盤井が、庭に出ていると聞いたからだった。
一輪、二輪、ポッチリと小さな花をつけた梅の下に、常盤井のあでやかなおかいどり姿が立ってい

た。

「――お初どの、並びに新七毒殺の下手人を召し捕りました」

「やっぱり、相対死ではなかったのですね？」

「角惣のあと目を狙う悪だくみだったのです。妹のお幸には男がありました。川崎へついて行った若い者三次……。それも、初めは手ごめ同様に、お幸は操を破られたのです。下世話に、――かあさまが叱ると娘初手は言い……などと申します。十六娘のお幸は、男の力に逃げようもなかったことでしょう。まして、その母さまが、男をケシかけていたとすると、もう駄目です」

「可哀そうに……。十六や十七で……。でも、なぜ角惣の女房が三次とやらを……」

「お種は三次の実の母だったのです。十九の年に、家のために下田へ出て芸者になった……などと申していますが、実は、男をこしらえて、みごもって、下田へ隠れて生み落したのが三次なのです。お種は伊豆で男相手の商売を続けましたが、江戸へ戻り、取り澄まして角惣の後妻に入ると、三次を町内の頭好之助へあずけました」

「では、三次を角惣の養子に迎えるために？」

「姉娘は殺され、妹娘は手ごめにあいました」

「下手人は、お種ですね？」

城之介は、頭を横に振った。

「では、三次？」

「違います」

「まさか、お幸では……」

「お種、お幸、三次は、三人揃って、品川から駕籠でとどろき坂へ戻っています。お初どのと新七

は、別れを惜しんで御殿山へ行きました。そこへ、下手人が現われ、うまく持ちかけました。——厄落しに死んだまねをすると、あとに幸せが来る。いッそ、厄除け心中とは粋な趣向ではないか……と。若い二人は、下手人から渡された米まんじゅうの包み紙の毒薬を、砂糖と思って呑みました」

「そのため、二人は別々に……。お初は膝もくくらず狂い死にしたのですね。憎い下手人！　なにものです？」

「町内の頭好之助です」

「まア！」

「三次の目もとはお種に生きうつし、頬から顎は好之助にそっくりです」

「あー、では……」

「三次の父親ですよ、好之助は……」

常盤井が、ホッと溜め息をついた。

「でも……、お初がみだらな心中者でなくて幸せでした。大奥へ戻っても、申し開きが出来ます…」

城之介が、ソッと、ふところから常盤井の扇子をとり出した。

「——頂いておいて、よろしいでしょうか？」

そう言う城之介に、常盤井が目もとをあからめて、うなずき返した……。

逢引き蔵

一

「――どうだろう、この馬鹿な寒さは……」

朝十時ぎりぎりに定町廻りの同心部屋へ出仕した由良三九郎は、首をすくめ、肩を震わせて、火鉢にかじりつき、炭火をつつきまわした。

「――明日は彼岸の中日だってエのにさ……。せっかくふくらんだ桜の蕾も、ちぢこまってしまうだろう」

「ちぢこまってるなア、お前さんの股ぐらにぶら下がッてる袋じゃねエのかい」

同心部屋次席の高瀬儀右衛門が、からかうように三九郎の顔を見た。

この春の寒さは、その後、江戸の出来事を記録した〝武江年表〟にも記載されたほどで、春分だと言うのに、乞食の凍死が幾人か出たほどであった。

「いやいや御心配なく、あしこだけは、錦のふんどしに包んでありますからなア、悠々とぶら下がっております」

三九郎の言葉に、千秋城之介が、クスリッと笑った。

「おや！　気にいらねエぜ、城之介。なにがおかしいんだ？」
「いや、格別……。全く、けさの寒さには驚きましたなア……」
それから城之介は三九郎の耳へささやいた。
「お薬が、――けさだけは、あったかくなってから帰っておくれ。かぜを引かせたくないんだよウ……と言いましたよ」
「けッ！　聞かせるぜ……。あたしだってね、明け方に、手水に行くのがこわいから、いっしょに行っておくれ……と言いやがる。ついてッて驚いた。手水鉢の水が、カンカチンに凍ってやがる」
「ヘエー！　奥方が、そんなことを仰有る？」
「いやなことを言うなよ。うちのかみさんが、手水がこわいッて柄かよ。ウフッ……、明けて十九……。塩ッけの少ねエ、可愛い女さ」
三九郎は、まるで寒さなんか忘れたかのように、グーッと、鼻の下をのばした。
「と言うと、朝帰りですか？」
「ウフフ……、実はね、うちのかみさん、昨日、六阿弥陀詣でに行きやがった」
「それはそれは……」
城之介が、ニヤリと笑った。
六阿弥陀とは、一番が足立郡本木の長福寺。二番が同じく足立郡の下沼田応味寺。三番が豊島西ガ原の無量寺。四番田端の与楽寺。五番下谷広小路の常楽院。六番は亀戸の常光寺……。ここに安置されている阿弥陀如来を参詣して廻るのを六阿弥陀詣でと言うのだ。
いわゆる六道流転の苦難が救われると言うので、彼岸のうちに廻るものが多かった。
と同時に、この六阿弥陀を全部廻ると、七里ちょっとの道のりだ。女の足では、たいへんなことだ

が、そのかわり、戻って来る頃には、キュッと、内股の肉がしまる。江戸ッ子は、このことを股が練れる……と言ったが、——六阿弥陀その夜亭主は御満悦……と言うわけで、亭主共は大いに喜んだものである。

城之介が、ニヤリと笑ったのも、そんなわけだったのだが、三九郎は、ちょいと肩をすくめて、クスリッと笑った。

「かみさんは、帰れなくなったんだ」

「どうしたんです？」

「女房はね、五番の下谷常楽院を振り出しに、四、三、二、一番と廻って、六番の亀戸常光寺を打ち止めにする積りで出かけた」

「一段と、練れることでしょうなア」

「ところが、練れ過ぎた。五、四、三と廻って二番沼田の応昧寺へ行く頃には、股ずれはする、足にはマメが出来る……。幸か不幸か、沼田の在に、かみさんの叔母の家がある。そこへ泊まることにした……と、共について行った小者の六助がしらせて来た」

「幸か不幸かねエ……」

「かみさんにとっちゃ不幸だが、あたしにとっちゃ思いがけねエ幸さ。ソレッ……とばかりに、十九で、塩ッ気のねエ女ッ子のところへ素ッ飛んで行った。いいことは重なるもんだ。有難てエことに、昨夜は寒かった」

「一々、お言葉が変ってますなア」

「城之介……。野暮なことを言うなよ。——あッためてくんなと足でからみつき……てエわけ。へへへ……」

城之介が、スイッと立って、ニコニコ笑いながら二人の話を聞いている日下兵馬を振返った。
「――兵馬、いっしょに行かねエか？　由良の旦那が、聞かせ賃に、あったけエものを馳走したいとさ……」
しばらくして、三九郎、城之介、兵馬の三人は、両国回向院様の日野屋の二階で、名物の両国泡雪を肴に、チビチビと飲んでいた。――泡雪とは、あんかけ豆腐で、ちょいと乙なものであった。
「で……、奥方は、きょう残りの阿弥陀詣でをお続けになるわけですか？」
城之介が、同心部屋での話の続きを持ち出した。
「あたしゃけさ、六助を使いにやったよ。無理をするこたアねエ。六阿弥陀は、彼岸のうちに廻ればいいんだ。叔母さんとこで。二、三ン日休ませて貰っちゃどうだ……とね」
「フフフ……、その間、由良さんは、とって十九の新情婦ンとこで、ゆっくり脚腰をのばそうッてわけですか？」
「まアね……。たまにゃそんなこともなくっちゃなア。いつもは、ちょンの間で、せかせかと女を抱いて、なにくわぬ顔で屋敷へ戻る。味気なくってなア……」
すると、酌をしていた、ちょいと渋皮のむけた仲居が、キュッと、三九郎の膝をつねった。
「――悪い旦那……」
「そう言ってくれるな。もう十年近い古女房だぜ。たまにゃつまみ食いでもしなきゃ、やりきれねエ」
「お町の旦那が、それでいいんですか？」
「ふン……、同心だって男さ。いい女を見りゃア、抱きたくもならアね……」
そう言いながら、三九郎は抜けめなく、仲居の手を握った。

「だって、旦那……。奥さまをお貰いになるときは、おいやじゃなかったんでしょう」
「——目についた女房この頃鼻につき……ッてね」
「まア！　もう飲ましてあげません……」
仲居は、巧みに、三九郎の手を押しのけると、空になった徳利を持って座敷を出て行ったが、すぐ、慌ただしく階段を駈け上がると、三人の座敷へ飛び込んで来た。
「——旦那！　伊勢源さんのお楫さんが、蔵の中で死んでたそうですよッ」
「伊勢源?!」
城之介が、キッとした調子でたずね返した。
「ええ、横網町の質屋さんですよ。伊勢屋源兵衛と言うのが先代なんですけど、いまでも伊勢源で通ってるんです」
「で、お楫と言うのは?」
「三人姉妹の一番上なんです」
すると、忽ち三九郎が乗り出した。
「三人姉妹ッて……」
「源兵衛さんが亡くなって、お楫、お杉、お梅ッて、女ばかり三人の姉妹が残ったんです」
「で……、年は?」
「ずいぶん開いてるんですよ。お楫さんは、もう三十六、七でしょう……。お杉さんが二十四、五、お梅さんが、確か十八……とか聞きました」
三九郎が、ソソクサと立ち上がった——
「——城之介……、ちょいと、行ってみようじゃねエか」

「でも……、病死かもしれませんよ」
「いやいや……」
三九郎は、尤もらしく首を傾げた——
「——蔵の中で死んでいた……。或は頓死かもしれぬが、一応検死をしなきゃなるめエよ……」

二

伊勢源の土蔵は、三ツ並んでいた。
デンと、三戸前の土蔵を並べている伊勢源は、質屋としても大きい方だった。その右端の土蔵の二階で、三十女のお槇は冷たくなっていたのだ。
土蔵の二階とは言え、銭のかかった備後表の畳を敷きつめ、四尺幅の箪笥を二ツ並べ、長火鉢だの、鏡台だの、衣桁だの行燈だの、を置き、小さな窓の下には、帳場机が据えてあった。
「——夏涼しくて、冬はあったかい……と言って、お槇さんは、ここ三年余り、ずッと、ここに住んでおいでした……」
五十をとっくに越えたと思われる番頭の和兵衛が、そう説明した。
「一体、ここの主人は誰なんだい?」
三九郎が、和兵衛にたずねた。
「さア……、誰と申せばよろしいんでしょうか……」
「冗談じゃねエぜ。これだけの大店で、主人がいねエなんて話はねエだろう」
「それが、七年ばかり前に、お槇さんのご亭主がなくなりました」

「その頃、源兵衛は生きてたのかい？」
「はい……。旦那は、お槇さんにあとをつがせる積りで、同業のものから、婿をおとりになったんですが、そのお婿さんの方が、旦那より先に亡くなりましたんで……」
「それ以来お槇は？」
「ずッと、おひとり身でした。亭主なんかいらない……と仰有いましてね」
「お杉は？」
「そのう……」
和兵衛は、ちょっと口籠った。
「申し上げねばなりませんでしょうか？　頓死と決まれば、このまま、ソッとしておきたいと思いますが……」
そう言われて、三九郎は、チラッと、城之介と兵馬の方へ顔を向けた。
城之介は、帳場机と長火鉢の間に横倒しになっている女の死骸の上にまたがり、手ぎわよく帯を解き、紐をとり、お槇を裸にしていたのだ。
兵馬が、それを手伝っていた。
「――土蔵の扉は、内側から掛け金がかかっていましたし、その扉にも、二階の小窓にも金網がはってあります。あたし達は、幾ら呼んでも返事がないので、これはおかしいと、扉の金網を少し破り、掛け金をはずして中へ入ったんです」
「つまり、他から何者かが忍びこみ、お槇を殺す……なんてことは出来ねエ……、と言いてエのかい？」
「ヘエ……、そう考えてはいけませんでしょうか？　もし頓死なら、御主家の恥になるようなこと

は、余り申したくないのですけど……」

いかにも質屋の番頭らしく、実直そうな和兵衛は、そう言って揉み手をした。

「――いけないな……。何もかも、洗いざらい、出かして貰いてエな」

女の死骸を裸にした城之介が、死骸にまたがったまま、女のみぞおちの辺りを指さしながら、和兵衛を振返った。

「と、仰有いますと、何か御不審でも……」

「あるね……。由良さん、ここの黒ずんでるのが、ちょいと気に入りませんなア」

その言葉に、三九郎は、城之介が指さしているところを見た。

――女の下ッ腹……。丁度、水月に当るところに、一両小判くらいのドス黒いアザが出来ていたのだ。

「こいつア、生まれつきのアザではなさそうですよ……。どうだな、和兵衛」

「あのう……、わたくしはかれこれ三十年余り、こちらへ御奉公しておりますが、お嬢さん方のお肌を見たことはございませんので……」

和兵衛が困ったように、小鬢の辺りを掻きながら、そんな答え方をした。

「当て身を一発食わせる……。気を失ったところを、ゆっくり料理する……、なんてことも考えられる」

「どれどれ……」

三九郎が、和兵衛を押し除けるようにして城之介へ近づくと、ちょいとかがんで、女の下ッ腹へ目をやった。

「――はてね……」

三九郎が、城之介を見上げると、城之介がかすかに、首を横に振った。
「手ごめに合った様子はありませんよ」
「うン……」
三九郎は、腰をのばした。
「で……、どう思う？」
「当て身だけじゃ、息を吹き返すかもしれない……。そこで、首を絞めるッてエのが普通ですが…」
「そんな様子もねエなア」
「しかし、鼻と口を押さえていれば、死んじまうでしょう。そうすれば、跡は残りませんよ」
「そう言うわけだ……」
三九郎は、和兵衛を振返った。
「矢ッ張り、知ってるこたア喋った方がいいようだぜ。お杉は、どうなんだ？」
「でも……」
和兵衛は、まだ大事をとって、答えをしぶった。
「扉は内側から掛け金がかかっていたのでございますよ。あたくしが、手代や女中に手伝わせて金網を破ったのです。間違いはございません。——当て身を食わせた上で殺したのかもしれぬ……と仰有いますが、では下手人は、どこから入ったのでしょう？」
「あたし達が、それをはっきりした上でなきア喋れねエ、と言うのかい？」
「そうさせて頂ければ……」
「馬鹿野郎ッ！」
三九郎が、大声で嚙みついた。

「こうゆう出来事はだな、下手人がどこから入って、どこから逃げてッたか、それがわかれば下手人がとッ捕まるんだ。その時にゃもう、お前エの話なんざア聞かなくってもいい……」

それから三九郎は、グイッと、胸をそらせた。

「――お梅の死にざまには御不審がかかっている……。知ってることを申し上げる気か、申し上げねエ気か？　はっきりしろッ」

「申し上げます……」

和兵衛は、おどおどと三九郎を見上げた。

「お杉さんは、駈け落ちをしておいでした」

「つまり、男をこしらえて、家を飛び出していたッてわけかい？」

「はい……。それで、御主人は、一応、お杉さんを、勘当と言うことに……」

「それが、いまは戻って来ている。情夫とは別れたのかい？」

「いいえ……。御主人が、いよいよいけなくなりましたときに、親類のもの達が相談しまして、お杉さんと卯之助さんを呼びましたので……。それ以来、ずッと、お杉さんと卯之助さんはここにいますが、親類達は卯之助さんを、正式に婿と認めたわけではございませんので……」

「そいつア妙だぜ。源兵衛の死にめに、お杉と卯之助とやらを会わせた。と言うなア、夫婦になることを許したわけじゃねエか」

「それが……、卯之助さんは、両国でごろついていた遊び人なものですから……。いえ、いまでは、すッ堅気になって、お店を手伝ってますが、親類一同はまだ信用いたしませんので……」

「そうなると、あとはお梅だけか……」

和兵衛は、溜め息をついた。

「もっと早く、お梅さんに婿をとっておけばよかったんですが……。やっと十八……。まだねンねだものですから……」
「なる程……」
三九郎は、城之介と顔を見合わせた。
——三人姉妹……。お槇は後家で、お杉は親類から信用されず、お梅はねンね……。和兵衛の言うように、誰があとつぎ、誰が当主と、はっきりしてはいなかったわけだ。
城之介がたずねた——
「商売の取り仕切りは誰がしていた?」
「あたくしです……。そして、帳面とお金は、一応一番上のお槇さんに見せた上、あたくしが預っておりました」
「だから、ここに、帳場机があるのかい?」
「いいえ……。実は、お槇さんは、御自分でも商売をなすっていらしたので……」
「商売?」
「はい……、金貸しを……」
「ヘエー!」
城之介は、また三九郎や兵馬と顔を見合わせた。
「もう、三年になりますんで……。お杉さんと卯之助さんがいっしょに暮らすようになると、——後家のあたしが、となりにいちゃア気づまりだろう……ッて、さッさと、この土蔵の二階へお移りになりました。それといっしょに、——あたしは一生ひとり身だ。お金をためなきゃ、行く末が心配だから……ッて、金貸しをお始めになりましたんで……」

――こいつア厄介だ……。

そんな考えが、三九郎、城之介、兵馬の胸に、同時に浮かんだ。

家の中の事情が、かなりこんがらがっている。その上、お槇が高利貸しをしていたとなると、恨んでいたものもあったであろう……。

「――とにかく、お杉に会おうじゃねエか」

三九郎がそう言うと、和兵衛が、困ったように、頬っぺたを押さえた。

「――それが……、お杉さんは、けさ暗いうちから、六阿弥陀詣りにお出かけなんで……。お梅さんなら、母屋におります」

三

三九郎がお梅を調べに行っている間に、城之介と兵馬は、土蔵の内外を調べた。

和兵衛が言うように、階下の出入り口の外には、二階に小窓が一ツあるきりだった。しかも、小窓にも扉にも、金網がはってある。

「――掛け金がかかっていたとすると、入ることも、出ることも出来ませんねエ」

そう言う兵馬に答えようとせず、城之介は、扉の掛け金を調べた。――かなり大きく、頑丈な金具が扉についていて、その受け金が、柱にとりつけてある。

細い紐か糸で、掛け金の金具を操り、受け金へ落とすことは出来ないだろうか……。城之介は、いろいろ工夫してみたが、うまい場所に金具が取りつけてあり、うまくゆかなかった。

「――わからねエ……」

城之介は、よごれた指を、ふところの手拭いで拭いた。掛け金や受け金をいじっているうちに、指先が濡れ、金具のサビや、鋸屑が指にこびりついたのだ。

「――こん度は、わたしがやってみましょう……」

兵馬がかわって、金具をいじり始めたので、城之介は、再び二階へ上がり、箪笥のひきだしを、一ツ一ツ調べた。

中に一ツだけ、鍵のかかっている小ひきだしがあった。

が……、錠前を破るのは、わけのないことだ。城之介は、長火鉢の火箸を一本とると、ほんの二、三呼吸で、鍵をはずしてしまった。

「――なんでエこれは……」

城之介が、思わず苦が笑いをした。――さも大切そうに錠をおろしたひきだしの中には、妖しげな絵草紙が、ギッシリ、詰まっていたのだ。

――あってさえ、いわんや後家においておや……。城之介には、三十後家のお槇の悩ましさがわかるような気がした。

が……、壁が厚く、窓の小さい土蔵の中で、じーッと枕草紙を見詰めている三十女の姿を考えると、ちょっと凄まじかった。

――三十後家、男枕をソッと抱き……。お槇も、ひと知れず、乳房の下をキュッと、しごきで締めねばならなかったかもしれぬ……。そう考えると、いささか哀れでもあった。

「――旦那……」

出し抜けに、階段の上り口から、勘弁の勘八が、首を突き出した。

「来たのかい？」

「とッくに来てましたよ。一丁四方、駈けずり廻って来たんです」
「で……、なにか拾えたかい？」
「その仏さんは……」
勘八は、横たわっているお槇の死骸を顎でしゃくった。——死骸は、一度素ッ裸にされたが、いまは脱がした着物が、フワリと、頭からかぶせてあった。
「——情事好みで、因業だったって、ひどく評判が悪いですぜ」
「仏の悪口を言うなア感心しないなア」
「でもねエ……。娘ッ子のときから、ひッかえ取ッかえ、情夫を持ったってことですよ」
「それは、妹のお杉のことじゃないのか？」
「二人共ですよ。伊勢源のお色気二人娘ッてね、ひと昔前には、大した評判だったそうですよ」
「姉妹揃ってかい！　じゃ、まともなのは、一番下のお梅だけか」
「そのお梅ですがね……」
勘八が、ノコノコと上がって来た。
「お梅が生まれたときにゃ、死んだ源兵衛が五十過ぎ、お袋は四十七、八……」
「えらく、遅い子だなア」
「だから、本当はお槇の子だッて言うものがありますよ」
「なる程……。娘の嫁入り婿取りの邪魔になる……。それで、親が自分の子てエことにして人別帳へのせる……。よくあることだ」
「それからね……」
勘八は、グルリと、土蔵の中を眺めまわした。

り込むためだった……と言うんですよ」

「はっきりした証拠があるのかい？」

「この先に、伊助ッて仕立職人がいます。それから、回向院前に、紅菱ッて小間物屋があります。その八百助ッて息子。もうひとり、この裏に伊勢源の長屋があるんですがね、そこに住んでる浪切十三郎と言う若い浪人者……、この三人が、当今のお槇の相手で、夜中にコッソリ、この土蔵へ忍んで来るのを見たものがあるそうですよ」

城之介が、フーッと、大きな息を吐いた。

「あたしゃ、飛んだカン違いをしてたようだ。お槇は、ソッと男枕を抱くどころか、この土蔵を逢引き宿のかわりにしてやがったらしいなア……」

四

その日の夕方、由良三九郎は、六阿弥陀詣でから帰って来たお杉と卯之助を、横網町の自身番へ引っぱった。

「――お前エ、やくざだってな……」

三九郎は、頭ごなしに、卯之助にたずねた。――めくら縞の着物を窮屈そうに着て、お店ものらしくしようと努めているが、やくざあがりのいなせさは隠せなかった。

それに、卯之助は苦が味走ったいい男だった。

その卯之助に寄り添っているお杉は、死んだお槇とは似ていなかった。――お槇は、どちらかと言

えば太り気味で、顔も下ッぶくれの方だが、お杉はスッキリとした痩せ型で、とんがったおとがいの辺りに、男好きのする凄まじい色気を漂わせていた。

三九郎は、いい男を見るとむかッ腹が立った。殊に、いい女を女房や情婦にしているいい男は虫が好かなかった。

「へエ……、お恥しいことで……」

卯之助は二、三度続けさまに頭を下げた。

「若か気のいたりで、つい無職渡世に足を踏ンごんでしまいましたが、これに意見をされて――」

卯之助は、チラリとお杉の方を見てから言葉を続けた――

「スッパリ、やくざの足を洗いましたので……」

「本当かい？」

「え？！」

「ネコをかぶって、しばらく我慢すりゃア、伊勢源の旦那になれる……。そう考えてたんじゃねエのかい？」

「飛んでもない！　あたし達ア、夫婦と言っても、仲人を立て、盃ごとをしたってわけじゃありません。いわばドレ合い……。親類がたが、許して下さる筈はありません」

「じゃ……、伊勢源の身代は、どうなると考えてたんだ」

「ま……、お梅ちゃんが婿をとって跡をつぐ……、それが一番だと考えていました」

「それでいいのかい？」

三九郎が、お杉にたずねた。

「悪くてもしかたがありませんよ。一文も配けて貰えなくても、身から出た錆ですものねエ」

「ふン……、お前エ達、ちょいと表へ出ていな……」
三九郎は、小者の六助を見張りにして、卯之助とお杉と自身番の外へ出すと、城之介と兵馬を見た。
「どう思う?」
「——筋の通った言葉……と、褒めてやりたいようなもンですな」
「筋が通り過ぎてやしねエか? あれが本心とすると、やけにサバサバし過ぎてるような気がするぜ」
「由良さんは、卯之助、お杉夫婦が、お槇を消した……と考えてるんですか?」
「邪魔な姉を消せば、あとは小娘のお梅ひとりだ。伊勢源の身代は自由になる……と考えるとは思わないかい?」
「筋の通ったお言葉ですなア」
「城之介……」
三九郎が、いやアな顔をした。
「本当は、筋が通り過ぎてる……と言いてエんだろう。いまお杉、卯之助に使ったばかりの言葉だ。からかってるのかい?」
「あたしは、お槇の行状が気にいらないんですよ」
「その方の詮議はお前エさんにまかせるよ。あたしゃ、もうちッと、お杉、卯之助に食い下ってみてエ……」
それから、三九郎は、お杉だけを呼び入れた。
「きょうは、六阿弥陀詣りに行ったんだってな?」
「はい……、暗いうちから、出かけました」

「一番に行ったのは、どこの寺だい？」
「下谷の常楽院です」
「どうだった人出は？」
「彼岸のことですから、大変なものでしたよ」
「六阿弥陀詣では、度々やったことがあるのかい？」
「いいえ、こん度が初めてです」
「じゃ……、常楽院の出入りには、さぞかし気がもめただろう」
「え？」
いぶかしげに顔をあげたお杉に、三九郎がクスリッと笑った。
「――五番目の阿弥陀は二百の中に住み……。この川柳がわかるかい？」
「さア……。なんでしょう？」
三九郎は、城之介を振返ると、さっきと同じ言葉を繰り返した。
「城之介……。どう思う？」
「由良さんが仰有るとおり、ちょいと気にいりませんな……。お杉……」
三九郎に代って、城之介がお杉に声をかけた。
「六阿弥陀で言えば五番目の札所の常楽院……。あの付近を、俗に仏店と言う。知ってるかい？」
「はい……。お寺さんが多うございますからねエ」
「違ってらア……。常楽院のまわりにゃ、寺はねエよ」
冷ややかな城之介の言葉に、お杉が、サッと顔色を変えた。
「あの近くにゃ、仏具屋が七、八軒ある。だから仏店さ……」

「あー！　そ、そうでした……。常楽院の入口のすぐ近くにも――」
「また違ったぜ。常楽院の門前は、右も左もケコロ茶屋だ」
「えッ?!」
「切り遊び二百文の女――つまりケコロが六、七十人巣食っている。こちらの旦那が仰有ったな――五番目の阿弥陀は二百の中に住み……、てなアこのことだ。普段でも、夜昼の見さかいなく男を引ッぱる。六阿弥陀ともなれば掻き入れだ。女達が一段と腕にヨリをかけて引ッぱることだろう。だから、こちらの旦那が、――さぞ気がもめたことだろう……と仰有った」
「あのウ……、ああいうひと達は、女連れの男には手を出しませんよ」
お杉の言葉に、城之介と三九郎は、顔を見合わせて、ニヤリと笑った。――気になる笑い方だ。お杉は、ゴクリと生唾を飲みこんだ……。
三九郎は、お杉を土間の隅へさがらせて、卯之助を呼び入れた。
「阿弥陀廻りは、五番の常楽院から始めたんだそうだな?」
「ヘエ……。それから四番の与楽寺、三番の無量寺と逆廻りで、足立の長福寺から、沼田の応昧寺と――」
「待った。駕籠で行ったのかい?」
「いいえ……、歩きました」
「フフフ……、そうだろうとも！　歩かなきゃ、お杉の内股が練れねエからなア」
「い、い、いいえ……」
卯之助は、赤くなって、首筋を撫でた。
「寺詣でに、乗り物で行ったんじゃ御利益がさずからないと思いましたから……」

「なる程……。で、足立の長福寺から、沼田の応昧寺へも歩いたのかい？」
「はい……。ずーッと、歩きました」
「そんなこたアねエだろう。なんかに乗ったろう。女連れだ。乗ったに違げエねエ」
「いいえ、乗りません。歩きました」
「卯之助……」
そう静かに話しかけた三九郎が、突然、激しい声で噛みついた——
「馬鹿野郎ッ！　荒川を歩いて渡ったって言うのかッ?!　長福寺を出ると荒川は沼田の渡しだ。渡った向う岸が応昧寺じゃねエかッ」

五

「——それで、どうなった……」
定町廻り同心筆頭の早水茂太夫がたずねた。
八丁堀の役宅への帰りに、三九郎と城之介が、茂太夫の屋敷を訪ねて、伊勢源のお槇が変死を遂げたことを話したのだった。
「それが、大笑いなんで……」
三九郎が頭を掻いた。
「結局、お杉と卯之助は泥を吐きましたがね……」
「六阿弥陀廻りはしていなかったのかい？」
「阿弥陀廻りどころか、お杉が観音さまを御開帳して、卯之助がそいつのお供養を一日中していたッ

てわけなんで……」
「わからねエな」
「朝ッぱらからね、伝馬町裏の大丸新道に巣食ってる、卯之助のもとの仲間ンところへ行ったんですよ。その仲間ッてエのが卯之助の弟分だった野郎で……。金ツンボのお袋と住んでやがる。それを追い出して、二階へ上がって、夕方までいちゃついてたッてお粗末なんです」
「お杉と卯之助は、ともかくも夫婦で、一ツ屋根の下に住んでるんだろう」
「そうですがね、次の部屋にゃお梅が寝るんです。思いきり楽しめねエ……と言うんですよ」
「それで、六阿弥陀廻りにかこつけて、二人で家を出たってわけか？」
「金ツンボの婆アが呆れてましたよ。——あたしだって、男を持って、出来そこないの息子を生んだ女だ、家の揺れ方で、卯之さんとお杉さんが、いまどんなことをしてるッてことがわかる。御殿女中のお宿下りじゃあるまいし、家の揺れ方が激し過ぎる……ッて」
「大きな話だ」
茂太夫が、苦が笑いをした。
「それで、二人はどうした？」
「返しましたよ。お槇を殺したッて証拠もありませんし、大丸新道にいたッてことがはっきりしてるんですから……」
「一体、お槇は殺されたのかい？」
その言葉に、三九郎は城之介の方を見た。
「——あたしは、病気で頓死した……とは考えられないんです」
城之介が答えると、三九郎が言葉を続けた——

「死骸の下ッ腹のアザは、あたしもただごとではないと考えます」
「しかし……、土蔵の扉は、中から掛け金がかかっていたと言うんだろ」
「そうなんです。小窓には、金網がはってありました」
茂太夫は、腕組みをしてジッと考えた。
九時(いっぱん)を過ぎると、その夜も、シンシンと冷えこんで来た。
「――こん夜も、手水鉢の水が凍るかもしれねエなア……」
三九郎が、ふッとひとりごとのように言ったので、城之介がニヤリと笑った。
――十九で塩気の少ない新情婦のことを、三九郎は思い出している……。しかし今夜は、六阿弥陀詣でを済ませて、三九郎の古女房が戻って来ているかもしれないのだ……。
「――第一に……」
茂太夫が口を開いた。
「お槇が殺しか頓死か、そいつを確かめなきゃアいけないな」
城之介が、こっくりうなずき返した。
「第二に、お杉と卯之助が、本当に弟分の家にいたかどうか……。金ツンボの婆アさんひとりなら、なんとかお杉が騙(だま)くらかしてる間に、卯之助が裏口か、二階の窓から、脱け出すことが出来たかもしれないからな……。これは三九郎に確かめて貰おう」
「城之介は、お槇がこのところ相手にしていた男三人を、洗うと言ってますが……」
「仕立職に、小間物屋に、浪人ものだったな」
そう言う茂太夫に、城之介が答えた――
「伊助に、八百助に、浪切十三郎です」

「その三人は、城之介にまかせよう……」
ところがその夜、またまた伊勢源の家で、飛んでもない騒ぎが持ち上がった。
「――旦那ッ！　横網町の自身番から使いが来ましたよ」
城之介は、寝入りばなを、勘弁の勘八に叩き起こされた。
「お梅が、危く殺されかかったそうですよッ」
「――お梅が?!」
「身内だけが集まって、お椀の通夜をしてたんだそうです。真夜中過ぎに、お梅が土蔵を出て、母屋の方へ戻ろうとすると、出し抜けに、うしろから飛びかかって、お梅の頸をしめたやつがあった……てんです」
「よく助かったなア！」
「何に驚いたのか、男が、ダッとお梅を突き飛ばして、土蔵と土蔵の間へ逃げ込んじゃった……、使いのものはそう言ってますよ」
「とにかく行ってみよう」
城之介が手早く着替えを済ませると、枕もとに置いてあった十手を帯にさし、手拭いをふところへ入れようとした。
「――おッと……、この手拭いはよごれてるんだ。別のを出してくれ……」
城之介はそう言って、折りたたんだ手拭いを、ちょいと拡げてみた。
黒いシミがついていた。――土蔵の掛け金を調べたとき、どうしたわけか指先が濡れたのを拭いたからだった。
が……、ふッと、城之介が眉を寄せた。――思いがけないものが、手拭いの間に挟まっていたの

だ。——引き割り麦がひと粒……

何を思ったか城之介は、勘八に声をかけた。

「——勘の字、手拭いはいいぜ……。伊勢源へ急ごう……」

その伊勢源には、すでに三九郎が乗りこんで、卯之助をうしろ手に縛りあげ、納戸にひき据えて、取調べをしていた。

「——太てエ野郎だッ……」

城之介の顔を見ると、三九郎が、憎々しげに卯之助を睨みつけた。

「やっぱりこの野郎に違げエねエ。姉のお楫を殺し、こん度はお梅を狙った。これでお梅が死ねば、いやでも伊勢源の身代はお杉がつぐことになる」

「幾らか、白状しましたか？」

「吐かねエ……。自身番では、——お梅が婿をとれば一番いい……なんて、ベラベラ喋りやがった癖に、こん度は、知らぬ存ぜぬの一点張りだ」

それから三九郎は、口をへの字にして、鼻で笑った。

「が……、見てな。きっとカエロの腹洗いみたいに、泥をすっかり吐かせてやるから……」

城之介が納戸を出ると、慌てて逃げようとした女があった。——お杉だった……。

「待ちな……」

城之介は、素早く、お杉の前へ立ちふさがった。

「なんか言うことがあるんだろう？」

「下手人は、卯之さんではありません！」

「卯之は、大丸新道の舎弟分の家を抜け出したかい？」

「飛んでもない！　ひと足だって、あの家を出やアしませんよ」
「女房の言うこたア信用できねエなア」
「亭主をかばってると仰有るんですか？　でも本当なんです。あたし達だって、お寺参りにかこつけて、よその二階へなんかコソコソと行きたくはありませんよ。でも……」
お杉が、ポッと頬を紅らめた。
「でも……、どうなんだい？」
「旦那……。死んだひとのことを悪く言いたくはありませんけどね、姉さんは、あたしが気のつかない卯之さんのちょいとした癖まで、ちゃーんと知ってて、チクリチクリと、わたしにいや味を言いましたよ……。わかって頂けるでしょうか？」
城之介は、お杉を見詰めた。——やくざを情夫に持って家出をするほどのお杉だ。ちょいと蓮ッぱなところのある女だが、いまはやけにしおらしく、まるで嫁入り早々の若女房のような恥らいが、うなだれた首筋にあふれていた。
「つまり、お槇は、お前エ達二人の様子をのぞいていた……と言うのかい？」
「それに、となりで寝ているお梅は年頃ですしねエ……。あたし達、きょうは久し振りに、二人ッ切りでノウノウと出来たんです。卯之さんもあたしも、決して外へは出ませんでしたよ」
城之介は、お杉の言葉は信用してもいいと思った。——お槇は三十後家だ。自分は土蔵と言う都合のいい場所で、三人の情夫をとっかえ、引ッかえ引きずり込んで楽しんだり、ひきだし一ぱいの怪しげな絵草紙を眺めたり、勝手なことをしておりながら、一方では、まるで姑婆アのように、お杉、卯之助の寝間を気にしていたのだ。
「——ちょいと、台所を見せてくれ」

思いがけない城之介の言葉に、お杉はキョトンとした顔をした。

「――あ……、これは、旦那……」

お杉に案内されて、城之介が台所へ入って行くと、流しに立って茶づけを掻きこんでいた番頭の和兵衛が、慌てて頭を下げた。

「なんだかだと走り廻ってて、つい、晩飯を食いそびれたものですから……」

「大変だったなア。お梅はどうしている？」

「いま、自分の部屋で、横になっておいでです」

「なんだって夜の夜中に、お槇が死んだ土蔵へなんか行ったのだろう！」

「それが……」

和兵衛は、困ったように、お杉の顔を見た。

「かたみ分けの下見に行ったんですよ」

お杉が、噛んで吐き出すように言った。

「下見？」

「こん夜集まったのは、身内のものばかりなんです。その中の女衆が、どうせかたみを貰うのだから、好きなものを見ておこうッて、姉さんの着物や持ち物を見に行ったんです。だけどお梅は、そんなことをするのがあさましくなって、土蔵を出たと言っています」

「そこを、うしろから絞められたのか……」

それから城之介は、ゆっくりたずねた――

「――お梅は……、お槇の子だってなア……」

お杉は、和兵衛と顔を見合わせたが、二人は、殆んど同時に、うなずき返した……。

六

城之介が、勘弁の勘八を連れて、伊勢源のま裏に当る長屋へ入って行ったのは、十一時をとっくに過ぎてからであった。

「――旦那……、一体、どう言うお考えなんです？」

勘八が、どうにも解せない……と言った面持ちでたずねた。

ピーンと、冴え返った寒さの上、大川から吹き上げる風が、針のように、着物を通して肌へ突き刺さった。

「――勘弁ならねエ……と言いたそうだな」

「言いませんよ。あたしゃ旦那に飼われてるんですからね、どこへでもくッついて行きますよ。だけど――」

「仕立職の伊助の家から、回向院前の小間物屋紅菱を廻った。しかも、伊助や紅菱の息子八百助をそれほど調べもせず、台所だけを見ては外へ出た……。どう言うわけだ？　そう言うのかい？」

「そこまでわかってるなら、わけを話して下さいよ」

「あたしゃ、伊勢源の台所も見ている。こん度は、浪人浪切十三郎の台所を見る積りさ」

「台所にもなにも、この九尺二間の長屋ですぜ。入った土間がお玄関であり、お台所でさ……」

勘八の言うとおり、中へ入ると、土間の片隅に、水ガメやかまどが並び、その傍らに、土ガマや手桶が雑然と置いてあった。――浪切十三郎はひとりものなのだ。

「――この夜ふけに、なんの御用だ？」

寝ていた十三郎が、体を半分起こしただけでたずねた。
「――伊勢源のお槇を知っておいでだろうな？」
「知っているとも……」
十三郎は、唇を歪めて、薄ら笑いを浮かべた。――二十七、八……、芝居に出て来る斧定九郎のような感じの男だ。
「格別御昵懇であったと言う噂があるが……」
「拙者だけではないよ」
「仕立職人の伊助、紅菱の八百助のことかな？」
十三郎が、また唇を歪めた。
「ときどき、伊勢源の土蔵へおでかけでしたかな？」
「行った。が……、カン違いしては困るな。拙者はお槇の金を借りていた。借りたり返したり、その度に出かけた。伊助や八百助のように、あの女の体がめあてで出かけたのではない」
「しかし……、お槇の体を知らぬわけではない？」
「知っている。据え膳を食っただけだ。拙者も若い男だからな。だが、このところ、ずッと思っている。いくらお槇からせがまれても、そうそう体が続かぬ」
「御病気か？」
「脚気だよ。主家をしくじって浪人した。しかたがないから江戸へ出た。これが悪かったのだな。生まれ故郷の水と米から離れると、よく脚気になるそうだ」
城之介は、かまどへ近づくと、傍らの土ガマの蓋をとってみた。――明日の朝の仕度だろう。洗った米に水がはってあった。その水が、ピーンと凍っていた。

「――自身番まで来て頂こうか」
「なにッ?! 浪人しても、武士だぞッ」
「武士でも、人殺しの下手人はお縄にする」
「馬鹿者ッ!」
十三郎が、布団の上へ飛び起きた。
「お槇から、いま借りているのはたった一両二分だッ。こんな借金で人を殺すかッ。また、お槇の体なんか、なんとも思っちゃいないッ、自分の病気をなおす方が先だッ。なぜ、お槇を殺さねばならぬッ」
「それについて、ゆっくり自身番で話し合おうぜ」
「いやだッ!」
城之介が、珍しく、厳しい声で叫んだ。
「――浪切十三郎ッ、神妙にしろッ!」
次ぎの日の朝、同心部屋で、城之介が筆頭の早水茂太夫の前に坐った。
「――浪人が自白したそうだな」
「お槇が十三郎に惚れたんですな。それと同時に、貸金をやかましく催促し始めた。十三郎は、腹が立ってやってしまった……と言っております。また、お梅を襲ったのは、疑いを卯之助に向けるためで、お梅を殺す気はなかった。……と自白しました」
「ところで……、どうして十三郎とわかった」
城之介は、ふところから手拭いをとり出すと、はりついているひと粒の麦を示した。
「十三郎は、土蔵へ忍び込み、お槇を当て身で倒してから鼻と口を押さえたんです。それから、用意

して来た氷を、掛け金と扉の間に押し込んで、表へ出ました」
「なる程……。氷がとければ、掛け金は倒れて、自然と受け金へ落ちるわけか。しかし、そのカラクリがわかったわけは？」
「十三郎は、飯をしかけた土ガマにはった氷を持って来たのですよ。ところで、脚気には麦がいいそうですな……」
そう言って、城之介がちょいと笑った——。
「仕立屋、小間物屋、それから伊勢源。この台所に麦はありません。あったのは、十三郎の家だけでしたよ……」

女砂絵師

一

「一同、こちらへ集まってくれ……」
同心部屋筆頭の早水茂太夫は、部屋に戻って来ると、集まっている五人の定町廻り同心を自分の前へ呼んだ。
「いまお奉行から言われたのだが、このところ、続けさまに、町家の娘がかどわかされているそうだ」
「初耳ですなア……」
次席の高瀬儀右衛門が、一同を代表するように答えた。
「いや、実は拙者も初耳だよ。更に、お奉行も、本日御城内で御老中よりお話があるまでご存知なかったようだ」
「ははア……、では、目安箱ですな？」
由良三九郎が、そうたずねた。
「きょうは二日、箱開きの日ですな」

「うム。目安箱には十一通の訴えが入っていたが、おとりあげになったのは、ただ一通だったそうだ」

「それが、娘のかどわかしですか？」

そう言う三九郎に、茂太夫がうなずき返した。

「――で……、訴願人は、なに者でしょう？」

こんどは、千秋城之介がたずねた。

「わからぬ。姓名が書いてなかったそうだ」

「それは、おかしいではありませんか」

「うム……、おかしい。だが、娘が三人もかどわかされており、その親元の姓名がはっきり書いてあったので、異例のお取り上げとなったのだ」

目安箱は、いわゆる箱訴である。大名小路の評定所前に箱がつるしてあり、御政道向きに不平のある庶民が、この箱へ訴状を投げ込むようになっていた。

この箱には厳重に鍵がかけてあって、毎月二日、十一日、二十一日の朝、城中へはこんで、将軍自身が箱を開いて訴状へ目を通すことになっていた。

ただし、わたくし事の怨恨によるものはお取り上げにならない。また、訴願人の住所や名前が書いてないものもお取り上げにならないことになっていた。

従って、役人の不正や、庶民全部の利益に関する訴状が多く、いわば、強い役人に対する弱い庶民の憤りのはけ口ともなっていたわけで、月に三度の箱開きは、老中始め、ちょいと気になる日であった。

事実、一枚の箱訴状がもとで、伏見奉行小堀遠江守の家が断絶した……と言う実例さえあるのだ。

この訴状は、遠江守の収賄を暴露したものであった。

ところで、きょうお取り上げになったのは、役人の不正でも、公の利益に関することでもない…。単なる、町娘のかどわかしであった。

しかも、訴願人の名前が書いてないと言う。こんな訴状が将軍家の目にとまると言うのは、確かに異例のことであった。

「――神田富松町油屋甲州屋娘よね……、十七歳。神田通塩町易者開運堂娘かえで……、十八歳。柳原同朋町芸者置き屋〝この花〟養女やす……、十七歳。この三人が、先月半ば以来、こん日までにかどわかされている……と、訴状には書いてあるそうだ」

「全て、内神田の女達ですな」

三九郎がそう言うと、茂太夫がうなずき返した。

「――三人の女の身もとがはっきりしていることだし、この後もかどわかしが続くかもしれぬ。庶民の不安を取り除くために……とのおぼしめしで、お取り上げになったのだが、訴状の終りに、――曲者は小梅の里親、九人の中にあり……と、書いてあったと言うことだ」

「小梅の里親？」

城之介が首を傾げた。

すると三九郎、わかっている……と言うように、城之介を見た。

「吉原のおいらんや、町芸者だって、孕むことがあるだろう」

「そりゃア、同じ女ですから、孕みもするでしょうな」

「または、尻軽な娘ッ子や、うまい盛りの体をもて余ましている後家が孕むこともあらアね。しようがねエから、生まれた子供を里子に出す。小梅や寺島新田あたりの百姓にあずけるのが多いそうだ。

なんだか、このかどわかしは、わかるような気がするじゃないか」
「そうでしょうか？」
「いつもの城之介らしくねエぜ……」
三九郎は、茂太夫へ顔を向けた。
「かどわかされた娘三人は、十年余り前に、小梅の方へ里子へ出されていた……」
「へエー、どうしてわかる？」
「いや、そう考えて見たわけですよ。そろそろ年頃になって来たので、実父、または実母が、惜しくなって、無理矢理取り戻した……とすると、里親の方じゃ納まらないでしょう」
「なる程……。手のかかる時だけ押しつけておきやがって……と言うわけかい」
「それもあるでしょう。また、赤ン坊のときから育てりゃ、情も移り、別れたくないんじゃないでしょうか」
高瀬儀右衛門が口を挟んだ——
「里親九人……てエのは？」
「いまんところ、娘三人がかどわかされているとすると、まだあと六人、娘がさらわれるかもしれませんな」
「待てよ……。それじゃ、里子に出されたのは、女の子ばかりかい？」
三九郎が、ふーッと、溜め息をついた。
「あたしだって、調べあげての話じゃありませんよ。そう、こまかいことまで訊ねられても困りますなア」
すると、それまで黙っていた日下兵馬が、遠慮がちに、口を開いた——

「後学のためにおたずねいたしますが、かどわかされた娘三人の親共は、なぜ、訴えて出なかったのでしょう」
「そのこと！　そのこと……」
三九郎が、わが意を得たりとばかり、ポンと膝を叩いた。
「それがさ、なんてッても、里親に対して実父や実母の方はヒケ目がある。だから、こと荒立てて、訴えて出るわけにもいかなかったのさ」
「もう一ツうかがいます。——目安箱へ訴状を投げ込んだのは、何者とお考えでしょうか？」
「そいつアわからねエ。が……、あたしの考えじゃ、小梅村のものじゃねエかなア。でなきゃ、同じ神田と言っても、油屋と易者と芸者屋……、あまりつながりのありそうな三軒ではねエ。そのことをみんな知ってるてなアおかしいやね」
と……、筆頭の茂太夫が、ふッと、思い出したように、一同を見廻した。
「そうそう……、お奉行さまのお話では、訴状の筆蹟は、どうやら女の手……と言うことであったよ」
城之介が、それに応えた。
「女の訴状とは、珍しいですな」
「左様……、珍しい。女の訴状……、それが、上さまのお目にとまった理由の一ツかも知れぬな…。どうだ。三九郎と城之介、それから兵馬……、若いところで、貴公達三人で洗ってみてはくれぬか」
「一つだけうかがっておきます……」
城之介が、茂太夫の顔を眺めた。
「——いずれは、小梅村にも当らねばなりますまい。小梅は両支配地ですが、かまいませぬか？」

江戸の地図に、グルリッと赤い線を引く……、これを朱引きと言って、その朱線の中が町奉行所の受け持ち、朱線の外は、代官の支配地だった。

が……、朱線の外でも、人数の多い土地、江戸の町々と密接なつながりのある村等は、町奉行所の役人が、代官所役人に連絡の上、調べの手を伸ばすことが出来ることになっていた。

このような土地を、町奉行所と代官所の双方の支配地——両支配地……と呼んだが、小梅の里も、その一ツで、ここには代官の手付役人が、役宅を置いていた。

城之介が茂太夫にたずねたのは、この手付役人へ挨拶をせずに、調べに行ってもよいのか……と言う意味のことであった。

「——さしつかえない……」

茂太夫が、はっきりうなずいた。

「——この度のことは、箱訴のことがきっかけ……。つまり、上さまじきじきのお声がかりと同じなのだ……」

二

「——あたしゃ、〝この花〟を調べるぜ……」

南町奉行所を出ると、由良三九郎が、そう言って、城之介と兵馬を見た。

三月の二日……。めっきり春めいた江戸の空は、薄化粧をしたように、ボンヤリとかすんでいた。

明日は桃の節句だ。——桃の花冠へ散るのどやかさ……とも言い、——冠を柳のなでるうらうらかさ……とも言う。ともあれ、柳緑花紅、江戸の一番いい気節である。

「――多分、そう仰有るだろうと思っていましたよ」
城之介が、兵馬と顔を見合わせて笑った。
「油屋だの、易者だのッてエのは、どうもあたしにゃお派が合わねエ。で……、芸者屋の〝この花〟へ行くが、柳原同朋町てエと、柳橋芸者の置き屋だろうな」
「さア……、どうでしょうかねエ」
「おい、城之介……。自分が受け持たねエからと言って、気のねエ返事をするなよ……。あたしゃ、こう考えてるんだ。〝この花〟の養女おやす……、実は、〝この花〟のおかみのかくし子だ」
「へエー、そうですか……」
「十五、六年前まで、おかみは自分でも、褄をとって、芸者に出ていた。ところが、間夫が出来たんだ。そして、孕んだ」
「孕みましたか？」
「そうとも……。どうせ、旦那はあったろう。が……、これは銭金ずくで、世話になっているのだ。旦那と寝る夜は、天井の節穴を数えているから孕まねえ。ところが間夫となると、女の方も夢中になる。従って、つい孕んじゃう。芸者が孕んじゃ、商売にならねエ。それで、小梅村辺りに隠れて、子供を産んだ。それがおやすさ」
「なる程……」
「女はおやすを、そのまま小梅で里子にして、柳橋に戻って来た。それからいろいろとあって、〝この花〟のおかみになったが、そこは親子だ、おやすのことが忘れられない。――あれから十七年、おやすも娘ざかり……と考えると、矢も楯もたまらず、とうとう強引に話をつけて、おやすを引きとった。いまさら、実の娘とも言えねエので、養女と言うことにした」

「ほほう……、それで、おやすは養女となってるんですか」
「そうなのさ……。ところが、一方小梅の里親の方でも、一たんは、〝この花〟へ戻したが、おやす可愛いや……てエわけで、淋しくてたまらねエ。で……、同じ里親達と相談して、おやすを連れ戻してしまった」
「ハハハ……」
とうとう、城之介が笑い出してしまった。——数寄屋橋御門から神田まで、三九郎の話を聞きながらあるいていたのだ。
「由良さん、それではもう、〝この花〟の調べをしなくても、すっかり話はわかってるようなものではありませんか」
「そう言うわけだ。あとは、ただ一ツ……。〝この花〟のおかみから、おやすを里子に出していたのは、小梅村のなんの何兵衛か……ッてことさえ聞けばいいのさ」
「では……、ここでお別れします」
城之介は、旅籠町のはずれ、緑橋の橋ぎわで立ち止まった。
「富松町の油屋は兵馬に頼んで、あたしは、通塩町の易者を調べてみます」
「では……、後刻、どっかで会おう……。両国の橋番所はどうだい？」
城之介は、うなずいてから、うしろについて来ている小者の助弁の助八を目顔で呼んで、右へ曲った。
曲ったところが、もう通塩町なのだ。
易者開運堂は、すぐわかった。——掘割りに臨んだ門構えの家で、——九星暦術一代運勢活断　開運堂小野霊山……と書いた大きな看板が出ていたからだ。

が……、まッ昼間だと言うのに、門はピタリと閉ざされ、家の中は、静まり返っているようであった。

城之介と勘八は、大扉の横の潜り戸を通って、中へ入った。

「――ごめんよ！　誰かいねエのかい……」

勘八が、大きな声で怒鳴った。

それからしばらくして、城之介は、三十五、六の、年増女と向き合っていた。――易者小野霊山の妻七重……と、女は名乗った。

女は、短い被布を着て、髪は束ねて下げ髪にしていた。そして、両手をキチンと膝に置き、胸を、ちょいと反らせ気味にしていた。――武家女でなし、巫女でなし、と言って勿論町家の女房姿ではなく、一種異様な姿だった。

「――夫霊山は加減が悪く、伏せッております。どのような御用か、わたくしではお聞かせ願えませぬでしょうか？」

そう言う女の言葉は、切り口上だった。

「――お前さん、かえでッて娘のお袋かい？」

城之介は、女のもったい振った様子をはぐらかすように、わざと砕けた言葉を使った。

「義母でございます」

「と言うと？」

「かえでは、先妻がうみました。わたくしは後添いでございます」

「そうだろうなア……。お前さんに、十七の娘があるなんて気の毒だ」

「気の毒？！」

「そうさ……。若くって、美しい……。十七の娘の母親なら、もっとくたびれてる筈さ」
「ご冗談を……」
女は、チラッと、口もとに笑いを浮かべた。——まだまだシャッチョコ張ってはいるが、それでも悪い気持はしなかったらしい。若くて美しい……、これは年増女への殺し文句なのだ。
「ところで、かえでがいなくなったのは、幾日だい？」
「かえでが、どうしたと仰有るのでしょう？」
「とぼけちゃいけねエ。あたしゃお南の同心だが、きょうやって来たなア、御老中のお指図……、と言うよりゃア、将軍家のお声がかりだ。その場逃れの返答をして、あとでどんなおとがめを受けても知らねエぜ」
「——だ……、旦那！」
女の様子が、コロリと変った。
「かえでは、もうすぐ帰って来ますから、ソッとしといて頂けませんか？」
「戻ってくる?!」
「騒ぎ立てなきゃ、三月のうちに戻してやる……、そんな手紙が来ているんです」
「当てになるのかい？」
「でも、別にお金を出せと言うではなし……。戻してくれると思います」
「年頃の娘を連れて行った。銭がほしいわけではない。とすりゃア、目的は娘の体だ。戻って来たときは、飛んだキズもの……、そう考えると、父親の霊山は心配で心配で、とうとう病気になった。そこへ行くと、義理の母親は冷てエなア」
「いいえ……。あたしだって、心配はしていますよ。でも……、体を汚されたって、命が助かればい

い……、あたしはそう考えてるんです」
「ところで、かえでを、里子に出したことがあるかい？」
「里子ですッて？」
「そうよ。小梅あたりへ……」
「小梅？！　小梅ですかッ……」
なぜか、サッと顔色をかえた女が、すぐ、首を横に振った——
「いいえ……。かえでは、この家で生まれ、この家で、十七年間育って来たんです。里子などに行ったことはありませんよ……」

三

城之介は、苦が笑いをしながら開運堂を出た。
「——なっちゃいませんねエ……」
勘八が、大げさな門を振返ってつぶやいた。
「易者の癖に、娘はかどわかされる、自分は病気になる、勘弁なりませんよ」
「ひとさまのことはわかるようなことを言っても、自分のことはわからない……。易なんて、そんなものさ」
「その上、あの七重とかッてかみさん、乙に澄まして……。なんです、あの恰好」
「易者は、易を見て貰いに来る客を亡者と言うそうだ。閻魔さまがシャッチョコばり、赤鬼青鬼が虎の皮のフンドシをして、亡者をおどかすのと同じさ。まンず、衣裳や押し出しで、迷ッて来るやつの

ド胆を抜こうッて仕組みなのさ」

話しながら、城之介と勘八は、両国広小路へ出た。——この広小路をななめにつッ切ると、両国の橋番所がある……。

浅草の奥山と共に、両国の広小路は江戸の二大盛り場だった。——見世物小屋がズラリと並び、大道芸人が店を張っている。

「——おッと、旦那……」

勘八が、城之介の袖を引いた。

「あれを知ってますか、あれ……。いま評判の女砂絵師ですぜ」

そう言って勘八が指さしたところには、三、四十人の男が集まっていた。

「知らないね……。見物衆は、男ばかりじゃねエか」

「女連中は、はずかしがって、寄りつきませんよ。砂絵師の名はお妻ッてんですがね、右手に砂を握って、サラサラサラ……と、地面へ砂絵を描くんで……。その握り方が、これなんでね」

勘八は、人さし指と中指の間から、拇指をのぞかせる怪しげな握り方をして見せた。

「それで、女の子ははずかしがるのかい」

「その上、描く絵がどうも、危ッかしい女の裸姿ばかりでしてね。その上——」

「まだあるのかい？」

「これが肝腎なんで、お妻は砂絵を描く時、立ち膝をするんです。するッてエと、膝前が割れるでしょう。チラチラと、白い太ももの辺りがのぞくッて寸法なんで……」

「その奥は見えやしねエよ。ちゃーんと、用心してるんだ」

「そこが人情……。見えるか、見えるかッてね、みんな、一番前へ出て、しゃがんでやがるんで……。

ちょいと、のぞいて見ましょうよ」

勘八の言葉にさそわれて、城之介は、人だかりのうしろからのぞいた。

「――ウプッ！　いるいる……。旦那旦那、あしこに……」

勘八から言われるまでもなく、城之介も気付いていた。――芝居で言うなら、カブリつきのまンまン中……と言うところだろう。一番の、しかも女砂絵師のまッ正面に、由良三九郎と小者の六助がしゃがんでいたのだ。

「――ほう……、こいつアちょいとした、いい年増だ……」

城之介は、そう思った。――砂絵師のお妻は二十七、八……。カツラ下のような髪を結って、左膝を立て、見物へ笑顔を向けていた。右膝の横には、青・紅・白・黒・緑・それに金色などに染めわけたこまかい砂の箱が並べてあった。

「――いいかい、お立会い……。ここにある砂は、ただの砂じゃないんだよ。わざわざ備後の国は三原帝釈山から取り寄せた白割砂。色づけをして、名前がついている、赤がかがり火、青が浮舟、白はうの花……と言えばわかるだろ。みんな〝源氏物語〟からとった名前なんだよ」

大道芸人の常で、口上が長く、なかなかお目立ての芸は見せない。しかも……

「〝源氏〟と言えば、お立会……。大勢の女が出て来るけど、どんなコレを持っていたか知ってるかい？」

女砂絵師は、そう言うと、自分の股の下辺りをポンポンと叩いた。

「――おしえてあげようか？　紫の上は上つきさ、末摘花（すえつむはな）は下つき、六条御息所（みやすんどころ）はよくなかったらしいけど、大へんお好きだったらしいよ。空蝉はちょいと骨ッぽく、なんと言っても藤壺が一番。あれはね、本当はタコ壺と言うんだってさ」

そんな話に、見物達がゲラゲラと笑った。——三九郎も、いっしょになって、ニヤニヤしている。

「——お前エのは、どうなんだ？」

よせばいいのに、小者の六助が怒鳴った。

「おや、イキのいい兄さんだねエ。見せてあげようか？　と言っても、これぱっかりは見ただけではわからない。中をさぐって見なきゃアねエ。なんだったら、今夜、小梅村までたずねておいで……。中を調べさせてあげるよ」

「——小梅?!」

さすが三九郎も同心のはしくれだ。

——小梅と聞くと、ピリッと、眉を動かした。

が、女砂絵師は、もう、六助の相手にはなっていなかった。

「——では、ボチボチ描くよ。その前に、お立会いだって、ただで見る積りはないだろうね。ここいらで、お賽銭をあげておくれよ」

とたんに、バラバラッ……と、見物が銭を投げた。

「——ちょいと……。これだけかい？　もうちッと、お投げよ。あと二百ばかり……。思いッきり、膝を立てて書くからさ」

「よし来た！」

なんと、三九郎が、ポンと二朱銀を一ツ投げ出した。——二朱と言えば五百文だ。

「——話せるねエ、旦那……。今夜、小梅にいらっしゃいよ……」

女は、色ッぽい目で、ジッと三九郎を見ると、サッと、金砂を握った。

「——書くよ。まずは、——十七娘がエビ責めに会っているところ、題して、〝よね山くずし〟とご

ざい……」

女の手から、金砂がサラサラとこぼれた。それが、細い線になって、忽ち、両手両足を縛られたまッ裸の娘の姿になって行く……。

城之介が、口の中でつぶやいた——

「——〝よね山くずし〟……。よねとは、かどわかされた油屋の娘の名だが……」

四

「——けッ！　一分がとこ損をしちまった……」

城之介が両国の橋番所で、ぬるい番茶を飲んでいるところへ入って来た由良三九郎が、口惜しそうに、そんなことを言った。

「それはそれは……大変なおものいりでしたなア」

城之介が、クスリッと笑った。

一分と言えば、一両の四分の一だ。両に一石としても、一分で米が二斗五升買える勘定になる。どうやら三九郎は、あれからまた二朱銀を一ツ投げたらしい……。二朱銀二枚で一分なのだ。

「世の中に、女の股ぐらくれエ奥の深けエものはねエなア」

「そうですかねエ……」

「そうなのさ。なにしろ、目を皿のようにしていても、どうにも奥の院まで見きわめられねエ」

「ほう！　あのように、一番の前にいてもですか？」

「なんだなんだ、城之介。見ていたのかい。人が悪いぜ」

三九郎と城之介は、声を揃えて笑った。
「ところで、どうだった、易者の方は？」
「かえでと言う娘がかどわかされたのは事実ですよ。しかし、残念ながら、里子に出したことはないそうですよ」
「やっぱりねエ……」
三九郎は、口をへの字に結んで、溜め息をついた。
「由良さんの方も、面白くないようですな」
「全く気にいらねエよ。〝この花〟のおかみは四十過ぎの中婆アなのさ。芸者あがりどころか、もと料理屋の女中頭で、ひき臼みてエに太ってやがる。そして、言うことが気にいらねエ、——養い子のおやすは、踊りのお師匠さんといっしょに、お伊勢参りに行っております……と来たね」
「かどわかされたんじゃない……と言うわけですか？」
「そうなんだ。決して、お上にお手数をかけるような間違いはいたしておりません……と正面切って言いやがった」
「開運堂でも、隠そうとしました。で……、上さまお声がかりだ。後々に於て、かどわかしの事実が明きらかとなった場合、きっとおとがめがあるぞ……ッと一発かましてやりましたよ」
「あ……、そうかア！　そのテがあったッけ……。あたしゃ、いまいましいが戻ってきたよ」
「里子の件はどうなんです？」
「おやすかい？　大笑いだ。生まれは越後の十日町……。雪が深けエところだってさ。十五の年に、十両の手切れ金で、親元から買われて来た。ちゃんと、証文が入ってたよ」
そこへ、富松町へ行った日下兵馬が、鼻ッ面を逆か撫でされたような顔で入って来た。

「——どうしたい、油屋の方は？」
三九郎がたずねた。
「——目下養生のために、下部の方へ、行ってるそうです」
「なにをッ?!」
「油屋の屋号甲州屋でもわかるように、あしこは甲斐の出なんです。娘のおよねが、ひょっとしたはずみに足首を痛めましてね、先月半ばすぎに、郷里の下部へ行かせた……と、甲州屋の後家が言ってました。下部の湯は、うちみや筋違いにきくそうですな」
「聞いたかい……？」
三九郎が、城之介へ顔を向けた。
「湯治だとよ、油屋の娘は……」
「みんな、口を揃えて、娘のかどわかしを隠しているようですな」
それから城之介が、兵馬にたずねた——
「小梅の方に、かかわりはないようかい？」
「たずねてみました。——養女なんて飛んでもない……と、後家は言いました。甲州屋伝兵衛ッて主人(あるじ)が八年前に死に、女手ひとつで店を切り廻して来たのも、ひと粒だねのおよねが可愛いからだそうです」
——チチチチッ……と、三九郎が、続けざまに舌打ちをした。
「——曲者は、小梅の里親九人の中にあり……、と書いた箱訴の文面はどう言うことなんだい！」
「でたらめでしょうか？」
そう言う兵馬に、城之介が首を横に振った。

「娘三人のかどわかしは間違いないんだ。でたらめや、いたずらを書き加えるとは考えられないな。それに……」
「それに?!　何か気付いたことがあるのか?」
三九郎がたずね返した。
「由良さん、さっきの砂絵描きの女……。あれをどう思います?」
「お妻かい?　へへへ……、色っぽいねエ、あの女。ちょいと年増だが、女はあの頃が一番うめエのさ」
「小梅らしいですな、お妻の家は」
「うン……、小梅へいらっしゃい……と言ってたッけ」
「妙に小梅に縁があるじゃありませんか」
「いやア……。お妻の家と、娘のかどわかしとはかかわりはねエだろう」
「そうでしょうか……」
城之介は、首を傾げた——
「あたしは、由良さんを、お上御用の定町廻りと知って、わざと小梅へ来い……と、謎をかけたような気がするんですよ。あたしは、〝よね山くずし〟のエビ責めしか見なかったんですが、その後で、どんな砂絵を描いて見せました?」
「えーと……、最初が〝よね山くずし〟さ。次が、〝立田川もみじの流れ〟だったかな。山の湯らしいところで、女が湯あみをしていてさ、まッ赤なもみじが流れている。艶ッぽい絵がらだったな」
「それだけですか?」
「もう一ツ見たよ。〝春の寿浦安の踊り〟ッてんだ。緋の袴だけをはいた女が、乳房をさらけ出して、

鈴を振り振り踊ってる姿……。よかったよ、これも」
「それで三ツ揃いますな」
「なにが？」
「〝よね山〟のおよね。〝浦安〟のおやす」
「かえでは？」
「紅葉は、かえでが一番美しいと言いますな」
三九郎が、ふーム……と、呻なり声をあげた。
「城之介！　なぜ、もっと早く言わねエんだ。お妻はさっき、砂箱をしょって帰っちまったぜ」
「わざと放しておいたんです。泳がせておけば、なにかもっと、はっきりした手掛りが握れるかと思いましてね。小者の勘八がツケていますよ」
ところがその夜、八時ちょいと前に、勘弁の勘八が、城之介の屋敷へ、転がるように飛び込んで来た。
「――なにかあったなッ?!」
「済ンません！　砂絵描きのお妻が……、殺されましたよッ」
「殺された?!　お前、お妻の家を張ってたんだろ？」
「それが……、腹がへって、近くの飯屋へちょいと――」
「わかったよ。その間に、お妻が殺された……てんだろ？」
「へエ……、砂絵の稽古をしてるところを、うしろからズブリッ……と、ひと突き」
「突き殺されたのか?!」
「竹槍ですよ。あの辺りにゃ、藪が多いんです……」

城之介が立ち上がった。
「――由良さんと、兵馬にしらせて来な。それから、駕籠だ……」

五

「――おッとッと……、そこを左へ曲ってくんな……」
城之介の駕籠について走っていた勘八が、駕籠屋へ声をかけた。
三九郎、城之介、兵馬の三人は、駕籠をつらねて、本所から向島へ入った。――小さな中ノ郷川一ツで、本所と向島に別れるが、そのとッつきが、小梅の里だった。
小梅の里とは、イキな地名だ。が……、百姓が一番多く、次が瓦職人、それから江戸の町中では食っていけない貧乏人が、広い田ンぼのあちらこちらに散らばっていた。
「――よしきた！　その家だ……」
勘八の声に、駕籠がとまった。――とたんに……
「――なんだなんだ、お前エ達……」
柴折り戸をあけて、ズングリした男の影が近づいて来た。
「南町奉行所、定町廻りの旦那方だ」
「え……」
男は、駕籠から出た城之介達に、ピョコリと腰をかがめた。
「こりゃアわざわざ遠いところを……。なにね、もう、戸田の旦那が検死をなさいましたから……」
「戸田？　そりゃアどこの誰だい？」

三九郎が、ムッとしたようにたずねた。
「ヘエ……、代官所手付きの旦那で……。戸田伊織さまと仰有います」
「名前エは？」
「ですから、戸田伊織さま――」
「馬鹿野郎ッ」
三九郎が、頭ごなしに噛みついた。
「貴様の名をたずねているんだ」
「ヘエ……、牛の御前の三蔵と申す御用聞きで……」
「三蔵……、戸田どのとやらに取次いでくんな。お南から、千秋城之介、日下兵馬、それから由良三九郎の三人が、上さまお声がかりで出張ったとな」
「う、上さまッてエと……」
「わからねエのかい？　詳しく言うと、淳和奨学両院の別当、源氏の長者、従一位太政大臣、征夷大将軍、葵の御紋がピーカピカッてんだ。わかったかッ」
三蔵と言う土地の御用聞きが、泡を食って柴折り戸の中へ飛び込んで行った。
「気にいらねエ野郎だ。代官所のやつ等は、なにかと言うと、奉行所へたてつきやがる」
「なんだか、お妻の死骸を見せたくないようでしたね」
「何も、冷たくなった女なんか、見たかアねエよ。どんないい女だって、生きてるうちが花さ……。が、あんな三下から木戸をつかれかけちゃ勘弁ならねエ。意地にも、お妻の死を調べようぜ……」
その時、家の中から、御用聞き三蔵に提灯を持たせて、羽織、袴の武士が出て来た。
「――これはどうも、御苦労ですなア、拙者、関東郡代手付き、当向島の出張り陣屋をおあずかりす

る戸田伊織です。よろしく……」

そう言って、武士が、軽く会釈をした。

御奉行所同心は、三十俵二十人扶持……。一方、代官手付きは、二十俵五人扶持である。その点から言えば、城之介達の方が上だ。

しかし、着流し巻き羽織の同心に対し、こちらは羽織、袴と言う与力に似た姿だ。しかも、戸田伊織は、向島の出張り陣屋をあずかっていると言う。なかなか堂々たる押し出しだった。

出張り陣屋とは、代官所の出店のことである。

「ところで……、先刻は、上さまお声掛りなどと、三蔵へ言われたそうですが、おたわむれとしては、度が過ぎまするなア。かりそめのことに、上さまのお名を――」

「たわむれじゃねエんでねエ」

「えッ?!」

三九郎の言葉に、戸田伊織が、驚きの声をあげた。

城之介が、三九郎にかわって、この度の吟味が目安箱の箱訴によるものであることを説明した。

「――し、しかし……」

伊織が、喘ぐように、しわがれた声を出した――

「その娘達のかどわかしと、女砂絵師お妻殺しとは、かかわりがないのではありますまいか?」

「あるかないか、とにかくお妻の死骸を見せて貰いやしょう……」

三九郎の言葉に、伊織が先に立って、家の中へ入った。

百姓家に、ちょいと手入れをしたような小さな家だった。

お妻は、裏手の雨戸をあけたところに倒れていた。

「あれで、突き殺したのです……」

伊織が、三蔵から提灯をとって、雨戸の外を照らした。——そこに、六、七尺に切った青竹が一本転がっていた。竹は、一方が鋭く殺いであって、ベットリ、血潮を吸っていた。

「——ちょいと灯りを拝借……」

城之介は、伊織から提灯を借りると、外へ出て、竹槍の横にしゃがんだ。

「誰か、この竹槍をうごかしましたかな？」

「いや……。誰も。拙者も、これから、竹槍を調べてみようと考えていたところです」

伊織が、低い声で答えた。

「この変事をみつけたのは？　この家のものでしたか？」

「お妻は、ひとり暮らしでしてな……。みつけたのは、たまたまこの家の裏を通りかかった、近くの百姓です」

城之介は、勘八を振返った。

「勘の字……。お前エはどうして、お妻が殺されたことを知ったんだい？」

「この家の表へ戻って来ますとね、百姓共が五、六人、ヒソヒソと、話をしてやがったのですよ。その話を聞いて、八丁堀まですッ飛んでったんです」

「じゃ、死骸は、見ていねエんだな？」

勘八が、コックリ、うなずいた。

城之介は、提灯を伊織へ戻して、家の中へ戻った。

女砂絵師と言えば、大道芸人だ。——口上は荒く、時にはえげつないことを言ったり、こッ恥かしい身振りを見せたりしても、そこは女芸人……。家の中には、小イキな道具が置いてあった。

商売道具の五色の砂は、それぞれの箱に入れて、風呂敷に包み、火鉢の横に置いてあった。

「――由良さん、どう思います？」

「そうさね……。この場の様子から判断すると、下手人は、雨戸の外にかくれていた。勿論、竹槍を持ってだよ。すると、便所にでも行ったのだろう。お妻が、手を洗おうと雨戸をあけた。それを狙って、グサリッ……と。そんなところじゃねエだろうか？」

すると城之介より先に、伊織がうなずいた。

「御明察！　捕者もそう思います」

が……、城之介は、ニヤリとわらった。

「あたしは、別のことを考えてるんですよ。お妻は、砂絵の稽古をしていた。そんとき、雨戸の外から誰かに呼ばれた。で……、急いで雨戸をあけたが、同時に、ブスリッ……と竹槍がくり出された」

「砂絵の稽古をしていて？」

いぶかしげに、三九郎がたずね返した。

「竹槍をよく調べてみると、金色の砂が幾粒か、血のりでくっついてますよ。砂を摑んだ手で、お妻が竹槍を握ったからでしょうな」

それから、城之介は、ちょいと勘八の方を見た。

「第一ね……、肖のうちから、この家にゃ勘の字が、張り込んでいたんです。竹槍をかついだ曲者がしゃがんでいりゃ、ドジな勘の字でも気がつくでしょう。下手人は、勘八が飯を食いに行った、わずかなスキを狙ったんですよ。こんな考えは、気に入りませんか？」

六

次の朝、奉行所へ出ようとしている城之介の屋敷へ、三九郎があわただしく入って来た。

「――昨夜、易者の開運堂が死んだそうだぜ」

「小野霊山が?!」

「やつは、ずッと病気だったそうじゃねエか」

「娘のことを心配して、床にはいっているようでしたが、死ぬような病人ではなかったと思いますが……」

城之介が、ふッと、顔をあげた。

「行ってみましょうか」

「易者の検死をするのかい?」

「いや、向島ですよ……。あたしは、お妻の遺言を無駄にしたくないんです」

「城之介！　お前さん、お妻から、何か言われてるのかい?!」

「あたしだけではない。由良さんも、御存知の筈ですよ」

それから三十分ほどして、いぶかしがる三九郎を促した城之介が、向島の代官出張り陣屋へ現われた。

「これはどうも、早々と御苦労ですなア……」

そう言う戸田伊織へ、城之介のきびきびとした声が飛んだ――

「――開運堂の後妻七重は召捕ったぜッ」

「え?!」

「娘三人のかどわかしが、お声掛りの吟味と言うことは、昨夜も言った筈だ。お召捕りになれば、獄門は逃れッこねエ……。武士の情だ。しばらく待ってやる。とっくり考えてみちゃアどうだい」

その言葉に、伊織は、まばたきを忘れたような顔で、城之介を見詰めていたが、スーッと、顔から血の気が引くと、ヨロヨロッとうしろへさがった。

「――しばらくッ……。しばらく御猶予をッ」

伊織は、血を吐くような声でそう言うと、よろめくように、奥へ駈け込んで行った。

陣屋には、書役、下役、勝手賄など、いろいろの役人がいる。そんな連中が、白い目で城之介と三九郎を睨みつけていたが、城之介は、平気な顔で、陣屋の玄関先に突ッ立っていた。

「――城之介……、いかに御用筋とは言え、代官所陣屋へ踏ン込むなんて、ちょいと無茶過ぎる…。こいつア、筋違いで、あとがうるせエぜ」

三九郎が、モジモジしながら、小声で言ったが、城之介は、クスリと笑った。

「由良さん、お妻の遺言を申しましょうか?」

「あ……、それを、あたしも知ってると言ったな」

「目安箱の箱訴ですよ」

「あれは、お妻が書いたと言うのかい?!」

「お妻ですよ。女の筆だと言うことだったじゃありませんか。しかも、名文ですな。――曲者は小梅の里親、九人の中にあり……。いいですか……、曲者は小梅のさとおや、くにんの中にあり……。この区切りを変えてごらんなさい。さとおや……でなく、さと――おや……と切るんです」

「――曲者は小梅のさと……おやくにんの中……。まてよッ! 曲者は小梅の里、お役人の中にあり

……、おッ！」

その時、奥の方から、——わッ……と、泣き叫ぶ女や子供の声が聞こえた。

「どうやら、腹を切ったようですな」

「城之介！」

「行きましょう……。これから、御用聞きの三蔵の家へ乗り込むんです。かどわかされた娘三人は、多分、三蔵の家のどっかに、押しこめられていますよ。それから、開運堂の女房、七重を、本当に召捕らなきゃなりませんなア」

「——七重ッて女が、なにもかも自白しましたよ……」

三九郎が、得々として、同心筆頭の早水茂太夫へ報告した。

「七重はもと、吉原の女郎で、戸田伊織とは深か間だったんでさ。それが易者の開運堂に身受けされた。たまたま、去年の春、向島の花見で、戸田伊織と出会い、焼けぼッ杭に火がついたッてわけ。七重は易者の亭主がいやでいやでしようがない。一方戸田伊織は陣屋の公金を使いこんでいて、銭がほしい」

「そこで、開運堂を殺そうッて相談になったのかい？」

「しかしね、ただ殺したんじゃ、娘のかえでがいるから、財産を乗っとるわけに行かねエでしょう。そこで、まずかえでから片づけることにした。しかも、伊織の知恵で、かえでひとりを処分したんじゃ継母の七重に疑いがかかるてんで、緑もゆかりもねエ油屋や、芸者屋〝この花〟の娘達もかどわかした」

「飛んだ飛ばっちりだなア、およねや、おやすは……」
「かどわかしの役目は、御用聞きの三蔵ですよ。城之介の見こみどおり、娘達は、三蔵ン家の物置きへ押しこめられていました」
茂太夫が、城之介へ顔を向けた——
「よく、箱訴の文の謎を解いたなア」
「まぐれですよ。お妻が砂絵の稽古をしていた筈なのに、砂箱が片づけてある。それに、伊織と三蔵が、あたし達を、家ン中へ入れたくない様子でした。こいつアおかしい……。同じ御用役人なのに…と考えました。そして、小梅の里の役人……と言ってるうちに…」
「里親九人の謎がとけたってわけか。それにしても、女砂絵師のお妻が、なぜ伊織の悪事を知っていたのであろうなア？」
三九郎が、溜め息をついた。
「お妻は、伊織から可愛がられていたんでさ。それが、七重とよりが戻ってから、冷たくあしらわれる。それを腹に据えかねて箱訴したんですが、結局伊織から殺された。つつしむべきは、色の道ですなア」
その言葉に、茂太夫が苦が笑いをした。
「人間、長生きはするもんだなア！　三九郎から、そんな言葉を聞こうとは、夢にも考えていなかったぜ……」

切り髪屋敷

一

町内の風呂屋で、ノンビリ、人気のない女湯の朝を楽しんでいた千秋城之介を、小者の勘弁の勘八が呼びに来た。

――奥さまあって殿さまなし……。女湯の刀かけ……。金でつながる首もある……。地獄の中の極楽橋……。貧乏小路に提灯かけ横丁……。寺があって墓がなし……。儒者と医者と犬の糞……。これが八丁堀の七不思議なのだ。

八丁堀は、言うまでもなく、南北両町奉行所の与力や同心の町だ。――七不思議の一ツ一ツにいわれがあるのだが、その説明は長くなってわずらわしい。

ともかく、与力や同心は、町の銭湯の女湯を、朝のうちは独占できる特権階級であった。されば、湯屋でも、女湯にはふさわしくない刀掛けを設えておかねばならなかった。

「――バタバタするなよ。折角の春の朝が台なしじゃないか」

「ですけど旦那……」

勘八が一度、ゴクリッと生つばを呑みこんだ。

「早水の旦那が、由良の旦那を連れて、おいでになってるんですよ」
「早水どのが?! うちにか?」
城之介の言葉に、勘八がコックリと、うなずき返した。
早水茂太夫は、南町奉行所の定町廻り同心の筆頭なのだ。
「――すぐ帰る……。お前エ、先に戻って、お茶でも出しておきな……」
それからしばらくして、城之介が屋敷へ戻ると、茂太夫は、庭にある痩ッこけた山ざくらの枝を、ノンビリと眺め、由良三九郎は、縁側で渋茶を飲んでいた。
「――なにか、出来事があったんですか?」
そうたずねる城之介へ、三九郎は、ちょいと首を振った。
「――あたしもまだ、何も聞いていねエのさ」
「実はな……」
茂太夫が、三九郎と城之介に近づいて来た。
「私事で相済まぬが、二人に頼みがあるのだ」
「どんなことでしょう?」
「本多下総守さま……、知ってるかい?」
三九郎がうなずき、城之介が口を開いた――
「江州膳所の御城主でしたな」
「そうなんだ。三河以来の名家で六万石……。上屋敷は南八丁堀にある」
「たしか、下総守康好と言う方が、二年ばかり前に――」
「お亡くなりになった。跡目は一子平三郎どのにお許しが出ているが、まだ五歳なので、伯父に当る

本多隼人どのが後見をされている」

三九郎が、湯呑み茶碗をおいて、茂太夫を見た——

「本多家は、早水さんのお出入り屋敷ですか？」

「うん……、祖父のときから……。わしで三代目だ」

町奉行所の同心達は、それぞれ出入りの大名屋敷を、何軒か持っていた。

大名屋敷は、いわば江戸に於ける大名達の城郭であった。たいていのいざこざは、屋敷内でかたづけ、外部に漏れないようにした。

たとえば、お手打ちや切腹など、人命にかかわることでも、内々で処理してしまったものである。だが、出入町人との問題、屋敷に隣接する町屋との争い、屋敷のものが外へ出て起こした間違い……、その他、内部だけで始末の出来ない問題も度々持ち上がった。

このような場合、心安い町方同心がいてくれると大変都合がよいわけだ。

一方、同心の方でも、大名屋敷へ出入りをすれば、年々決まったお手当てを頂戴出来る……。大体十人扶持だ。どんな小大名でも五人扶持はくれる。一人扶持とは日に五合の米のことであるから、十人扶持なら毎日五升頂けるわけだ。こんな屋敷を四、五軒持てば、同心の俸禄よりは、遥かに多くなる。

双方好都合なので、同心が出入り屋敷を持つようになったのだった。

「——本多家お屋敷で、困ったことが持ち上がったのですか？」

「いや、屋敷は屋敷だが、亀戸の切り髪屋敷で、出入りの小間物屋が殺されたのだ」

城之介と三九郎は、思わず顔を見合わせた。

切り髪屋敷とは、亡くなった先代の殿さまから可愛いがられた女が、髪を切り、殿さまの位牌を護

って、念仏三昧に余生を送る屋敷のことである。

将軍家でも、このような場合、桜田門外の御用屋敷――一名比丘尼屋敷と呼ばれるところへ入るのだが、大名の場合は、実際に切り髪屋敷を使うようなことは、めったになかった。

切り髪屋敷に、先君御寵愛の女共を入れるとすると、ひとりひとりに、相当の女もつけねばならぬし、かなりの経費がかかるわけだ。

また、殿さまに死なれた若い女を、一生、そのような屋敷へ押しこめておくと言うのも可哀そうなわけである。

奥方は、殿さまに死別しても、上屋敷なり、下屋敷なりにとどまっている。切り髪屋敷へ入るのは、お手がついた女だけだ。――そんな女は、縁切り金をやって、自由を与えた方が、大名側も助かるし、女の方も再縁することが出来る……。だから、切り髪屋敷は、年中空き家だったわけである。

「ところが、困ったことに、本多家の場合、先殿ご寵愛の藤の方と言う女性は、こんど跡目になおった平三郎君のお母さまなのだ」

「なる程……、殿さまのお袋さまが、どこの何兵衛だかわからぬ野郎の女房になっちゃ困るッてわけで、切り髪屋敷へ押しこめた……ッてわけですね」

「どうも、三九郎の話は、ざッくばらん過ぎるなア」

「でも、そうなんでしょう。藤の方と言うのは、幾つです？」

「確か、二十六歳……と聞いている」

「へへへ……、こん度こそ眠ろうとする御後室……なんて川柳を御存知ですか？」

「なんのことだ？」

「二十六でしょう……。殿さまとの楽しかったあのこと、このことを思い出すと、体があつーくなっ

て、眠れねエ年頃ですよ」

茂太夫は、苦が笑いをして、城之介へ顔を向けた。

「早水さま、藤の方は、大名道具になるほどの女、言うまでもなく、美しいのでしょうな」

「お出入り町人、日本橋の呉服屋三河屋の養女でな、大そう美しいそうだ」

「若くて美しい女を、無理矢理髪を切らせるから、間違いが起きるんですよ」

「いや……、藤の方は、自分の方から、切り髪屋敷入りを望んだそうだ。三九郎が言うような女ではないらしい。——若殿の御成長を楽しみに、一生先殿のお供養がしたい……、そう言われては、お重役も縁切り金を出すわけにはいかんかったと言われている。なにしろ、御当主のお腹さまなのだからな」

「では、小間物屋と御後室の間に、おかしなわけがあった……とは考えられないのですな？」

「問題はそこだ……。切り髪屋敷は、年をとった門番二人の外は、女ばかり……。そこで今朝、若い小間物屋の死体が現われた……となると、誰かが、その男を引きずりこんだことになる」

すると、三九郎が、ニヤリと笑った。

「で……、あたし達へお頼みと仰有るのは、男を引きずり込んだ女をつきとめるのですか、それとも、男を殺した下手人をめっけ出すのですか？」

「わしが、本多家のお重役から頼まれたのは両方だよ。しかもだ、出入りの町方同心を、すぐ切り髪屋敷へ……と言い出したのは、藤の方だそうだ」

そう言って、茂太夫は、冷たくなった番茶を、うまそうに呑んだ。

「——どうして、早水さまご自身で、お調べにならないのです？」

城之介が、そうたずねた。

「わしは、本多家からお手当てを頂いている。何かをあばき立てても、本多家のため、臭いものにフタをしたくなるかもしれぬ。それでは、町方同心が乗り出す意味がなくなる。貴公達二人に、存分に腕をふるって貰った方がよい、そう考えた……」

それから、茂太夫が、ひと言つけ加えた——

「殺されたのは、京橋の小間物屋〝紅梅〟の息子彦次郎と言う男だ。これで、わしの知っていることは全て物語った筈だよ……」

二

亀戸村には、本多家の下屋敷があった。——五百羅漢で名高い羅漢寺の近くで、その下屋敷から三丁ほど離れたところに、本多家の切り髪屋敷があった。

東と南を、横十間川と竪川が流れ、西と北は森にかこまれたもの淋しい屋敷だった。

「——あ……、旦那のおいでを、お待ちしておりました……」

三九郎と城之介が切り髪屋敷の門へ近づくと、背の高い、三十五、六の男が腰をかがめて迎えた。帯に挟んだ十手を見るまでもなく、御用聞きであることがひと目でわかる身仕度をしていた。

「——金春の正吉と申します。よろしくお引き廻しを……」

「金春？」

「へエ……、京橋金春新道に住んでおりますんで……」

「この亀戸村は、京橋の御用聞きの縄張りかい？」

三九郎が、皮肉なたずね方をした。

「いいえ……。実は、小間物屋の〝紅梅〟から頼まれましたんで……」
「へエー、〝紅梅〟じゃ、伜の彦次郎が死んだことを、もう知っているのかい？」
「いいえ……。実は、けさ早く〝紅梅〟の内儀がやって来まして、――伜がきのう、本多さまの切り髪屋敷へ御用伺いに行く……と言って出たきり戻って来ない。それに、伜がズブ濡れになって、さめざめと泣いてるいやアな夢を見たから、調べて貰えないか……と、泣きつかれましてね。しようがないから、やって来たッてわけなんで……」
「御苦労なこッたな。が……、正吉、町方の御用聞きが、大名筋へ手を出していいのかい？」
「え？」
正吉は、ハッとしたように、三九郎の顔を見た。
「大名はもとより、旗本・御家人といえども、われわれ同心でせエ手が出せねエんだぜ」
「存じております。ただ……、〝紅梅〟の内儀の嘆きが可哀そうなんで、様子だけたずねに来たんですが……、ポーンと、撥ねられました」
「当り前だ。とッとと帰れと言われたか？」
「いいえ……。南町奉行所よりお係りがおいでになる。それまで表で待っていろ……と」
三九郎が、城之介を振返った。
「どうするい、城之介？」
「いいでしょう。殺された側からも、誰か立ち会った方がいいと思いますが……」
「それもそうだな……。ついて来な」
やがて、三九郎と城之介は、書院風の座敷へ通され、金春新道の正吉は、その縁側にかしこまった。

「――さすがは、女ばかりの屋敷だなア……」

三九郎が、城之介にささやいた。

「そうですな。見かけは淋しく、ものあわれな様子ですが、一歩入ると、ガラリッと、華やいだ、甘い匂いが流れていますな」

「これが、女の匂いッてやつだな。女護ガ島とやらには、年中、こんな匂いの風が、ソヨーロ、ソヨロと吹いてやがるんだろう」

その時、シトシトと縁側を踏んで、おかいどり姿の若い女が、五、六人の女中を従えて入って来た。

「――わたくしは、当お屋敷の女中たばねを致しております老女、萩尾と申します……。南町奉行所定町廻りお同心、由良三九郎さま、千秋城之介さまと申されましたな？」

その言葉に、三九郎と城之介が、会釈をした。

「また、そこに控えていられるのは、御用のもの、正吉と言われましたな」

「へエ……、京橋〝紅梅〟の主人にかわって、おうかがい致しました」

「小間物屋彦次郎は、人手にかかって相果てました」

萩尾と言う老女は、冷やかな声でそう言うと、厚化粧をした顔を三九郎と城之介に向けた。

「早水茂太夫どのは、どうなされました？」

「このところ、処労のため、伏せておりますので、われわれが名代として参りました」

城之介が、そう答えた。

「――どうなされます？　死骸を、ご覧になりますか？」

「見せて頂きましょう……」

「では、案内を致させます……」
それからしばらくして、三九郎、城之介、それに正吉の三人は、腰が曲りかけた老門番の案内で、広い庭を歩いていた。
「――親爺……、この屋敷には、どれくらい女がいるのだ？」
「七十人くらいですよ……」
門番は、下を向いて歩きながら、三九郎に答えた。
「藤の方ひとりに、それだけの女がおらねばならぬのか？」
「わし等にはよくわかりませんがね、御老女の萩尾さま、お中老の芳乃さま、それから表使い、お祐筆、お側女中、お次、お三、お末……、大勢いますよ」
江戸城の大奥でも、大名の奥向きでも、三字名のお女中と、お の字のお女中とに別れていた。
この切り髪屋敷にいる萩尾、芳乃などは、読んで仮名三文字になる。――はぎお……、よしの…。或は、江島、尾上……などと言うのが三字名のお女中で、お役付き――つまり、高級女中である。
お の字名とは、――およの……、おまき……、おむら……などで、これは大体お次までの中級女中。お三以下のものは、――はつ、たま……などと仮名二字であった。
老女、中老、表使い、祐筆は、女中達を指揮して、奥向きの御用をすすめるもの……。お側女中は、主人と同じ座敷にいるもの、お次ぎは次の間詰め、お三は三の間詰めの女中のことである。お末に至っては、主人にはもとより、老女や中老にさえ、姿を見せぬよう気を配らねばならなかった。
ところで……。
三九郎が、ちょいと城之介の袖を引いてささやいた。
「――萩尾と言う老女……。仇っぽくて、いい女だなア……。幾つだろう？」

「左様……。天神……と言うところでしょう」
「うん……、あたしもその見当と見た。うめエさかりだなア」
——天神とは、色町の隠語で二十五と言うことだ……。天神さまの縁日が二十五日、それから来ている。〝まいり〟が十三で、〝満月〟が十五日と言うたぐいだ。十三詣り、十五夜から来ている。
「——ちょいとした固太りでさ。あの唇は甘いぜ」
「そうでしょうか？」
「はばかりながら、由良三九郎だ。睨んだ目に狂いはねエ。女にかけては見通しだ。あの女、下ッ腹の境に横ジワなんか入っちゃアいねエよ。うン、いい腹だ」
とたんに、城之介が、ピリッと、眉を動かした。——うしろからついて来る金春新道の正吉が、
——フン……と、せせら笑ったような気がしたのだ。
確かに、いまの三九郎の言葉は、これから死骸をあらためようと言う同心としては、感心出来なかった。
しかし、御用聞きと言えば、同心から名札を貰って、働かせて頂いているのだ。
——糞ッ！　小ざかしい野郎だ……。
城之介はそう考えるのと同時に、あの野郎、なかなかのやりてかもしれぬ。うかうかしてると、同心のわれわれが足もとを掬ッぱらわれるかもしれないぞ……と、そんなことも考えたのだった。

三

小間物屋の彦次郎の死骸は、切り髪屋敷のはずれに、ムシロをかぶせてあった。

「――おう……」
三九郎が、顎をしゃくると、門番が、おそるおそるムシロを取り除けた。
「――おやッ！」
三九郎と城之介が、同時に、驚きの声をあげた。
「――あ！　こ、これだ……」
正吉が、ギョッとしたように、よろよろッと前へ出た。
「旦那方！　〝紅梅〟の内儀が夢で見たのは、これと同じ姿なんですぜ！」
そう言って正吉が指さした彦次郎の死骸は、髪も着物も、グッショリ、水に濡れていたのだ。
「――この死骸を見つけたなア誰だ？」
三九郎が、門番にたずねた。
「あたしでございますよ。けさ早く、お庭の掃除をしておりますと、あしこに……」
門番が、二間ばかり離れたところを流れている小川を指さした。
「あの水の中に、うつぶせになって……」
「どちらへ流れているのだい？　あの水は？」
こん度は、城之介がたずねた。
「竪川から引き水してあるんですよ。そして、横十間川へ流れ込んでおりますんで……」
「水門があるのかい？」
「ございますが、もう何年も開けッ放しなんです」
「昨日、彦次郎は御用うかがいに来たそうだな？」
「はい……。一時頃に来て、四時ちょいと前に帰って行きましたよ」

「夜になって、もう一度やって来たろ？」
「飛んでもない！　他のお屋敷と違って、ここは女ばかりの切り髪屋敷でございますからね、見附け御門といっしょに、表を閉めてしまいますよ」
江戸の三十六見附の門は、正六時に閉門することになっていたのだ。
「それからは、近くのお下屋敷からお徒歩の方々がみえて、表廻りをお見廻りになるんです。オス犬だって、入れるものではございませんよ」
すると、また耳ざわりな声が、城之介に聞こえた。——うしろにいる正吉が、再び、クスリッと笑ったのだ。
「正吉、言いてエことがあったら、言ってみな」
「ヘエ……。その爺イさんの言葉があまり馬鹿々々しいもんですから……。オス犬どころか、現に小間物屋彦次郎ッて男がこの屋敷へ忍び込んでるじゃありませんか」
その言葉に、三九郎が、もっともだ……と言うように、うなずいた。
「城之介……、この親爺の話はもうよかろう。藤の方か、萩尾どのの話を聞こうじゃねエか」
「その前に、もうひと言……」
城之介は、門番へ近づくと、しなびた耳へささやいた——
「死骸の着物に、見覚えはあるかい？」
「いいえ……。昼間来たときのと違いますよ」
「それだけだ。有難うよ……」
それから、城之介は、死骸の顎を、ちょいと持ち上げた。——その頸に、細い紐で、ギュッと絞めあげた跡が、紫色になって、はっきり残っていた。

「御苦労でありましたな……」

建物の方へ戻って行くと、老女の萩尾が、かいどりの褄をとって、近づいて来た。

「お方さまが、会いたいと申されています」

「お会いしましょう……」

下顎を引きつけて、もっともらしく答える三九郎の様子に、城之介は腹の中で笑った。

――駄目ですよ、由良さん……。いくらシャッチョコ張っても、鼻の下が長ンがく伸びてまさア……、そう言いたかったのだ。

藤の方は、ただひとりで、築山の蔭のあずま家で待っていた。

――なる程！　切り髪にするのは惜しい……、城之介は、そう思った。

萩尾も美しいが、藤の方は、一段とあでやかだった。――髪を切り下げ、目立たぬ薄化粧をしているのだが、それがまたすがすがしい色気を漂わせていた。

萩尾が、男三人を、藤の方へ引きあわせた。藤の方は、三九郎と城之介には、ゆっくりうなずき返したが、正吉には、見むきもしなかった。

「――小間物屋彦次郎が、この屋敷内で死んでいたとのこと、上屋敷への聞こえもあり、迷惑しております。一日も早よう、下手人を捕え、ことのなり行きを明らかにしてほしい……。わたしで答えられることなれば、どのようなことでも話しましょう」

「はア……、どうだな、城之介？」

三九郎は、藤の方にみとれて、何をたずねてよいのやら、戸まどった様子だった。

「一ツ、おたずねしますが、小間物屋〝紅梅〟は、長年のお出入りでしょうか？」

「わたしが、上屋敷の奥へ御奉公に上がる前からです。その他に、なにか？」

「出来ますれば、当お屋敷のお女中方ひとり残らず、昨夜、着ていられた着物と帯をまとめて、お貸し願いたいのですが……」
「ひとり残らずですか？」
「そうです……。お方さまも、萩尾どのも」
「それを、どうなさるのです？」
「下手人を召捕る手掛りが摑めるかもしれません」
「下手人は、女だと言われるのですか?!」
すると、正吉が、クスリッと笑った。
——これで、三度目だった。
「あッし等が口を出すのはどうかと思いますが、さすがはお南の旦那、女中方の着物とはよいところへお目をつけられました。それを調べりゃア、いろんなことがわかるでしょうよ」
「そうでしょうか……」
藤の方が、キッと、睨むように、正吉へ視線を向けた。
「そうですとも……。あッしゃ、こうやって、お方さまをひと目見た、それだけで、いろんなことがわかりますからねエ」
「どんなことが？」
「一ツ二ツ言ってみましょうか……。お方さまは、手踊りがお上手ですよ。それから、十くらいの頃に住んでおいでだった家のそばには、大きな柿の木があった……。もっと言いましょうかね。お方さまは昨夜、まんじりともなさらなかった——」
「もうよいッ！」

藤の方は、スックと立ち上がると、城之介へ顔を向けた——
「女達の昨夜の衣裳は揃えます。ただし、外へ持ち出しては困る。屋敷の中で調べて貰いましょう……」

四

切り髪屋敷の中を、あちらこちらと歩き廻っていた由良三九郎は、城之介がいる書院に入ると、素ッ頓狂な声で叫んだ——
「ウヘーッ、まるで古着屋……。いや、芝居小屋の衣裳部屋みてエだなア！」
なにしろこの座敷には、切り髪屋敷にいる女——七十何人の衣裳が、ズラリと並べられていたのだ。
着物は、うちかけから、長襦袢、下着まで……。それに帯が添えられている。三九郎が古着屋を芝居の衣裳部屋と言いなおしたのも道理、正しくお花畑のように色とりどりだった。
その華やかな色どりの中で、城之介はムスッとした表情で腕を組んでいた。
「どうしたい？　気にいらねエ……ッて顔つきだな」
「その通りですよ。昨夜、〝紅梅〟の彦次郎はこの屋敷へ忍び込んだ。仮りにも、なき本多下総守さま御寵愛の藤の方が行ない澄ましている切り髪屋敷ですぜ。伊達や酔狂で忍び込んだわけじゃないでしょう」
「アタの棒だ……。外廻りを見廻ってるお徒歩衆にめッかったら命がねエ。それを覚悟で忍び込むなア、命がけで惚れ込んだ女に会うためさ」

「どこで女と会うでしょう?」
「家の中は、人目が多いよ。そこへ行くと、庭は広いやね。夜の夜中だ。庭をうろつく女もいねエだろう。まず、誰にもめッからねエ。それに、月もおぼろだ。寒いって時候じゃねエ」
「で……、庭で女に会った。どうするでしょう?」
「野暮なことを言うなよ。くでエようだが命がけで会った男と女だ。きまってらアね。手々と手と、手と足と、からみからんで抱きしめて……と言うことにならアね」
「従って、女の衣裳に思いがけないシワが出来たり、萠え出た草のシミがついたり、もしかすると、ほころびくらい出来てるかもしれないでしょう?」
「なる程……」
三九郎は、やっと城之介の考えが呑みこめたように、女達の衣裳の山を見廻した。
「ねエのかい? お目当てのシワやシミが」
「ないんですよ」
「隠して、他の着物を出した女がいるんじゃねエのかな?」
「そうは考えません。こう言った女ばかりの世界はうるさいもの……。ヘタな隠し立てをすると、すぐ噂になりますよ」
「そう言うわけだろうな」
三九郎は、ちょいと考えたが、すぐ口を開いた——
「こう言うなアどうだい? ——彦次郎は、昼間、この屋敷へ来ている。そして、帰ったと見せかけて、どっかの部屋に隠れていた」
「しかし——」

「まア聞きなよ。みんなの寝静まるのを待って、女とあいびきをする。女は、寝床から脱け出したんだから当然寝間着だ」
「だから、着物や帯にはシワもシミもつかないッて仰有りたいんですか？」
「文句がありそうだなア」
「門番の話を思い出して貰いたいですなア。——死骸の着物にゃ見覚えがない。昼間来たときの着物とは違っていた……」
「つまり、一度家へ戻って着替えて来てるッてわけか……」
そう言ってから、三九郎が、ハッと顔をあげた——
「城之介……、御用聞きの金春の正吉はこう言ったぜ、——〝紅梅〟の内儀が来て、彦次郎が切り髪屋敷へ行くと言って出かけたッ切り戻って来ないから調べてくれ……ッて泣きつかれた……とね」
「ええ……、どっかに嘘があるようですな」
「どっかに？」
「門番か、〝紅梅〟の内儀か、金春の正吉か、誰かが嘘をついてるんですよ。だから、つじつまの合わないところが出来てくる……。それにしても……」
城之介は、三九郎を見詰めた。
「正吉ッて男をどう思います？」
「まさか、御用聞きをかたってるわけじゃあるめエ」
「いや……。御用聞きですよ。やつのもの腰、目つき、かたりじゃああはいきますまい。それに、どうです、あのカンは……」
三九郎が、大きくうなずき返した。

「実はあたしもビックリした。藤の方を見ただけで、——手踊りがうめエ。十くらいの頃住んでた家のそばに、大きな柿の木があった。昨夜はまんじりとも出来なかった……なんてね。どうしてわかるんだろう?」

「それが、あたしにもわからないんですよ」

「しかも、それがズバリ的中していたらしい。藤の方が、ギョッとしていた」

その時、出し抜けに、襖の外で、低い女の叫び声が聞こえた。それに続いて、サラリッと襖をあけて、噂をしていた御用聞きの正吉が、お末らしい若い女の手をねじ上げて入って来た。

「——おいッ! 手荒なことはよせッ」

三九郎が、あわてて立ち上がった。

「ここは本多家の屋敷うちだ。たとえ人殺しの下手人をみつけても、自ままに召捕ることは出来ねエんだぞッ」

「ヘエ……、わかってます。ただね、この女が逃げようとしたもンですから……」

「その女が、何をしたと言うんだ?」

「旦那方のお話を、盗み聞いてやがったんで……」

「違いますッ!」

女が、泣き出しそうな声で叫んだ。

「ただ、お廊下を通りかかっただけです。それを突然、このおひとが——」

「そうは言わさねエ。旦那、あたしゃアね、千秋の旦那の衣裳調べはいいお考えだと思いましたよ。胸におぼえのある女は、きっと衣裳調べを気にしている。気になるから、必ず書院へ様子をうかがいに近づくに違いない……、そう考えて、見張ってると、この女がこッそり……」

「いいえ……、わたしはお老女さまの御用で、通りかかっただけなのですッ」
そう言う女を、城之介が、ジッと見詰めた。
「正吉……、お女中の手を離せよ……」
「だ、だけど、旦那ッ……」
「藤の方をひと目見て、ズバリズバリと十年前までのことを言い当てるお前エに、そのお女中のことがわからねエ筈はあるめエ」
「そ、それは……」
正吉は、渋々女の手を離した。
「お女中の名は？」
城之介が、優しくたずねた。
「――ゆき……と申します」
「萩尾（はぎお）どのの部屋子か？」
「はい……。二年前から、お老女さまに御奉公をいたしております」
「お前さんの着物も、ここへ持ちこんであるんだろうね？」
「はい……、ございます」
そう答える女の言葉には、少しのよどみもなかった。
「行っていいぜ」
「はい……、お手数をおかけいたしました」
若い女は、両手をついて、丁寧におじぎをしてから出て行ったが、正吉は唇を歪めて、女のうしろ姿を睨んでいた。

「不服らしいな、正吉……」

三九郎が、薄笑いを浮かべて言った。

「どう致しまして……。旦那方のなさることに、不服などあろう筈はありませんよ」

「しかし……、なぜ、あの女を手荒く扱ったんだ？　まるで、下手人扱いだぜ」

「ですけどねエ旦那……。あの女は、確かに旦那方のお話を盗み聞いていたんですよ。と言うことは、彦次郎の相手は、いまの女かもしれねエんですよ」

「いや……、それは違うな」

「え?!」

正吉が、驚いて、三九郎を見た。それに対して三九郎が、いい気持そうに言った——

「あたしゃ、あの女をひと目見て、いろんなことがわかったよ。あの女はまだ娘だ。男を知っちゃアいねエよ。尻のタナが落ちていねエものなア……。あの娘を彦次郎の情婦（いろ）だなんて、お前エらしくねエぜ、正吉……」

五

「——御苦労だったな……。町方の吟味と違って、シンが疲れただろう。礼を言うぜ」

同心部屋へ戻って、いままでのことを報告した城之介へ、同心筆頭の早水茂太夫が軽く頭を下げた。

「で……、彦次郎の相手の女、並びに彦次郎殺しの下手人のあたりは？」

「いまのところ、手掛りがありません。そこで、こん度は〝紅梅〟の方から洗ってみようと考えてい

ます」
「なる程……。で、三九郎は？」
「切り髪屋敷へ残ってますよ。由良さんは、あの屋敷がすッかり気に入ったようです」
「言わば、女護ガ島だからなア……、悦に入った三九郎の様子が目に見えるようだよ」
城之介は、ふッと古い川柳を思い出した。——二千九百九十九空家（からや）……。〝後宮の美女三千〟と言う言葉から生まれたバレ句だ。三千の女官の中から召されるのはただひとり。残りの二千九百九十九人は空しく一夜を明かすと言う意味だが、切り髪屋敷は全部空き家と言うことになる。
「——あたしは、〝紅梅〟を当ってみます。由良さんは、こちらに残ってくれませんか……」
城之介がそう言うと、三九郎は大喜びだった。
「——まかしときな。彦次郎殺しの下手人とまではいかなくても、やつとチチくり合った女は必ずさがし当ててみせるからさ……」
三九郎は大した御機嫌で、そう言ったものだ。
「——その女が、まさか藤の方……ではあるまいな……」
茂太夫は、心配そうだった。
「万一、そうであった場合、どうします？」
「いやいやそんなことは考えられんよ。なにしろ、女護ガ島の切り髪屋敷へ、町方同心を呼んだのが藤の方だからな……。藤の方のことは気にせず、思いッ切り洗いあげてくれていいぜ」
城之介は、茂太夫からそう言われて、小者の勘弁の勘八を連れて南町奉行所を出た。
京橋の〝紅梅〟では、普段のとおり商売をしていたが、店で働いている者達は、一様に、大きな声もたてず、暗い顔を揃えていた。

「――はい……、いやな夢を見ました。彦次郎がグッショリ水をかぶって――」
「また、それを言う！」
城之介の前に並んだ〝紅梅〟の主人銀右衛門は、女房のお浅の言葉をたしなめた。
「お前が、下らぬ夢の話などして廻るものだから、店の者まで、通夜のような顔をすることになる。小間物屋の店は、派手で、明るくなければならないのに――」
「だって、あなた……。あたしは本当に彦次郎が……」
「下らぬことを言うものではない。彦次郎とて若い男だ。たまには家をあけることもあろう」
「いいえ……。彦次郎に限って……。第一、あなたと違ってあたしが平気な顔をしていては、義理の母はああも冷たいものかと、ひとが陰口を申します」
夫婦のいさかいを黙って聞いていた城之介が、ふっと、顔をあげた。
銀右衛門は五十二、三……。お浅は三十六、七……。かなり年の開いた夫婦と思っていたが、果してお浅は後添えだったのだ。
「――こどもは幾人かね？」
「四人おります。彦次郎の次がお幸、それからお光、末が又三郎と申します」
そう言う銀右衛門に、城之介が重ねてたずねた――
「年は？」
「お幸が十八、お光が十五、又三郎は明けて五歳になりました」
「いまの話じゃ、お内儀と彦次郎は継しい仲のようだが……」
お浅が、はっきりうなずき返した。
「あたしは後妻でございますよ。立花町で左褄をとっていました。それから、長らく〝紅梅〟の主人

の囲い者暮らしが続き、前のおかみさんが亡くなったので、三年前にやっと本妻になおされました」
「では、四人の子は、いずれも義理の仲か？」
「いいえ。又三郎は、わたしが産みました。あの子があったので、親類方も、あたしが本宅へ入ることを承知なすったのですよ。でなければ、あたしは一生日かげものだったでしょうねエ」
お浅のはッきりした言葉に、銀右衛門が、いやアな顔をした。
「でも、あたしは、彦次郎や娘達と、又三郎にわけ隔てはいたしませんよ。それどころか、前のおかみさんの命日は決して忘れずお供養もしていますし、三人の子には、一歩も二歩もゆずっている積りでおります……。こんどの彦次郎のことだって、主人よりあたしの方が心配してるくらいなんです」
「彦次郎は、いつ頃出かけたんだい？」
すると、銀右衛門が、ちょいと首を傾げた——
「暗くなってからでした」
「おや！　彦次郎は、一度戻って来たのですか？」
城之介より先に、お浅が慥いてたずね返した。
「うン……。八時近くだったかな」
「まア……、あたしはちっとも知りませんでしたよ……」
城之介は、ゆっくり立ち上がると、静かな声でたずねた——
「彦次郎にゃ、縁談はなかったのかい？」
「幾度もございましたが、まだ早いと言って、どうしても承知いたしませんので……」
銀右衛門が困ったような顔で答えた。
「それにゃ、何かわけがあったのじゃないのかな？」

「わたくしには、心当りがございませんが……」
そう言う銀右衛門に続いて、お浅も首を横に振った。
「そうかい……。夕方になったら、切り髪屋敷の裏門から、ソッと、彦次郎の死骸を引き取りに行くんだな」
「死骸?!」
銀右衛門が、ポカンとしたように、城之介を見上げた。
「気の毒だが、彦次郎は人手にかかって死んだよ」
とたんに、ワッと、喚き悲しむ女の声が聞こえて来た。彦次郎の妹のお幸とお光が、座敷の外で立ち聞いていたのだ。

六

城之介は、その足で日本橋の呉服屋三河屋へ廻った。——藤の方は、三河屋の養女として、本多家へ奉公にあがったのだ。
「へエー、〝紅梅〟の息子が……!」
三河屋の芳兵衛は、驚いて生唾を呑みこんだ。
「では、藤の方さまはお困りでしょう」
「そうなんだ。あたし達は、藤の方に頼まれて、筋違いの武家屋敷内の出来事を吟味してるんだが、何か心当りはないかい?」
「さア……、養女と申しましても、言わば仮親。実は、本多さまの御先代が綾瀬川まで遠乗りを遊ば

した折りに、お目に止まった村娘が藤の方さまなので……」
「それを、本多家の家老か留守居役に頼まれて、養女分にしたッてわけか？」
「ヘエ、なかなかうンと言わないのを、幾度も通って、やっと承知させました。母ひとり、娘ひとりでしてね」
「綾瀬川と言えば、向島……、白鬚の先だな」
「いや、もう……、二十軒足らずのちッぽけな貧乏村で……。母親と言うひとは、うちの長屋へ引きとって世話をしましたが、藤の方さまが奉公に出て一年目に亡くなりましたよ」
「じゃ、村にゃ、身寄りはないのか？」
「あるかもしれませんが、藤の方さまが本多家へ上がっていることは誰も知らない筈です。親子は、御奉公のことは、内証にして村を出ましたから」
「と言うと、何か――」
――わけがあるのか……と、城之介がたずねかけたとき、芳兵衛が、ポンと、膝を叩いた。
「あ……、これは奇妙な廻り合わせですよ。〝紅梅〟のいまの内儀は、やっぱり同じ村の出の筈ですよ」
「お浅が？」
「あの女は、もと浅吉と名乗って、町芸者でした」
「そうだってな。自分で言ってたよ」
「申し上げたように、貧乏村ですが、芸ごとだけはさかんな土地でしてな、芸は身を助くッてわけで、芸者になったんです」
「――藤の方とお浅が同じ村かア……」

城之介は、ジッと考え込んだが、何を思ったか、急に立ち上がった。
「――よいことを聞かせてくれた。どうやら、彦次郎殺しの筋道がわかって来たぜ……」
それから三十分ほどして、城之介が切り髪屋敷へ駕籠を飛ばして戻ると、寺院の廊下に腰を降ろした三九郎が、ゲンナリしたような顔で顎を撫でていた。
「いやはやどうも、われながら呆れたよ」
そう言ってから、三九郎は声をひそめた。
「実は、吟味のためッて口実でね、屋敷の女達を次々に呼んで、調べてみた。最初のうちは、どの女とも結構面白く話をしていたがね、十五、六人目から、妙に気分が理に落ちて、代り合って女が現われても、面白くもおかしくもなくなった。つまり食傷ッてやつさ」
「老女の萩尾どのも調べましたか？」
「いや……、お三、お次ッてところを調べてたんだ。これから、段々上の女を呼ぶ積りだったが、いやンなっちゃった」
その時、金春の正吉が、庭の方から愛想笑いを浮かべながら近づいて来た。
「――千秋の旦那、お帰りなさいまし。なにか、よい手掛りがございましたか？」
「お前エのように、いいカンを持っていねエからなア、何も摑めねエよ」
「御冗談で……。あっしなんか、一生懸命御奉公してるんで、ちょいと読みが深くなっただけで、カンなんてものじゃありませんよ」
「じゃ、その〝読み〟とやらを、後学のため聞かして貰おうじゃねエか。藤の方が、手踊りが上手……とは、どこから読んだ？」
「立ち居振舞いが、ピタリと型へはまってるんでねエ……。それに、あの手の指の逆らせようは、か

なり踊りに年期が入ってると読みましたんで……」
「じゃ、十くらいの頃の家にゃ、大きな柿の木があった……と言うのは？」
「藤の方のこめかみの辺りに、かすかに傷の痕が残っています。化粧でうまく隠していますが、女があんなだいじなところへ傷をするのは、子供の頃と考えました」
「大きな柿の木ッてわけは？」
「木登りをして、おッこッたときの傷と考えたんです。女の子が木登りをするのは田舎に違いねエ。そして、登った木は、折れやすい柿の木だろう……ッてわけなんで」
三九郎が、感心したように軽く唸った。
「じゃ、あたしも聞くぜ。——昨夜まんじりともしなかった……てエのは？」
「目ですよ。目もとが赤く、顔の色艶もよくありません。だから——」
「嘘ウつきやがれッ！」
突然、城之介が、突き離すように言った。
「旦那ッ……」
「うるせッ！　手前エは〝紅梅〟のお浅から、藤の方が綾瀬川の貧乏村の娘ッてことや、なにやかやを聞かされたんだ。ふン、お浅とは、いつからそんな深い仲なんだい？　——安芸者二百もやると転ぶなり……。お浅は立花町の不見転だったッてなア」
正吉が、まッ蒼になって手を振った——
「旦那ッ！　あッしゃ——」
「あわてンなッ！　彦次郎は一度家へ戻り、着替えをして八時頃家を出ている。それをお浅は知らなかった。だからお前も、——彦次郎が切り髪屋敷へ行ったまま戻らねエ……なんて言ったんだ」

城之介は、ちょいと笑って言葉を続けた——

「もう一ツえれエことをお前は喋ってるぜ。——お浅は、水に濡れた彦次郎の姿を夢で見た……ッてね。そんな夢は見ちゃアいねエよ。継母だアね。家へ戻っても、挨拶もしねエでまた出かけるような冷てエ仲だ。彦次郎が夢枕に立つ筈はねエ。しかも、夢を見たと言う……。どうしたわけだ？え？」

「あ、あっしが、知る筈はないでしょう」

「ところが知ってンだよ、お前エは……。彦次郎が水の中で死んでることを、お前エがお浅に教えたのさ」

「そ、そんなッことは——」

「ねエとは言わさねエ。お前エは誰よりも早く、彦次郎の死んだことを知っていた。つまり、彦次郎殺しの下手人はお前エさ」

正吉が、ジリッ、ジリッと、あとへさがった。そして、出し抜けに、クルリッと体を廻すと、ダッ……と逃げ出した。

が……ものの、三間とは走れなかった。——ギャッ……と叫ぶと、つンのめるように、ぶッ倒れてしまった。

「——わたくしが、成敗しました……」

その声に振返った城之介と三九郎は、背ざめた老女萩尾の姿を見た。

「手裏剣を打ちました。彦次郎の仇を打ったのです……」

「——彦次郎を可愛がったのは老女の萩尾、彦次郎を殺したのは御用聞きの正吉でしたよ」

三九郎が、ソッと、茂太夫にささやいた。
「藤の方にゃ、人に知られたくない隠しごとがある。お袋ってのが、若い頃、夜道で誰だかわからない男に犯されてみごもったのが藤の方なんです。本多家御当主のお腹さまが、そんな事情で産まれたとわかっちゃ一大事でしょ」
「その秘めごとを同村のお浅は知っており、隠し男の正吉に話したッてわけか？」
「そうなんですよ。それを種に、昨夜藤の方をゆすりに切り髪屋敷へ忍びこみ、帰りの庭で、萩尾と楽しいひとときを過ごして帰る彦次郎とパッタリ顔を合わした。そこで――」
「悪事のバレるのを恐れて、グイッと絞めたのか……」
「話を聞いて、お浅は却って喜んだ。〝紅梅〟のあととりが、自分の産んだ又三郎になる……とね」
城之介が、静かに口を開いた――
「悪い野郎ですよ、正吉は……。藤の方の口から自分のことがバレるといけないので、図々しくも、あたし達といっしょに乗り込み、踊りがうまいの、柿の木があるのと言って、藤の方をおどかしたんです……。それにしても、萩尾ッて女、もしかすると、自害するかもしれませんなア……」

色茶屋騒動

一

「――どうだい、城之介。こん夜あたり、ちょいと風流を楽しもうじゃねエか」

四時近くだった。南町奉行所の定町廻り同心部屋で、その日の御用日記をつけている千秋城之介に、由良三九郎がニンマリ笑いかけた。

「結構ですな……。で、どんな風流です？」

「永代寺のお庭拝見などはどうだい？」

大栄山永代寺金剛神院は、富岡八幡宮――つまり深川の八幡さまの別当だった。往年三月二十一日から四月十五日まで、寺の庭を一般に開放した。林泉の粋をつくした名園であったので、庶民は着飾ってお庭拝見にやって来たが、これを〝お山開き〟と言った。

「あ……、うっかりしてました。もうそんな時候になっていたのですか」

「目の前に四月が来ている。あッ……と言うまに、初ガツオッてことにならアね。いまは、バカが食い頃だろうよ」

バカとは、バカ貝のことだ。この貝のむき身は深川名物の一ツである。

「フフフ……、お目当ては、お庭拝見ですか？　それとも、――山開き梅も尾花も面白し……の方ですか？」
「ハハハ……、深川でむき身にされる馬鹿野郎……になってみてエよ」
それから、しばらくして、三九郎と城之介は、若手の日下兵馬を誘って南町奉行所を出た。――奉行所の勤めは四時までである。
「一ツうかがいますが……」
城之介へ、兵馬が几帳面に頭を下げた。
「先刻、――山開き梅も……なんとかと仰有いましたが――」
「――梅も尾花も面白し……か？」
「わたしには、一向に意味がとれません」
すると、三九郎がクスクスッと含み笑いをした。
「兵馬、お前さん、町方の定町廻りだぜ」
「は……、その積りです」
「下情にうとくッちゃ、定町廻りは勤まらねエ。たとえば、深川にゃ、どんな岡場所があって、芸者が幾人、女郎ン棒が幾人いる……なんてね」
「せいぜい記憶するように努めます」
「記憶じゃだめだな。骨のズイまでしみ込んでなきゃ。それには、芸者と遊び、女郎を抱くことだ」
「は……。しかし……、それは……」
城之介が、気の毒そうに、兵馬の肩を叩いた。
「まアまアいいやね。さっきの川柳だがね、深川八幡や永代寺の門前仲町は、深川の色町でも随一

だ」

「それは、存じています」

「その仲町にゃ、茶屋が三軒、子供屋が八軒ある。茶屋の屋号が、梅本、尾花屋、山本屋だ」

「あー、わかりました。梅も尾花も面白し……とは、梅本や尾花屋が面白いと言うことですか？」

「わかっちゃいないね、まだ……。この川柳の意味は、——山開き、お庭拝見にかこつけて、梅本や尾花屋でコッソリ女郎買いをするなア、たまらねエな……ッてことさ」

三人が、永代橋を渡るころ、そろそろ夕刻が、大川の川面を忍び寄っていた。

「いまから、永代寺の庭を見るなア、ちょいと遅過ぎやしねエか……」

そう言う三九郎に、城之介が、クスリッと笑った。

「多分、そう仰有るだろうと思いました。では、ボチボチむき身にされましょうか」

すると、兵馬が、ポンと膝を叩いた。

「あ……、それで思い出しました。先刻——」

「わかったよ……」

城之介が、やれやれと言うように溜め息をついた。

「——深川でむき身にされる馬鹿野郎……だろ？」

「はア……」

「馬鹿野郎は、バカ貝にひッかけた洒落さ。深川で遊びほうけて、バカ貝みたいに身ぐるみはがれる頓ン馬野郎もいる……ッてわけさ」

すると、三九郎が、トントンと兵馬の肩を叩いた。

「それがわからねえようじゃ、——中裏を夜具とすれ合うむき身売り……なんて、てんでわかンねエ

だろう」

「は……、わかりません」

「中裏ッてなア、門前仲町の裏のことさ。その細い道で、茶屋へ呼ばれた女郎の夜具を大風呂敷でしょって行く子供屋の若い衆と、商いを終えて帰るバカ貝売りとがすれ違っている……。つまり、深川色町の夕方の風景なのさ」

深川の色町は、二タ通りになっていた。門前仲町や新地、やぐら下は一流で、古石場や常盤町などは二流……。一流地では、客が遊ぶ茶屋と、相手をする芸者や女郎を抱えた子供屋が別になっており、二流地では、女を抱えている家で客が遊ぶことになっていた。

客に呼ばれて茶屋入りをする子供屋の女のことを〝呼び出し〟、抱え主の家で客の相手をする二流地の女は〝伏せ玉〟と呼ばれていたのだ。

三九郎は、城之介と兵馬を仲町の〝梅本〟へ連れて行った。

茶屋にとっては、お南の旦那方はおッかないお客だ。当然、裾を引いた女将が、犬ッころみたいに飛び出して来て、下へもおかないもてなし……と言うことになる。

「――いやいや、お庭拝見の帰りだ。そう心配してくれるな……」

なんて、三九郎は、いい気持らしい。

勿論、名物のバカ貝のむき身が出て、まず一杯……。やがて、芸者が三人、派手な声で挨拶をして入って来た。

「――あれ、お町の旦那方ですね？」

「そうよ。ワカルコイキココトキスカルキトコ、ヒカツケケケコルクゾ……」

三九郎が、早速女をからかった。

「おや、上総木綿で、どうしようのう……」

これが、深川の色町言葉だった。

三九郎が喋った怪しげな言葉は、俗に〝唐言〟と言われ、言葉の間にカ行の五音を挟んだもので、女達が客にさとられぬように話をするのに用いられた。

つまり、三九郎は、――悪いことをすると、ひッくくるぞ……と言う言葉に、カ行の音を挟んだわけである。

それに対して、女が、――上総木綿で、どうしようのう……と答えた。

上総木綿とは、深川女の隠語で、――情のない男……と言う意味である。この種の隠語に、〝本所の穴蔵〟――しめッぽい男、〝やぐら太鼓〟――上(飢)で鳴る……と言う意味で空腹などがある。また、――どうしようのう……は、粋とハリを売りものにした辰巳女の歯切れのよい特別な響きで、男の心をくすぐった。――けしからねエ……、ああ、らッちもねエ……、ほんにか……、ついぞねエ……、など、この類である。

三九郎や城之介は、ポンポン飛び出す女達の言葉に、馴れッこだったが、兵馬は、まるで異国の言葉でも聞くかのように、いちいち首を傾げた。

「――どうした、兵馬?」

三九郎が、おかしそうにたずねた。

「はア……。この女達の話が、とんとわかりませんので……」

「ハハハ……、そう言うときには、――さてさてこれはよわり(尾張)大根……、とでも洒落て貰いてエ」

「それは、大変むつかしいことですなア」

兵馬のもっともらしい顔に、女達も吹き出した。

吉原、品川、それに深川は、江戸の三大遊里だ。中でも深川は、ことごとに吉原と対抗して、辰巳風の気ッぷをうみ出していた。

「――深川者のものの考え方は、男も女も、意地ッ張りだってことを忘れてはいないな。よきも悪しきも、意地をつらぬく、それがやぐら下の気ッぷなんだ……」

城之介は兵馬にそう言ったが、その時、城之介の小者勘弁の勘八が、飛び込んで来た。

「――旦那方！　すぐ近くの妙心院の境内で、大年増の尼坊主が絞め殺されてますぜッ……」

二

「――この尼は？」

三九郎の言葉に、本所方の同心が答えた――

「当妙心院の院主幽心尼ですよ」

本所・深川は、同じ江戸でも定町廻りの受持外で、本所方と呼ばれる町奉行所の同心が受持っていた。

しかし、本所方本来の仕事は、川と橋の管理で、人殺しや強盗騒ぎがあると、定町廻りの出役を求めた。

こん夜も、本所方から奉行所へしらせ、定町廻り筆頭の早水茂太夫から命ぜられた勘八が、仲町の茶屋をさがし廻って城之介達を見つけ出した……と言うわけだった。

「――お寺社の方はどうなのです？」

城之介が、本所方にたずねた。

殺されたのが尼で、場所が寺の境内となると、これまた町奉行所の定町廻りは手を出せない縄張り違いなのだ。

「全て、おまかせする……と申して、寺社方同心は引きあげて行きましたよ」

城之介は、やれやれと言うように兵馬と顔を見合わせた。

寺社関係の出来事は、厄介だった。調べの都合で、僧侶や神職を呼ばねばならぬ場合、いちいち寺社奉行へ連絡をとらねばならなかったからである。

「——おう、勘の字どのよ、仏さまを裸にしてみな……」

城之介や兵馬の気持を知ってか知らずか、三九郎は、ひどく御機嫌で、勘八にそう命じた。

「——へエー！　こいつア大した体だ……」

三九郎は、裸にされた幽心尼の体を、持っていた提灯で照らして、首を振った。

「こう、見や、城之介……。三峰全て豊かなりだ。惜しいねエ、全く……」

三峰とは、女体の急所三ツのことである。——唇と尻を上峰、乳房を中峰、下ッ腹のふくらみを下峰と言うのだ。

幽心尼は、年の頃四十二、三と見られた。だが、苦労を知らぬ尼暮らしのためか、全てがふくよかに若々しく、三十前とさえ考えられる水々しさであった。

ただ、頸のまわりに、グイッと食いこんだ赤い細紐が、無残にも、この女盛りの尼の命を奪ってしまったのだ。

「——こいつア女の腰紐だね……」

三九郎が、尼の頸から細紐をほどいて、城之介と兵馬に示した。

「深川辺りじゃ、ありふれたものですなア」
「そう言うわけだ。芸者や女郎、伏せ玉に仲居、女中達、どんな女も腰紐の五本や六本は持っていらアね。しかし、城之介。女の腰紐だからッて必ずしも――」
「わかっています。下手人は女と限りませんよ。いや、これだけ五体豊かな尼の頸を絞めるなア、女に出来る仕事じゃなさそうですなア」
「腰紐を使って、女と見せかけたか？」
「さア……。下手人は、そこまで考えてはいないかもしれませんよ。何気なく、手もとにあったこの紐を持って出た……、そこいらかもしれませんね」
その時、尼の白無垢を調べていた勘八が、ふッと、顔をあげた。
「旦那……、たもとに、こんなものが入ってましたぜ……」
勘八が差し出したのは、鳥ノ子紙をこまかく折りたたんだものであった。
――兵馬、灯りをたのむぜ……」
城之介は、兵馬が差し出した提灯の下で、鳥ノ子紙を拡げた。
「――ほう……、これは遺言状だ」
「え?!　尼は、殺されることを知ってたのかい？」
「いや……、新地の茶屋、大宝楼の主人、佐賀衛門の遺言状ですよ」
城之介といっしょに、三九郎、兵馬が頭をつき合わせて遺言状へ目を通したが、読み終ると、思わず顔を見合わせた。
文章は、七面倒な候文だったが、要は、――自分の死後、大宝楼の主人は、一子伝七ではなく、従弟の巳之助を以てする。女房のおなおも、伝七も、嫁に行った娘松代も、絶対に文句を言うな……。

なお、巳之助は、家忰をつぐに当って、おなお、伝七母子に五百両、娘の松代に千両、やってほしい……。そう言う文面だった。

それに、幽心尼が連書して、印形を捺してあった。

「――大宝楼と言えば、大店ですなア」

城之介が、かたわらにいる本所方同心を振返った。

「左様……。新地の茶屋は、百歩楼、船迎楼など大店がありますが、大宝楼にはかないますまい」

「財産は、どんなものでしょう？」

「さ……。現金のところはわかりませんが、あの広大な建物と品川沖を眺め渡すみごとな庭……。そこへ集められた日本全国から集めた珍石奇木の数々……。それだけでも、まず一万両や一万五千両の値打ちはあるでしょうな」

と……、三九郎が口を挟んだ。

「あたしゃ、噂を聞いたことがあるよ。大宝楼の佐賀衛門と言やア、骨トウ屋荒しだってね。内外古今の名画を、銭に糸目をつけず買い集めてるッてエじゃねエか」

本所方がうなずいた――

「わたしも見せられたことがあります。室町時代の名僧黙庵や、桃山期の狩野山楽などまで持っていましてな……。これなどは、価があって無いようなもの、好きなものなら、千両箱でも投げ出したくなるでしょう」

「するッてエと、土蔵に眠ってる小判やなにやかやで、まンず三万両は下らねエなア」

そう言う三九郎に、本所方が激しく首を横に振った。

「それよりも、まずなによりも、新地第一の茶屋です。夜毎に落す客の銭が大したものですよ」

「その佐賀衛門が、なぜ遺言状を書いたんだろう？」
「あー……、それはですな……」
本所方が、定町廻り同心三人を見廻した。
「佐賀衛門は、半年ほど前、卒中でひっくり返りましてな。それ以来半身不随で、寝たっきりなのですよ」
——わかった……と言うように、城之介がうなずいた。
「で……、あとあとのことが心配になり、この尼さんを呼んで、ソッと遺言状を書かせた。それを知った何者かが、これを狙って——」
「おっと、待った！」
三九郎が、手をあげて、城之介の言葉を押さえた。
「そいつア変だ。だったらなぜ下手人は、遺言状を持って行かなかったんだい？」
「持ってく積りだったが、なんかの事情で持って行けなかった。たとえば、人が近づいたとか、足音が聞こえたとか……」
「あたしゃ、この殺しに遺言状はかかわりはねエと思うね」
そう言って三九郎は、裸のまま横たえられている幽心尼の死骸を指さした。
「——たアれにも言いなさんなと数珠をおき……、わかるかい？」
「そう言って尼さまが男に抱かれた……と言うんですか？」
「尼の方から抱いたかもしれねエやな。なんしろ、こんな飛びッ切りの体だ」
「それで？」
「幽心尼をめぐる色恋の鞘あて……と、あたしゃ考げエるんだがね。いけねエかい？」

「いやいや……」

城之介が首を振った。

「いろんな見方をして、一ツ一ツ洗いあげてみましょう……。じゃ、幽心尼の行状の方は山良さんにお願いして、あたしは大宝楼をたずねてみますよ……」

三

「――妙心院さんがッ?!」

佐賀衛門は、幽心尼のことを妙心院と呼び、驚きの目で、枕許の城之介を見上げた。

三味線、太鼓で騒ぐ遊び客のさんざめきと、妓達の嬌声が、かすかに聞こえて来た。――佐賀衛門は、母屋からちょいと離れた小粋なつくりの離れ座敷に寝かされていたのだ。

城之介をここへ案内したのは、女房のおなおだった。

――はてな……。

城之介は、佐賀衛門を見ると、ちょいと首を傾げた。――佐賀衛門はとっくに五十を過ぎる年配だったが、おなおは三十六、七……。大きな茶屋の女将で、贅を尽した衣裳をまとい、派手な化粧をして、髪も艶やかに結いあげているので、ちょっと見には三十そこそこと見られた。

そのおなおは、城之介を離れ座敷へ案内すると、佐賀衛門の看病をしていた十五、六の若い女中にあとをまかせて、母屋へ戻って行ってしまった。

「――なにかと店の切り盛りをしなきゃアなりませんので……」

おなおはそう言って行ったのだが、夜が商売の茶店の女将としては、もっともなことだった。

「幽心尼は、きょう、ここへ来た筈だな？」
「は、はい……、わたくしが頼んで、来て頂きましたんで……」
いくらか語尾が乱れていたが、中気で倒れたにしては、わりにはっきりした言葉であった。
「お前エの遺言状てエのを、たもとに入れてたよ」
「あ……、実は、ごらんのようにわたくしは寝たッきりで、右手が動きません。遺言状を書こうにも、思うようにならないので、妙心院さんに来て頂いて、代筆をして貰いました」
「多分、そうだろうと思った。幽心尼がここから出て行ったのは、幾刻だったかね？」
「左様でございますな……、かれこれ、八時過ぎでしたでしょか」
城之介が、ふッと、佐賀衛門を見詰めた。
「間違いはねエだろうな？」
「体はききませんが、頭はハッキリしております」
城之介は、胸の中で時刻を計算した。
——勘八のしらせを聞いたのが、九時少し前であった。
幽心尼の死骸を見つけたものが騒ぎ立て、自身番へしらせる。自身番から奉行所へしらせが飛び、まず本所方が呼び出され、寺社方へ連絡をとり、それから勘八が城之介達をさがす……。一時間はたっぷりかかるだろう。
——これを逆に計算すると、幽心尼は、大宝楼を出て行って、まッすぐ妙心院へ戻り、その境内へ入るなり絞められた。どこへも寄り道をする間はなかった……と言うことになるわけだ。
「幽心尼とは、いつからのつきあいだい？」
「十年にはなりましょう。先代の妙心院さんが亡くなる前からです」

「あの尼さん、なかなか色ッぽかったッてねエ」
「飛んでもない！　誰がそんなことを申しました。妙心院さんは立派な尼さまですよ。なればこそ、わたしも安心して、遺言状を書いて頂いたんです。いえ、その上、わたしが死ぬまで、遺言状のことは誰にも話さないでくれ……とお願いしたんです」
佐賀衛門の言うことが事実とすれば、由良三九郎の考えは間違っていることになるわけだ。
――やっぱり、尼殺しは、あの遺言状がもとらしいな……。
城之介は、そう考えて坐りなおした。
「悪いが、遺言状は読んだぜ」
「へエ……。致しかたございません」
「ところで、妙な遺言状だな」
「そうでしょうか？」
「実の倅をさしおいて、なぜ、従弟の巳之助とやらに身代をつがせるんだい？」
「そ、それは、家のためですよ」
佐賀衛門は、悲しそうに、目を閉じた。
「倅の伝七は、とって十六になります。まだ前髪のガキですよ。ところが、お恥かしいことですが、もう酒と女の味を覚えておりますんで……」
「商売が商売だからなア」
「それにしても、先が思いやられます。それで、従弟の巳之助に……。これはまた、堅い一方の男なんで……」
「一生懸命に店をやってる女将にしても、また倅の伝七にしても、遺言状のことを聞けば面白くねエ

だろう」
「だから、わたしが死ぬまで内密にしときたかったんです」
そう言った佐賀衛門が、寝たまま、ギョッとしたように、顔色を変えた。
「もしか、妙心院さんは、あの遺言状のためにッ?!」
「まだ、なんとも言えねエ……。娘があるのかい?」
「嫁入っています。京橋具足町のトビ頭せ組の三次が亭主で、もう子供が二人……」
「女房と伜に五百両、嫁入った娘に千両とはうなずけねエな」
「ヘエ……、いろいろ事情がありましてね。松代は、義理の母のおなおにつらくあたられてずいぶん苦労していますから……」
「やっぱり、いまのは後妻かい」
「そうなんです。でも、三次とは好き合った仲でしたから、いまは幸せなんですが、トビ頭なんて暮らしが派手なだけに、ふところは火の車らしいですねエ。時々、銭を借りに来ます。あたしが起きてた頃は、おなおに内証で助けてやってましたが、いまは……。あ、そう言えば、きょうも夕方来てましたッけ」
城之介は、ひそかに溜め息をついた。——松代と婿の三次だって、この大きな身代が血の違い巳之助のものになると聞けば面白くないに違いない……。
——下手人は、伜の伝七か、——トビ頭の三次か……。
城之介がそんなことを考えているとき、バタバタッと、乱れた足音が聞こえたと思うと、裾を乱した女将のおなおが、まッ蒼な顔で、転がるように飛び込んで来た!
「——お前さん! 巳之さんが、物置きで殺されてるよッ……」

四

「――なんて恰好だい、こりゃア……！」

深川新地第一の茶屋大宝楼の物置きで、巳之助の死骸を調べている千秋城之介のうしろで、駈けつけた由良三九郎が、素ッ頓狂な声をあげた。

「誰からお聞きになりました？」

「大した噂だよ。茶屋や子供屋で間違いがあると、まるで読みうり屋がふれ廻るみたいに、パーッと、深川中へ拡まってしまう。物見高けエ野郎ばッかり住んでるとみえるな、深川ッてところは……」

物見高いのは、江戸ッ子の常だった。火事と喧嘩は江戸の華などと、自慢にもならないことを自慢する江戸ッ子だが、中でも深川ッ子はイキでイナセで、喧嘩早くッて、弥次馬根性が強かった。まして、出来事が出来事だ。年増盛りの尼幽心が絞め殺されたすぐあとで、大宝楼の物置きでまた人殺しがあったと言うのだから、深川雀が黙っている筈がない。

ちょうど、峰から峰へならんだ狼灯台に、またたくうちに火が移って行くように、噂は忽ち深川中に拡がり、幽心尼の身状を調べていた三九郎の耳へも伝わったのであった。

三九郎が、――なんて恰好だ……と言ったのは、尤だった。

さすがに、新地一番の茶屋だ。かなり大きな物置きだった。その中に、夏場に使う調度品が、一々はり紙をして積み上げてあり、また、そのあいだあいだには、こわれた膳、古びた脇息、破れた行燈などが押しこんであった。

そんなものに混って、大きな長持が幾つか置いてあったが、中でも一番大きな、ガッシリとした長

持の一ツに、巳之助はよりかかるようにして死んでいたのだ。

しかも、両手をブランと垂らし、顎を長持にのせるようにして、息絶えていた。

反対側から見ると、長持の上に、チョコナンと巳之助の首がのっているように見えるのだ。そして、その頸には、幽心尼と同じように、赤い腰紐が、グイッと、食いこんで、堅結びになっていた。

「――誰かいるかい？」

城之介が声を掛けると、物置きの入口から、こわごわ、女将のおなおが顔を出した。

「巳之は、この店で働いてたのかい？」

「はい……、働くと申しましても、気ままに裏廻りを手伝っていました。これと言って、決まった仕事はございません。気が向いたら出て来て、この物置きのこわれものなどを片づけておりました」

「出て来る？」

「あ……、すぐ近くに、うちの長屋があるんです。巳之さんは、そこに住んでおりました」

「女房こどもは？」

「いいえ……」

おなおが、首を横に振った。

「――巳之さんは、ずッとひとり暮らしでした」

「いくつだい？」

「三十九でしたか……」

その時、本所方の同心が、やれやれと言いたげな顔つきで、入って来た。

「――どうも、ひと騒がせなことですなア」

「え?!」

城之介が、驚いて、本所方の顔を見た。
「全ては、あの遺言状のためでしょうな」
「そうお考えですか？」
「他に考えようがないでしょう。病気の主人佐賀衛門が、幽心尼を呼んで遺言状を書かせた。その内容を知っている幽心尼がまず殺され、次いで、一番大儲けをする巳之助が殺された……」
とたんに、まだ出入口の外にいたおなおが、驚きの声をあげた——
「旦那！　いま、なんと仰有いました？」
「佐賀衛門の遺言状によると、大宝楼のあとつぎは、巳之助と言うことになっていたんだ」
「そッ、そんなッ……、伝七と言う息子があります」
「伝七には、五百両だけ……。それも、お前さんと二人にだ」
「まア！　なんと言うことでしょうッ」
三九郎が、やけに、落ち付いた声でたずねた——
「知らなかった……と言うのかい？」
「知りませんよッ！」
「口惜しいかい？」
「お話になりませんよ。伝七はまだ十六ですけど、あたしッてものがついてるんです。いいえ……、いままでだって、店のことは、あたしひとりで切り廻して来たんですよ」
「しかし……、主人の遺言と言うことなら、しようがねエだろう……。と言っても、肝腎の巳之助が殺されちゃったんだから、話は振り出しへ戻るわけだが……。お前エ、本当に遺言のことは、知らなかったのかい？」

そう言う三九郎を、おなおは、切れ長の目でジッと見詰めた。
「あいにく、いま聞くのが初めてなんです」
「――あいにく?!」
「あたしが遺言のことを知っていて、幽心さんや、巳之さんを殺した……と、旦那は仰有りたいんでしょう」
「まアね……。悪く思ってくれンな。ひとりひとりをとっくり洗いあげて下手人を割り出す。それがあたし達の役目なんだ」
「旦那……」
おなおが、キッと顎を引きつけて、三九郎を睨むような目で見た――
「幽心さんや、巳之さんを殺したって、どうにもならないじゃありませんか、うちのひとは、また誰かを呼んで、別の遺言状を書かせることが出来るんですから……」
「なる程……。そう言うわけだ」
三九郎が、それには気がつかなかった……と言うように、うなずいた。
「お前が大宝楼を伝七に継がせたかったら、ついでにもうひとり、佐賀衛門を殺さなきゃなんにもならねエわけだ」
「あのひとは、離れでノウノウと寝ていますよ……。中気で倒れて六カ月余り……。ヒマなもんだから、ロクなことを考えないんですよ。中気ですからね、頭の方だって、どうせどこか調子が狂って――」
そう言っていたおなおが、ふッと、不安そうな顔で、一同を見廻した――
「――旦那! あのひと、生きているんでしょうねエ?」

「な、なにッ?!」

三九郎が、ギョッとしたように驚きの声をあげたが、城之介を振返ると、せわしげに言った——

「ちょっと、佐賀衛門の様子を見て来ようか?」

すると、本所方の同心が、すぐ応えた——

「あたしが見て来ましょう。女将も来てくれ……」

それからしばらくして、巳之助の死骸を他の場所へ移させて城之介は、なに気なく、死骸が寄りかかっていた長持のフタを持ち上げた。

「——あ……、これは……」

城之介の声に、三九郎も長持の中をのぞいたが、とたんに、ハッと目を光らせた。

「——畜生め! なんてこッたいッ」

「これはこれはとばかり……ですなア」

二人は、呆れた顔を見合わせた。

長持の中には、フックラとした、ま新しい布団が敷き詰めて、なまめかしく枕が二つ並べてあったのだ。

人間二人が中へ入って、楽に横になれる大きさだった。フタをすれば、誰の目にもふれないだろう……。

「あー、ご丁寧に、あちらこちらに、息抜きの穴まであけてあるぜ……」

長持の中を調べた三九郎が、いまいましげに、舌打ちをした。

五

「幽心尼は妙心院の暗がりで、出し抜けに背後から紐を頸にかけられ、巳之助は、長持のフタを持ち上げようとしゃがんだところを襲われた……、そう考えられます」

次ぎの日、城之介が、同心筆頭の早水茂太夫へ、そう報告した。

「その長持ッてエのがつまり、巳之助が女と忍び会う寝床ッてわけなんですよ」

三九郎が、城之介の言葉に、説明を加えた。

「うまく考げエやがった。まさか物置きの中の長持ン中で、金精大明神のお祭りが行なわれてるたア、誰も気がつかなかったでしょうからなア」

「しかし……、窮窟なことだったろうなア」

「そうとは言えねエでしょう。笑い本に、〝袋法師〟ッてエ物語がありますよ。袋ン中へ忍んでいいことをするッてお話なんで……。また、本当か嘘か、大奥へ持ちこむ長持ン中に、役者をかくしたッて話もあります」

「左様……、怨筵布団長持に敷くふとどきさ……と言う川柳もあるな」

むかし、生島新五郎と言う役者が、大奥のお年寄絵島のもとへ、長持にかくれて通った。その時、長持の中には、怨筵に敷く座布団を入れていた……と言うわけである。

それにしても、謹厳な茂太夫が川柳などを口にしたので、三九郎は嬉しそうにおでこをピシャリと叩いて喜んだ。

「では、拙者も一ツ川柳と参りましょう。——押入れの味から雷なり好きになり……とはいかがで

す」

「ふム……、どうせ、ロクな意味ではあるまい」

「突然の雷さまに、若い男女が急いで押入れへかくれたとお考え願います」

「あ……、わかった。押入れの中は狭くて暗い。そこへ男と女が逃げ込めば……と言うわけか？」

「左様左様……。それからは雷さまがだーい好き。鳴る度に大喜びで押入れへ飛び込む……と言うわけですが、押入れの中も、長持の中も、大した違いはねエでしょう」

「こう言う話ともなれば、三九郎はなかなかの学者だなア」

茂太夫の言葉に、集まっていた定町廻りの同心一同が笑った。

「ところで……」

茂太夫が、三九郎と城之介を見た。

「幽心尼殺し……、巳之助殺しの下手人について、心当りは？」

「佐賀衛門の遺言状をめぐるいざこざと考えます。従って、下手人は同一人物と言うことになるわけです」

そう言う城之介の言葉に、三九郎もうなずいた。

「ただね、あたしゃ幽心ッて尼にゃ、やっぱり男があったと思うんですがね……」

「その理由は？」

「右の乳房に、血の寄ってるところがありましたよ。男に吸われたに違げエねエですよ」

「とすると、どう言うことになる？　その隠し男が、幽心尼を絞めた……と言うのか？」

「さ……、そこまでは考えちゃアいませんが……、幽心の男、巳之助の情婦……これをさがし当てれば、なにかわかるような気がするんですがね」

こん度は、城之介がうなずいた。
「巳之助は、長持のフタをあけようとしたところを狙われたんです。女と会う約束があったのでしょう。とすると、その女が、案外下手人を見ているかもしれません」
「そうなんだよ。あたしもそう思う」
三九郎が、乗り出すようにして、そう言った。
「しかし、女はそのことが喋れねエ……。もしかすると、下手人から、喋ると殺す……と、おどかされてるかもしれねエ」
「或は、巳之助との情事を知られたくないのかもしれませんなア」
「そう言うわけだ。あたしゃ、幽心の情夫と、巳之助の女をさがしてみる」
「わたしは……」
城之介は、茂太夫を見た。
「せ組の頭、三次夫婦を当ってみます」
「大宝楼の娘の嫁入り先だな？」
「いままでのところ、佐賀衛門は生きております。巳之助が殺されたいまとなっては、あたらしい遺言状をつくると言うことになるでしょう。あととりを誰にするか……。倅の伝七には愛想を尽かしている。とすると、娘婿の三次と言うことになるかもしれません」
「待てよ……」
茂太夫が、ちょいと首を傾げた。
「三次は飛んだ拾いものをすることになるじゃないか」
「だから、三次夫婦に当ってみたいのです。三万両からの身代を継げるとなると、ひとの一人や二

人、ちょいとひねりたくなるかもしれませんからねエ……」

せ組の頭三次は、三十ちょいと前……。火消しの組頭としては随分若いが、親代々の組頭と言うことだった。

女房の松代は、丸顔で、胸も腰もふッくらとしており、深川の茶屋の娘、火消しの女房としては余りイキな姿ではなかったが、いかにも人の好さそうな、若女房振り……と、城之介は見た。

「――大宝楼じゃ大した騒ぎだぜ。昨日、深川へ行ったんだって？」

城之介が、水を向けると、松代がコックリうなずいた。

「はい……、少しばかり、お金を借りに行きました」

「夫婦で行ったのかい？」

「いいえ……、あたしが、こども二人を連れて行ったんです。おとっつぁんが、孫を可愛がってくれるものですから……」

そう言う松代に、三次が頭を掻きながら言葉を続けた。

「どうも、あっしが意気地ねエもんですから……。時々大宝楼から助けて貰ってるんですよ」

「しかし……、あの屋台骨がお前エのふところへ転がり込んで来るかもしれない。そうなりゃアー」

「旦那……。どうもお話がわかりませんが……」

「そうかい？　早い話が、お前エ達夫婦が大宝楼の主人になるかもしれない……と言うことなんだが……」

「飛んでもねエ。あしこにゃ、伝七ッて息子がおりますよ。それに、お袋さんもまだ若くッて、しっかりしてますからね」

「だけどさ、もし佐賀衛門が、伝七にゃ跡目をつがせねエ。三次に譲る……と言ったら？」

「そりゃア、棚からボタ餅ッてもんですねエ。悪かアねエですよ。しかし……、仮りにそんなことになると、あたしゃ困りますよ。痩せても枯れても、せ組の組頭……。六十人近い若いもンが、あたしを頼りにしてくれてるんですからね。それに……」

「それに？」

「松代の前じゃ言い難いが、火消しの組頭と女郎屋の親父、どちらがいいと言われると」

「組頭がいいか？」

「ま……、そんなわけで……」

キッパリとそう言う三次の横顔を、松代が嬉しそうに眺めていた。——どうやら松代も、茶屋の女将よりは、火消しの女房でいたいらしい……。

と、この時、表から、かわいい女の子の歌声が聞こえて来た——

「——むかしむかしそのむかし、大阪天満のまン中ごろで、傘を枕にしてやった……」

「あれ！　おつうですよ。困った子……」

松代がポッと頬をあからめて、腰を浮かした。——おつうと言うのは娘の名前らしい……。

女の子の歌は、まだ続いていた——

「——傘を枕にしてやった。こんな臭いものしたことない。ちり紙三帖ただ捨てた……」

「面白れエ歌だな」

城之介が、クスリッと笑った。

——江戸で夜鷹、大阪で惣嫁と言う。この大阪の街の女は、傘を拡げて、その蔭へ客を引ッぱりこみ、取引きを済ませた……。それが、歌の文句の、——傘を枕にしてやった……にあたるわけだ。

「——お手玉を取っているんですよ。困ったおとっつぁん……」

「佐賀衛門が教えたと言うのかい？」
「ええ……、あたしも、子供の頃におそわりました。昨日、おしえたんでしょう」
それからしばらくして、城之介が表へ出ると、五ツ六ツの女の子が三人集まり、松代が言ったように、お手玉遊びをしていた。
「――むかしむかしそのむかし、大阪天満のまん中ごろで……」
丸ッこい顔の女の子が、また怪しげな歌をうたった。――それが、おつうなのだろう。母親似だ。
「――上手だなア……」
そう言う城之介へ、おつうはニッコリ笑った。
「――深川のおじいちゃんは、もっと上手にお手玉取るよ……」

六

城之介が、深川門前仲町の自身番へ入って行くと、先に来ていた三九郎が、ムスッとした顔を向けた。
「どうかしましたか？」
「幽心尼の男がわかったよ」
三九郎は、土間の隅にうずくまっている、前髪姿の若い男を顎でしゃくった。
「あの小僧が相手ですか?!」
「当年とって十六歳……。伝七だよ」
「え?!　大宝楼の倅！」

「四十過ぎの年増尼と、十六の小伜が、妙心院の院主の座敷で、あられもねエ色模様をくり拡げてたってわけよ。伝七の遊び仲間をしめ上げて自白かせたんだ」

それから、三九郎は、伝七へ顔を向けた。

「どうだ、決心はついたか？　いさぎよく申し上げろッ。貴様、幽心から遺言状のことを聞き、大宝楼からおッぽり出されちゃ一大事と、まず尼坊主を絞めた――」

「しッ、知りません！」

伝七が、必死の様子で、蒼ざめた顔を振った。

「昨夜は、院主さまには会いません」

「それから大急ぎで大宝楼に取って返し、巳之助を狙った」

「違います。違います！」

伝七は、声をあげて、泣き出した。

「――由良さん、ちょいと……」

城之介は、三九郎の耳へ口を寄せた――

「――下手人がわかりましたよ。伝七じゃありません……」

それから三十分ほどして、城之介と三九郎は、大宝楼の離れ座敷へ入って行った。

「――あ……、旦那方……」

佐賀衛門が、寝床の中から、二人を迎えた。

「妙心院さんを殺した下手人は？　それから、巳之助殺しは……」

「わかったよ。二人を殺したのは、同じ男なのさ」

「そッ、それは……、どこの、どいつで？」

「ここの、こいつさ」

そう言うなり城之介は、ふところから、赤いお手玉を三ツ四ツ取り出して、ポイッと、佐賀衛門の枕もとへ放り出した。

「あッ！」

佐賀衛門が、ハッと、飛び起きた。

「あッ！　待てッ！」

三九郎が喚いたが、死にもの狂いの佐賀衛門は、ダッと、城之介と三九郎の間をくぐり抜けると、転がるように、離れから飛び出して行った。

「——待てッ。逃げられやしねエぞッ……」

城之介と三九郎が、追いかけたが、大宝楼は、忽ち大騒ぎになった。——台所へ駈け込んだ佐賀衛門が、刺身庖丁をとるより早く、おなおの部屋へ飛び込んで行った。

「——淫乱めッ！　覚悟しろッ……」

おなおは、着替えをしようと、長襦袢一枚だった。

「あ、あれッ、お前さん！」

「知ってたぞッ！　知ってたんだぞッ、お前と巳之助のことはッ……」

そして、佐賀衛門は、逃げようとするおなおの背中へ、ダーッと、ぶっつかって行った……。

「——まことに、不手際なことで、相済みません……」

城之介は、同心筆頭の茂太夫の前で頭を下げた。三九郎も、うつむいて、おでこの辺りを掻いてい

た。
「で……、佐賀衛門は？」
「おなおを刺した庖丁で、われとわがノドを突き刺し、相果てました」
「じゃ……、中気で半身がきかぬと言うのは、偽りだったのかい？」
「半年前に決心して、仮病をつかい、寝込んでいたのです……。そして、心にもない遺言状を、尼の幽心に書かせた上、妙心院へ先廻りして、絞め殺しました。幽心は立派な尼だ……などと言ってましたが、伝七とふざけていることを、ちゃんと知っていたのでしょう」
「それから、大宝楼へ引き返して、巳之助を絞めたってわけか……」
「巳之助は、おなおが来るのを、いつものように長持の中で待つつもりで、フタを持ち上げようとした。そこを狙って、佐賀衛門が、サッと腰紐を巳之助の頸へひっかけた……と考えられます」
「まさか、遺言をした本人が、頼まれて書いた尼や、自分が選んだ跡取りを殺すなどとは、誰も考えないだろうからなア」
「それが、佐賀衛門の狙いだったのです。うまくゆけば、幽心から話を聞いた伝七がやったことになり、召し捕られるだろう……、そうも考えていたようです」
「しかし……、わが子を下手人に――」
城之介が、顔をしかめて、首を振った。
「伝七は、巳之助の子ですよ」
「あ……、そうか！」
「おなおは、佐賀衛門のところへ後妻に来る前から、巳之助と出来ていたのです。十六年間、よくも騙した……。それだけに、佐賀衛門の憎しみは強かったのです」

「深川ッ子の意地の強さだ。みな殺しにしなきゃ、胸がおさまらなかったんだな……」
「しかし……、やっぱり、孫は可愛いかったんですなア。昨日、松代につれられて大宝楼へ行ったおつうが、離れへ遊びに行くと、佐賀衛門は、大阪のザレ歌を教え、お手玉をとって見せた。これが、大しくじりでしたよ」
城之介は、溜め息をついた——
「まこと半身不随の病人なら、お手玉をとれる筈はありませんからねエ……」

女中変化

一

根岸の道なし横丁で若い女が殺されている……と言う報せが、南町奉行所の定町廻り同心部屋へもたらされたのは、三時過ぎであった。

〝四月一日〟を、〝わたぬき〟と読む。つまり、衣がえで、四月の朔日から五月の四日までは、袷を着るからである。

一年で、一番いい気候だ。季節の上では夏だが、暑からず、涼しからず、いわゆる——目に青葉山ほととぎす初がつを……と言うわけである。

だが、この句はいかにも月並みである。——梅も散り桜も散りて松の魚……と言いたい。松の魚とはかつおのことである。

人殺しから、夫婦喧嘩の仲裁まで引きうけている定町廻りの同心部屋も、朝から、なんとなくノンビリしていた。

「——誰でエ誰でエ、雪隠へ変ンなものをはったなア……」

手を拭きながら手洗いから出て来た由良三九郎が、若手の同心達を見廻した。

「何がはってあるんです?」
千秋誠之介がたずねた。
「虫と言う字を書いた紙ぎれが、逆さまにはってあるのさ」
「あ……、虫除けですな……。そう言えばきょうは、八日でしたなア」
「正に八日だよ。あっちこっちの寺で、お釈迦さんの頭へ甘茶をぶっかけてらアね」
すると、日下兵馬が、困ったように頭を掻いた。
「――お目ざわりなら、剣がして参ります」
「へエ……、あの紙ぎれは、お前さんがはったのかい?」
「甘茶の墨で書きました。まじないです」
「――まじない……?!」
たずね返す三九郎の様子に、城之介が口を開いた。
「四月八日に、甘茶で墨をおろし、虫と言う字を書いて、便所へ逆さにはると、ウジ虫がわかない……と言いますな」
「へエ……、ウジ虫に字が読めるのかい?!」
「いや、最初からウジ虫がわかないのですよ。正しくは、――千早振る卯月八日の吉日に、かみさけ虫の成敗ぞする……と言う歌を書いて逆さにはるのです」
「ふーン……、あたしゃ、ペンペン草でゲジゲジ除けをするまじないは知ってるが、糞虫除けとは初耳だよ」
――行燈にペンペン草や影は藤……と言う句がある。ペンペン草――つまりナズナを行燈の中に逆さに吊るすと、藤の花のような影がうつる。こうすると、ゲジゲジがこないと言う迷信があった。

――それも、四月八日の行事の一つだったのだ。

「しかしなア、城之介……、このペンペン草のまじないも、本当は囲われものの女共が、旦那を遠ざけるまじないだって聞いたことがある。ゲジゲジとは、いやな旦那のことだそうだよ」

「そう言えば、虫除けのまじないも、実は、だいじな箱入り娘に、悪い虫のつくのを除くのが本当の目的だと聞いたことがあります。川柳にも、――卯月八日娘へも母はる気なり……、なんてエのがありますからな」

「いや、そりゃアいい……。近頃の娘ッ子は尻が軽くて始末におえねエ。――四月八日娘の尻へ歌をはり……てなアどうだい？　あまり出来がよくねエかな……」

とにかく、同心部屋はのどかだった。さしずめ、これからどっかで、初がつおで一杯……となりそうな様子だった。

そこへ、根岸の娘殺しがしらされたのである。

「――けッ！　気のきかねエ！　あと三十分もすりゃ、あたしゃどっかへ消えていたのに……」

三九郎が、そうつぶやいたのも無理ではなかった。――同心の勤めは、四時までとなっていたのだ。

「――行ってみましょう……」

城之介が立ち上がった。

「では……」

兵馬が、同心筆頭の早水茂太夫の方を見た。

「わたくしも、千秋さんといっしょに――」

「おッとッと……」

茂太夫より先に、三九郎が兵馬の言葉を押さえた。

「あたしが行くよ」
「三九郎は、いやらしかったが……」
茂太夫が、いぶかしげにたずねた。
「決して、いやとは申しておりませんよ。どうせしらせるなら、もっと早く……と考えただけです。いまから根岸へ行くと、明るいのはわずかですからねエ」
「だろうな……。若い女が殺されたのに、三九郎がしぶるなア妙だと思ったよ」
「早水さん……、そう言う言い方をされると、なんだか、あたしが助平みたいに聞こえますなア」
「あれ?! 違ったのかい?」
三九郎が、わざとらしく溜め息をついた。
「あたしゃ、根岸の方が大好きなんですよ。根岸新田には豆腐料理の〝笹の雪〟あり、金杉大恩寺前にサギ料理の〝田川〟あり……」
「仏店には蒲焼きの〝大和〟あり……か?」
「そうですとも!」
「〝大和〟のとなりにけころ茶屋の〝浜本〟あり……とね」
「へへへ……、そこまで言っちゃアまずいですなア……」
〝笹の雪〟、〝田川〟、〝大和〟……、いずれも〝江戸名物狂詩選〟にとりあげられた名代の料理屋であるが、〝浜本〟と言うけころ茶屋も有名であった。
下谷一丁目……、俗に仏店と呼んだが、ここに、二百文でお遊びの出来る女が大勢巣食っていた。
女達は水茶屋女の姿で、さかんに客の袖をひいたが、蹴ころばすと言うところからけころと呼ばれた。〝宝暦現来集〟には、——上野広小路裏仏店に、けころと名付く切り売りの売女あり、何れも娘

風俗にして、十五、六より二十三を限りて、いかにもやさがたなり……、とある。

この、けころ茶屋の中では、うなぎ屋の〝大和〟のとなりの〝浜本〟が第一で、——浜、大和どちらもうまい仏店……の狂句があるほどだった。

三九郎、城之介、それに自分から望んだ日下兵馬の三人は、それぞれの小者を従えて奉行所を出たが、根岸についたのは、やわらかな陽ざしが西へ傾いた四時過ぎであった。

呉竹の根岸の里……などと呼ばれ、ここは、鶯の名所であり、夏の蛍もよい閑寂の地で、江戸の文人達が好んで住み、富裕な町人は、競って寮を建てたものである。

が……、江戸の町中と違い、道も家並みも考えず、勝手気ままな家を建てた場合が多く、そのため〝道なし横丁〟などと言う奇妙な町家が出来上がることになった。

これは金杉下町と御行の松との間の一画で、くねくねと曲りくねった道が、もつれた縄のようにからみ合い、袋小路や行どまりの道がいたるところにあった。——まるで、迷い込んだら抜けられぬ藪知らずのような町で、道があり過ぎて通り抜けられぬ〝道なし横丁〟であった。

ところで、若い娘は、その〝道なし横丁〟の一軒……、日本橋の瀬戸もの問屋知多屋の寮で殺されていた。

「——こいつア凄まじい女仏だなア！」

死体を見ると、さすがの三九郎が驚きの声をあげた。

女は、腰巻き一枚の赤裸にひんむかれた上、うしろ手に縛られ、足を踏みはだけて、息絶えていた。

女が、あらあらしい男の手に踏みにじられていることは、死骸をひと目見ただけでもわかった。

苦しげに横向けた顔は、歯をむき出し、髪を振り乱しており、その横に派手なしごきが一本放り出されていたが、これで絞められたのではなかった。

女は、男の大きな手でくびり殺されたのだった。——その証拠には、女の丸まっちいおとがいの下に、紫色になった指のあとが幾つか残されていた。

「——女を縛り上げ、おもちゃにした上で絞め殺しやがった……。けだものめ！」

三九郎はそう言うと、庭先からのぞいている土地の世話役に顔を向けた。

「この家には誰が住んでるんだ？」

「それが……」

世話役のひとりが、困ったように顎を撫でた。

「これは、売りに出ていて、誰も住んでおりませんので……」

「じゃ、この女は？！」

世話役が、ペコリと頭を下げた。

「この辺りでは、見かけたことのない顔でして……」

二

「——由良さん……」

片膝をついて、死骸を調べていた城之介が、世話役と話をしている三九郎を呼んだ。

「ちょいと……、これを御覧下さい……」

「え？！」

三九郎が城之介のそばへうずくまると、城之介は、十手の先で、女の腰巻きをちょいと持ち上げてみせた。

「——ほう……、こいつア驚いた……」
「手入れが行きとどいてるでしょう」
「うン……、髪はやぼってエし、化粧は殆んどしてねエし、ズブの素人娘……。それも、百姓娘だと思うてたんだが……」
三九郎がふッと、横に立っている兵馬を振返った。
「ちょいと、この女の股ぐらをのぞいてみな」
「は?!」
「は……、じゃねエよ。いいからのぞいてみな」
「は……」
兵馬は、一度生つばを呑みこむと、三九郎が指さすところへ目を向けた。
「わかったかい?」
「は? いや……」
「いいかい。怒るんじゃねエぜ。ちょいと、お前エの奥方のここんところを思い出してみな」
「え?!」
「毛だよ、毛ッ」
「は?」
城之介が、困っている兵馬の肩をポンと叩いた。
「覚えときな。これからも女の死骸を調べるときに役に立つ……。こう言う川柳があるんだ。——小ぎれいに毛をひいておく店屋者……。商売女は、男に怪我をさせないために、手入れをするんだ」
「じゃ……、この女は?」

「男を客に稼いだことがあるんだ。うまく刈りこんであるのが何よりの証拠さ」

それからしばらくして、上野山下の水茶屋、仏店のけころ茶屋、谷中のいろは茶屋などから、その土地の顔役らしい男や女が根岸へ呼ばれた。

そして、仏店の、例の〝浜本〟の女将が、この女のことを知っていた。

「――お吉ですよ。半月前まで、うちで働いていたんです。十六の年から三年余り……。やっといい客がついて、借金をきれいにして、親もとへ帰ったんですけど……」

「親もとはどこだい？」

三九郎がたずねた。

「千住大橋に近い、塩入り土堤の百姓なんです。弥作……ッてのが父親ですよ」

三九郎は、チラッと城之介に目くばせをすると、庭にいる小者の六助のところへ行って、青々とした藪のそばへ引ッぱって行った。

この辺りの家は、いずれも庭を広くとり、出入り口を柴折戸などにし、庭には竹藪などのあるものが多かった。

売りに出ている家で、庭の手入れなどは行きとどいていなかったが、それでも、小さな筍が、ムックリ、やわらかい土を持ち上げていた。

三九郎は、多分、六助を千住の塩入り土堤へ走らせる積りなのだろう……。

「〝浜本〟に勤めている頃はどうだったの」

「お吉ですか？　大して売れッ妓でもなし……。と言って、客のつかない方でもなし……と言うところでしたよ」

「借金をはらってくれたッて客は？」

「さ……？」

女将が、ドキッとしたように口をつぐんだ。

「けころ上がりの女……と世間さまじゃさげすむかもしれぬが、あたし達にしてみれば、百万長者も人間、非人もの乞いも人間、変りはねエんだ。この下手人をふン縛らなきゃ、仏が浮かばれない。そうだろ？」

「有難うございます……。でも、吉原なんかと違って、水茶屋の客は、十人のうち九人までが女とジカ取引きですからねエ……」

「わからねエと言うのかい？」

〝浜本〟の女将が、済まなそうにうなずき返した。

城之介には、女将の嘘が目に見えていた。が……、水茶屋の女主人などは、口が堅いものだ。そうでなければ、客が安心して寄りつかない。

——いま責めても駄目だな……。

そう考えた城之介は、急に話を変えた——

「〝浜本〟をやめたのは、半月ばかり前だと言ったな？」

「先月の二十日過ぎでしたよ。でも、親もとも暮らしが楽じゃないとみえますね。いつまでも食べさせておけないとみえて、こん度は女中奉公に出すことにしたんです」

「ヘエー、詳しいじゃないか」

「おや……、申し上げませんでしたかしら？　お吉はきょう昼前に、ちょいと、あたしんとこへ顔を出したんですよ」

「初耳だぜ」

「――こん度、下谷山伏町の桂庵山長さんの世話で、女中奉公に行くことになった。もしお店の方から、なにか問い合わせて来たら、ここで下働きをしていたことにしてくれ……、そう言って来ました」

「けころだったと言えば、折角の奉公口がフイになるッてわけか」

「よくあることなんですよ。ですから、――ああ、そう言ってやるよ。心配しなくていいからね……ッて、言ったんですけど……」

「奉公先は？」

「近くの伊勢屋さん……と言ってましたけど、伊勢屋さんは多うございますからねエ」

よく言われることだが、――一伊勢、二近江、三駿河……。伊勢屋稲荷に犬の糞……だ。

「呉服屋の伊勢屋とか、酒屋の伊勢屋とか……」

「それをおぼえていないんですよ。こんなことになるとは知らないもンですから、あたしも、うっかり聞いてましてねエ……」

「まアいいや……」

城之介は、戻って来た三九郎に、いま聞いたことをかい摘まんで話すと、兵馬を連れて寮を出た。

「どこへ行くんです……」

若い兵馬は、さきほどお吉のおかしなところを検分させられたのがこたえたのか、毒気を抜かれたような顔でたずねた。

「――下谷山伏町の桂庵をたずねるんだよ」

「しかし、驚きましたよ。一体、あたしはいつになったら、一人前の同心になれるでしょう……。余り、何も知らないので、われながら、いやになります」

「あー、小ぎれいに毛をひいている店屋もの……の一件かい？」
「どうも、遊女などに馴染むことの出来ぬ質でして……」
「いや、こんなことは、女遊びなどしなくてもわかることだ。たとえば、湯屋の番頭三助などと話をすると、きっとおしえてくれる。素人女は、商売女と間違われぬため、わざと除毛などせぬものだ」
「大変参考になりました」
「あたし達ア、いろんな人間とつきあわなきゃアいけないな。それが、同心の耳学問てやつさ」
道なし横丁から下谷山伏町までは、十丁余りだった。それでも、城之介と兵馬の二人が上野の山下を下谷坂本で左へ曲り、源空寺門前の山伏町に入った頃には、もう、トップリと暮れて、八日の片割れ月が輝いていた。

三

「――え?!　お吉がですッてッ？」
桂庵の山長こと山形屋長右衛門が、けげんそうに、城之介を見詰めた。
「いったい、いつごろお吉は殺されたんです？」
「そうよな……。死骸の冷たくなり加減から判断して、二時下がり頃じゃあるまいか」
「そりゃア妙ですなア……」
山長が首を傾げた。
「本来なれば、あたくしがいっしょに伊勢屋さんの寮へ行く筈でしたがね」
「寮？」

「そうなんで……。根岸の鳥王寺裏ですよ」
「じゃ、道なし横丁の向うどなりだ」
「そうゆうわけですな……。神田横山町の糸伊さんの寮ですがね」
「知ってる。糸問屋の伊勢屋と言えば大した大店だ」
「その糸伊の先代が寮にいましてね、お吉はそこへ女中奉公に行ったんです」
「山長……、お前エ、お吉がどんな素姓の女か知ってるのかい？」
「知ってます……。千住塩入り土堤の百姓の娘ですよ」
「それから？」
「十六の年から、つい半年前まで、奉公に出ていました」
「どこへ？」
「仏店の〝浜本〟ですよ。早く言やアけころッてことになりますなア」
「それを、ズブの素人で糸伊の寮へ売り込んだのか？」
「旦那……」
山長は、ちょいと頭を掻いた。
「あの寮にゃ、女中が居つかないんですよ」
「わけがありそうだな？」
「出入り先のことを悪く言いたかアありませんがね、御隠居がどうも、お盛んな方らしいんですなア」
「隠居は当年幾歳だ？」
「去年、赤い頭巾をかむったんですよ」

「〝ほんけ返り〟を過ぎてるのかい？」
「あの年で女好きてエのは、間違いなしに、若い女をそばに置きたがりますなア」
「盛りの年増女とは太刀打ちが出来ない。もう一ツは、若い女を相手に若返ろうってんだな」
「去年四人……。今年に入って、もう二人女中が出て行きました。あたしも、これじゃ、とても素人では駄目だと考えましてね」
「お吉をさし向けたのか？」
「ま……、見かけは素人ッぽいし。丁度奉公口を頼みに来ましたのでね……」
「どうして一緒に行かなかったんだい？」
「〝浜本〟に寄って、下働きをしていたとに頼んで行くと言いますのでねエ。添状をつけてやったんですよ……。だけど旦那……」
山長が、また首を傾げた。
「妙ですねエ……。一時間ほど前に、寮番の彦七爺さんが、——お吉は大変気にいった。当分使ってみる……ッて、御隠居のことづけを言って行きましたよ」
「一時間前に?!」
城之介と兵馬は、思わず顔を見合わせた。——一時間と言うと、ちょうど、〝浜本〟の女将達に、死骸の顔を見せている頃だ。
「——行ってみようぜ……」
城之介は兵馬を促して、いま来た道をとって返した。
「——どう言うことでしょう？」
「多分……」

城之介は、暗い道を辿りながら、自分に言い聞かせるように言った——
「彦七とかって爺イさまは、早くから用達しに出てたんだろう。そのあとで、お吉は糸伊の寮を出て、男に道なし横丁の空き家へ連れこまれて手ごめにあった上殺された。彦七は勿論、そんなことは知らねエ。で帰りに山長へ寄って、隠居のことづけを伝えた……」
「それなら筋が通りますね」
「が……、これはあたしの考えだ。案外、彦七は一時間前に寮を出て、まっつぐ桂庵の山長へ行ったのかもしれない」
「とすると、辻つまが合いません。糸伊の寮にいるお吉はニセ者と言うことになりますな」
「でないとすると、殺された女が、お吉に瓜二ツ……てエことになる。もしかすると、ふた子かもしれない。とにかく、これは親もとへ六助が行ってるから、はっきりするだろう」
それから、城之介は、ふッと、言葉をつけ加えた。
「わからねエなア……。けころ上がりのお吉が、なぜ絞め殺されるほど、男をきらったのだろう？十六の年から三年もけころを勤めたんだ。いまさら、男の一人や二人、なんてことはない筈じゃねエか」
「よっぽど、いやな男だったんでしょう」
「働いてた頃には、片輪であろうが、雲助、ならずものであろうが、いや応なしに切り売りした体だぜ」
道なし横丁と違って、薬王寺裏の糸伊の寮はすぐわかった。
声をかけると、ノッソリ出て来たおやじが、寮番の彦七だった。
「——きょう、桂庵からお吉ッて女が来た筈だな」

「ヘエ……、参りましたよ」
「いまどうしている？」
「うちにおりますが……」
城之介のうしろで、兵馬が、ゴクリッと、ノドを鳴らした。
「――呼んでくれ。お吉に会いてエんだ」
「それが……、いま御隠居の座敷へ行っておりますんで……」
「呼べねエと言うのかい？　色好みの六十親爺の相手をしてる女は、お上御用の筋があっても呼べねエのが糸問屋伊勢屋の家風なのかい？」
「と、飛んでもない！　ちょっと、お待ちになって……」
彦七は、横ッ飛びに、奥へ駈け込んで行ったが、すぐ、素ッ頓狂な悲鳴が聞こえて来た――
「――旦那ッ！　お町の旦那ッ！　御隠居がッ……。御隠居が殺されてますよッ……」

四

糸問屋伊勢屋の隠居佐平は、みっともない恰好で殺されていた。
六十を過ぎても、若い女中が逃げ出すほど筆まめな隠居だ。年中、精のつくものを食っているのだろう、デップリとした体つきだが、さすがに年は争われず、首筋や二の腕や腹の皮がたるんで、茶色ッぽかった。
その佐平が、帯も締めず、寝間着一枚をひッかけた形で、亀の子のように手足をちぢめて息絶えていたのだ。

そして、佐平の頸には、黒ッぽい細紐が、まるでカラス蛇がまきついたように、無気味に、ギューッと、食い込んでいた。

死骸は、上半身が布団から畳の上へ這い出していたが、布団の上に残った両脚は、派手な絹夜具を踏み乱し、両手の指は、畳を掻きむしっていた。

佐平は、寝間着の下には、下帯一本すら身につけていなかった。

「――えーえー、いい年をして女狂いをしやがるから、飛んでもねエあばずれにひっかかッたってわけさ……」

兵馬の急報で、〝道なし横丁〟から駈けつけた由良三九郎が、さもきたならしそうに舌打ちをした。

「――やっぱり、下手人は女とお考えですか？」

千秋城之介がたずねた。

「――まンず、そう考えていいんじゃねエのかい……。きょうやって来たあたらしい女中……。佐平は舌なめずりして、はやばやと寝床へ入った。そして、万端とどこおりなく用意をして、女を待ったッてわけさ。――それにしても、下帯まで取っているたア、大した色気違いだよ、この隠居は……」

「そこへ、〝お吉〟ッて女がやって来た……と言うわけですか？」

「おッと待った！　そこんとこを、はっきりさせようぜ……」

三九郎は、噛みつくような調子で、寮番の彦七を呼んだ。

「知ってることを、洗いざらい申し上げるんだ。ヘタな隠し立てをしやがると、大番屋へしょびいてくぞッ」

大きな声でそう言われた彦七は、オドオドと、幾度も頭を下げた。

「佐平が、寝床へ入ったなアなん刻だった？」
「へエ……、七時過ぎで……」
「けッ！　お床急ぎをしやがる爺イだ……。それから？」
「八時ちょいと前に、手をおたたきになりましたので、あたしが、御用を伺いに……」
「どうしてだい？　女中を呼んだんだろう？」
「丁度その時、お吉さんは、台所で片づけものをしてましたので……」
城之介が、ふッと彦七へ顔を向けた。
「お吉と名乗る女が、あと片づけをしていた……。それが、八時ちょいと前だと言うのだな？　間違いではあるまいな？」
「確かでございますよ。それからすぐ、八時の太鼓が聞こえましたから……」
城之介は、三九郎へ顔を向けた——
「由良さん、〝道なし横丁〟の女が本物か、こちらへ現われた女が真のお吉か……」
「親が見違げエる筈はねエだろうな……」
「と、言うと？」
「小者の六助が、塩入り土堤の弥作を連れて来たんだ。いま弥作は、女の死骸にとりすがって泣いてるぜ」
城之介が、うなずき返した。——父親が泣くからには、〝道なし横丁〟の空き寮で殺されていたのが、けころあがりのお吉なのだ。
「で……、お前エは、手の音を聞いて、この座敷へやって来た。それから……」
三九郎が、彦七に話をうながした。

「――お吉はどうした……と、御隠居さまが仰有いました。台所で働いています……と言いますと、――肩が凝ってるから、すぐここへ来て揉むように言え……ッて」

「ね……」

三九郎は、城之介へ、いまいましげな顔を向けた。

「これで、女がここへ来た段取りがはっきりしたじゃねエか」

「それから、どうなったでしょう?」

「いざとなると、年寄りは気が長げエ。本当に肩を揉ませたかもしれねエな。そして、ジックリ、女を陥しにかかった。が……、意外にこの女が堅かった。そこで、力づくで……と言うことになったが、女の方も必死で身を護ろうとした。しかも、たまたま、解いてあった細紐が手にさわった。そこで――」

「夢中で、それを隠居の首へ捲きつけ、グイッと絞めた……と、お考えですか?」

「気にいらねエかい?」

「いや……」

城之介は、布団から乗り出したままの佐平の死骸を見た。

「ただ、あたしは、あの死骸の恰好が気になるんですよ。佐平は、明らかに逃げようとしていた……。それを絞め殺すにゃア、女が佐平の背中に馬乗りになっていなきゃア、ならないでしょう」

「だから、どうだって言うんだい?」

「どうも、最初から殺す気で、女は佐平のスキをうかがっていたような気がするんですがねエ……」

が……、三九郎は、ちょいと首を傾げた。

「最初から殺す気だったら、細紐で頸を絞めるなんてしなくても、もっと女らしいやり方があったと

思うね」
「たとえば？」
「茶か酒に毒を盛ってもいいじゃねエか。女中に住み込んだからには、そうしようと思えば出来た筈だ」
「殺す気で住み込んだが、呼ばれるまでは、決心がつかなかったのかもしれませんよ」
「なら、呼ばれたときに、匕首か、剃刀を忍ばせてくるッて手もある。また、恐らく佐平は女を抱きしめ、口を吸おうとしたことだろう。男の舌を噛み切ってもいい。その方が、ずッと女らしいぜ。細紐で絞めると言うなア、やっぱり、とっさの出来事じゃねエかなア」
それから三九郎は、また彦七にたずねた——
「その女中は、どんな女だった？」
「いい女でございました」
「そうだろうな。だから隠居は床急ぎをしたんだろう。が……、いい女にもいろいろあるぜ。年頃は？」
「十八……と、自分で申しておりました。女としては、背の高い方でございますよ。色白で、面長で、髪の型が粋で……。あんなのを、凄いようないい女……と申すのかもしれません」
「そんなにいい女だったかい？」
「はい……、その上、なんとも言えない色気がございましたよ」
「持ちものは？　着替えなんかは？」
「ございませんです……。明日、ヒマを見て取りに行って来ると言っておりましたが……」
城之介は、座敷から庭へおりてみた。

かなり広い敷地だった。グルリッと、カラタチの生垣がとりまいていた。
「――旦那……」
提灯を下げて、拗弁の拗八が近づいて来た。
「下手人は、この先んとこから逃げたようですよ」
「足跡でもあるのかい？」
「いいえ……。五寸ほど、生垣がとぎれてるところがあるんです。そこんとこのカラタチの枝が、五、六本折れてまさア。拗弁ならねエことに、折れ口がまッさらなんですよ」
城之介が、大きくうなずいた。
「――拗の字……、よくめッけた。それが、下手人召捕りの手掛りになるかもしれねエぜ」

五

「――どうも、飛んだ騒ぎになっちゃいましたよ……」
次ぎの日の朝、南町奉行所の定町廻り同心部屋で、三九郎が同心筆頭の早水茂太夫へそう言って顔をしかめた。
「横山町の糸伊の隠居が殺されたんだって？」
「大変な爺イだったようですなア」
「並みの干大根じゃなかったッてわけかい」
「飛んでもねエ！　はだなが顔まけするくらいのものだったようですよ」
〝干大根〟とは、老人の枯れしぼんだ持ちもののことであり、〝はだな〟とは相州秦野に産するみず

みずしい大根で、当然女性をあらわしている。——干大根茶屋のはだなに取りまかれ……などと言う句は、老人の茶屋女遊びのことである。

「ところで、空き寮でのお吉殺しと、糸伊の隠居殺しのつながりは、どう言うことになるんだい？」

「それが、どうも厄介なんでして……」

三九郎は、横にいる城之介を振返った。——情事や女のことなら、ベラベラと喋りまくる三九郎だが、こと吟味に関してくると、とても城之介にかなわなかった。

「あたしは、お吉殺しと、佐平殺しの下手人は別だと考えます」

城之介が、考え深く、ひと言ひと言を句切って話し始めた。

「しかし、こう言う考え方はどうだい？　或る女が、お吉が糸伊の寮へ奉公に行くことを知って、〝道なし横丁〟の寮へお吉をつれ込んで殺し、お吉になり澄まして糸伊の寮へ行き、隠居のスキを見て絞め殺した……」

「お吉は、犯されております」

「あ……、そうか！　じゃ、こう言うのはどうだ？　お吉が縛られて、空き寮へ転がされてるところへ、無宿者か乞食が入って来て、飛んだ御馳走と、お吉の体を頂いた上絞め殺した」

「あたしも一度はそう考えました。だが、けころあがりのお吉が、命を棒に振ってまで、男をこばむでしょうか？」

「——お前さんの自由になるから、この紐をといておくれ……と、言いそうだな」

「言いますよ、きっと……」

「さアわからねエ……」

早水茂太夫も、腕を組んで、首を傾げた。

「さし当って……」

城之介が、茂太夫と三九郎を見比べた——

「手をつけなきゃアならないことが二ツあると考えます。一ツは、お吉の男出入り……。もしかすると、けころのお吉に入れ上げた末、冷たく扱われて、恨んでる男がないとは限りません」

「そいつア、あたしが洗ってみよう」

三九郎が、そう言うと、茂太夫がニヤリッと笑った。

「いやですぜ、早水さん……。お前エ詮議を口実に、けころ茶屋の〝浜本〟に、おみこしを据える気だろう……と言いたそうなお顔ですぜ」

「そうじゃないのかい？」

「へへへ……。ま、さし当って、〝浜本〟へは行かざアならねエでしょうがねエ……」

「三九郎でも、気がひけるとみえるなア……」

茂太夫は、笑いながら、城之介へ顔を向けた。

「もう一ツは？」

「糸伊の隠居の身持ちを調べねばなりますまい……。お吉に化けて乗りこむからには、深い恨みがあってのことと考えます」

「そりゃアそうだろう。ただの女中が、隠居から手ごめにされようとして争ったはずみ……と言うわけじゃあるまい。この人殺しの根は深いようだ……」

しばらくして、城之介は、勘弁の勘八を連れて、横山町の自身番へ行った。

「——糸伊の隠居のことを知りたいのだが、評判はどうだった？」

城之介がそう言うと、集まっていた町役人が、顔を見合わせた。

「知ってることを話して貰いたいな。全ては下手人を捕えるためなのだ。隠居の佐平が、女癖のよくない男だったことは承知しているぜ……」
「ヘエ……、それだけがあの方のキズでしたよ。その他は、よく出来たおひとでした。こんなザレ歌をこどもまで歌っておりますんで……」
そう言って、町役人のひとりは、奇妙な歌を聞かせた。
——伊勢屋やの字は古袢(ふるまわし)、破れふんどし寺の門、いつも坊主が首を出す……。
「余ほどの好色ものだったとみえるな」
「死んだひとのことを申したくはありませんが、五十前に隠居して根岸へ移ったのも、気ままに女道楽をしたいため……、などと申すものもあるくらいでして……」
そのあとで、城之介は、勘八に、糸伊の番頭を呼ばせた。
「——和助と申します。主人夫婦が、根岸の方へ参っておりますので……」
「葬いやなんかで大変だろう……。お前エは糸伊の子飼いかい？」
「ヘエ……、小僧のときから、かれこれ四十年も奉公いたしております」
「じゃ、殺された佐平の女出入りについては詳しいわけだな」
「え?!　そ、それは……」
「お上じゃ、調べるだけは調べてある。が……、お前エの方でも、佐平が相手にした女を一人残らず書き出して貰いてエ」
「一人残らずでございますか?!」
「都合の悪いものを落したり、隠したりしちゃアならねエ。お上の方で控えてある女の名が漏れていたりすると承知しねエぜ」

「しかし……、わたくしの知らぬこともございましょうから……」
「和助……」
城之介は、意味あり気に、口許に薄笑いを浮かべた。
「糸伊と言やア、江戸で指折りの糸問屋だ。その大店のたばねをするお前エが、主人一家のことで知らぬことがある……と言っても、こいつア通らねエ」
それから城之介は、キッと形を改めた——
「明朝までに間違いなく書き出すんだ。女の名前……、親もと……、別れた事情……、出来れば、いまどこで何をしているか……」
「そのようなことまで！　それではとても明朝までには……」
「賓番の彦七、桂庵山長のおやじ、それから出入りのトビ頭などを呼んで相談するんだな。女の始末がこじれたときには、多分トビ頭がひと役買ってるだろうからなア……。お上の御用だ。きっと申しつけるぜ……」
城之介は、番頭の和助に一本釘を打って自身番を出た。
「これからどちらへ？」
「根岸へ行ってみよう……。仏の手引きで、何か拾えるかもしれねエ」
が……、夕方近くまで、お吉が殺された〝道なし横丁〟や、佐平殺しの薬王寺裏一帯を歩いてみたが、これはと言う手掛りは摑めなかった。
「——そばでも食って行こうか……」
城之介は、拇八を促して、不忍の池を眺める名代のそば屋無極庵の縄のれんをくぐった。とたんに

「――おや、珍しいところでお目にかかりますこと……」
キーンと、巽上がりの女の声が聞こえた。――粋な姿の女が四、五人、細い煙管でたばこを吸いながらそばを待っていたが、その中のひとりは、竹川河岸のお葉だった。
「ほう……、きょうはなにごとだい、師匠？」
城之介が、さりげなくたずねた。――ここんところ、五、六日お葉とは会っていないのだった。
さっきの、とんがった声も、そのためだったに違いない……。
「芝居見物ですよ」
「上野にかい？！」
「広小路にだって芝居小屋はありますよ」
「だけど、粋な富本節の師匠が、広小路のこじき芝居なんか、見に来るとはねエ」
「粋な巻き羽織の旦那でも、おなかがすけば野暮ったい切りそばを食べに来るじゃありませんか」
お葉は、ことごとにつッかかって来た。
「へエー、師匠の芝居見物にも、わけがあるのかい？」
「ありますともさ！　いい男を見たかったんですよ。あたし達ア、みんなひとりものですからねエ……」
お葉は、仲間の女達と顔を見合わせて笑った。
「で……、いい男がいたかい？」
「いましたとも！　水木歌仙……。女形ですよ。それこそ、水のたれるようないい女ッ振りでした。あれが男なんですからねエ。それから、やはり女形で袖岡市十郎。ゾクーッとしましたよ」
それから、お葉は、ふンと笑った。

「あんなきれいな女形を見ると、そこいらに転ってる男達は、まるで泥人形ですねエ……」

六

「――どうもいけねエ……。〝浜本〟にいた頃のお吉は、勤めだいじに働き、客を振ったことなどなかったそうだ」

三日目の朝だった。――城之介と肩を並べて歩いていた三九郎が、どうにもならないと言うように首を振った。

二人は、奉行所へは寄らず、横山町の自身番へ向っていたのだ。

「お吉にいい客がついて、借金を払ってやった……と、〝浜本〟の女将が言ってましたな」

「うン……、女将が、内証で口を割ったよ。その客と言うのは、上野の寺の和尚なんだ。先月、この和尚が京都へ行くことになり、置きみやげに、お吉の借金を払ってやったんだそうだよ」

「では……、その和尚は江戸にいないのですか？」

「一度女の味をおぼえたタコ坊主だ。いま頃、京女とふざけてやがることだろうよ。あたしゃ、女の借金を払ってやった男が一番臭せエと考えてたんだが、京都じゃ話にならねエ」

三九郎は、ガッカリしたように溜め息をついた。

横山町の自身番には、糸伊の番頭和助が待っていた。

「お申し付けのもの、書き上げて参りました。この六、七年の女ですが、ひとりも落してはいない積りでございます」

「ご苦労だったな……」

城之介は、半紙を二ツ折りにして、横とじにした書上げ帳をとりあげた。
「――なんとまア、大勢の女をこなしたもんだなア……」
横から、帳面をのぞきこんで、三九郎が驚きの声をあげた。
「いってエ、総計幾人なんだ？」
「十日前までいた女中までで、二十二人になりますので……」
「ヒヒ爺イめ！」
三九郎の言葉に、自分がののしられたかのようにうつむく和助へ、城之介が帳面を突きつけた。
「自害した女が二人もいるじゃねエか」
「はい……。ひとりは御行の松で首を吊りましたんで……。もう五年になります」
「この、お三と言う女は、入水だな？」
「去年の秋、三味線堀へ、身を投げました」
「身寄りは？」
「弟がひとりございます。上方で役者をしていたとか申して、先月の初めに、お三はどこに埋めてあるのか教えろ……と言って、お店へやってまいりました」
「教えてやったのかい？」
「桂庵の山長にたずねるように……と申して帰しました」
「ここに書いてあるのが、弟の名だな？」
「はい……、水木歌仙と申しますんで……」
城之介は、三九郎へ顔を向けた――
「――由良さん、もしかすると、ケリがつくかもしれませんよ……」

城之介と三九郎が、上野広小路の芝居小屋の前に立ったのは、かれこれ昼近くだった。

その頃の芝居は、江戸三座と言われた大芝居でも朝から暮れ六ツまでだった。火事に備えて、灯りのいる夜の芝居は禁じられていたのである。まして、上野や両国の掛け小屋芝居は、取締りが厳しく、朝の十時から、夕方の四時どきまでとされていた。

従って、昼近くと言えば、もう中幕と言うところだった。

城之介は、先に立って、ズカズカとむしろばりの楽屋へ入って行った。

「――おう……、水木歌仙てエのは誰だい？」

その声に、楽屋の隅の方で、双肌ぬぎになって化粧をしていた女形が振返った。

「――あたくしでございますが……」

〝伊勢音頭〟のお紺のかつらをつけて、ポッテリと、豊かな体つきで、女を遥かにしのぐ凄まじい色気があふれていた。

「お前エが、水木歌仙かい……」

城之介は、女形に近づくと、出し抜けに、グイッと相手の手首を掴り、片方の手でありあわせの手拭いをとり、ゴシゴシと、歌仙の腕から、いま塗ったばかりの白粉を拭いとった。

「あ……、なにをなされます！　もうすぐ幕があきますのにッ……」

「もう舞台にゃ出られねエよ」

「えッ！」

「カラタチにゃトゲがある。糸伊の寮の生垣を通り抜けるのは、さぞ痛かったろうなア」

「あッ！」

女形の歌仙は、慌てて、腕のひッ掻き傷をかくそうとしたが、もう間に合わなかった。

その夜、城之介は、久し振りにお葉の家に行った。
「お前エが岡惚れした水木歌仙をふン縛ったのは、あたしだぜ」
「知ってますよ。さっき、読み売りの瓦版を読みましたからね……。でも、お上にもおなさけがあるんでしょ。あの女形は、姉さんの仇を討ったのも同じでしょう」
「だが……、お吉を殺したのはよくねエな」
「えッ！　歌仙がですか?!」
「いずれ、糸伊の寮へは女中が雇われると、柿庵の山長を見張ってて、お吉が行くことを知り、空き寮へ連れこんだ。お吉は、女姿の歌仙を、夢にも男とは思わずついて行ったのさ……。それを、裸にひんむいて、縛りあげた」
「まア！」
「さて、裸の女と揉みあってるうちに、もともと男だ。歌仙は妙な気になった」
「おや、まア！」
「お吉をおもちゃにしたあとで、これはまずいと気づいた。——隠居を殺したのは、女姿だが実は男……と、お吉の口からバラされては、忽ちお召し捕りになる。だから、お吉は生かしちゃおけなかったのさ」
城之介は、お葉の肩を抱き寄せた——
「歌仙は、お吉を殺してから、糸伊の寮へ乗りこんだのだが、この謎を解く手がかりは、お前エが、——女でも惚れ惚れするよい女ぶり……と言ったひと言だったんだぜ……」

女難同心

一

「――ちょっと……」

千秋城之介の広い胸に抱かれて眠っていたお葉が、ふっと、首を持ち上げて、耳を澄ませた。

「誰か、表を叩いているよ」

「いま、なん刻だい？」

「おや……、起きてたの？」

「さっきから目がさめてるんだ。これでも武士のはしくれだからな」

「クツワの音に目をさますッてわけ？」

「それほどの心構えは持ち合わしていないがね……」

その間にも、階下からは、格子戸を叩く音が聞こえて来た。

「――幾刻だろうなア」

城之介が、同じ言葉を繰返した。

「さア……、二時はとッくに過ぎてると思うんだけど……。あたしもよく眠ってたから……。お前さんが、しつこいんだもの……」

お葉は、チラッと、うわ目使いに城之介を見て、ニヤッと、口もとを崩した。——城之介から、巧みにこなされて、体がクタクタになっていたのだ。

「それにしても、誰かしら？」

「打っちゃっとけよ。どうせ、あと一時間もすれば、いやでも起きなきゃならないんだ」

町奉行所同心の外泊は禁じられていた。いつ何時出役しなければならぬかわからぬ役目柄、これは当然のことであった。

が……、それは飽く迄も表向きのこと……。町方同心も男であってみれば、時には浮気もしてみたくなるし、殊に若い、ひとりものの同心など、女の方で放っておきはしない。——同心、関取り、火消しの頭……と、江戸の男三幅対の筆頭にあげられる町方同心には、おキャンな江戸娘が血をわかしたものなのである。

と言って、まさか女をお上から頂いている組屋敷へ引ッぱり込むことは出来ない。

当然、女の家へ泊まることになるわけだが、そこはよくしたもので、真夜中になにか事が持ち上がれば、手飼の小者が、女とおねんねしている旦那のところへ素ッ飛んで行く……と言う仕組みになっていたのである。

城之介と富本節のお葉とは、もう四年越しの仲である。いままでに、幾度も、小者の勘弁の勘八が駈け付けている。

それに、城之介も、決してお葉の家で朝を迎えるようなことはしなかった。三時から四時の間には、必ずお葉の家を出て、暗いうちに屋敷へ戻るようにしていた。

「——どうせ、勘の字の野郎が、なにか騒ぎを持ち込んで来やがったのさ。人殺しか、押しこみ強盗にしろ、どうせ下手人は逃げちゃったあとさ、一時間、三十分を争ったところで、どうにもなりゃア

しねエよ」
「そうかしら?」
「あれ!? お前エはおれに、いますぐ素ッ飛んで行け……と、言いたいのかい?」
「そうじゃないよ。戸の叩きかた、いやに、御近所へ気がねしてるようじゃないか。勘八さんなら、そんなことはお構いなしさ。それこそ、いや応なしに起きなきゃアならないような叩き方をするんだけどねエ」
お葉の言葉に、城之介も、耳を澄ませた。
「――なる程……。いつもの勘の字とは違うようだ」
「ちょいと、見て来ようかねエ……」
お葉は、はだけた長襦袢の前を合わせ、半纏をひっかけて降りて行ったが、すぐ、二階へ戻って来た。
「――お前さん、日下さんだよ」
「兵馬が!?」
「それが、まッ蒼な顔をして……」
「どんな恰好をしている?」
「いつもの通りだよ。巻き羽織でさ……。御用廻りの時の恰好だけど……」
「この真夜中にか!? ――おい、そいつを貸しな……」
城之介は、お葉に脱がせた半纏を羽織って階下へ行った。
階下は、お葉の稽古場と、茶の間になっている。――日下兵馬は、その茶の間のシキイ際にキチンと坐って、うなだれていた。

「――あ……、千秋さん！」
城之介の姿を見ると、兵馬はすがりつくように、顔をあげた。
「なにごとだい、こんな真夜中に？」
「済みません。お宅へ行きました。勘八が、こちらだと言うものですから……。いや、勘八は、お呼びして来ると言ってくれたのですが、何分、気がせいていたものですから……」
「あたしの方はいいんだよ。気にするようなあたしやお葉じゃない……。それより、なにがあったんだい？」
「実は……、女が殺されているんです」
城之介は、ホーッと溜め息をつき、安心したように長火鉢の前に坐った。
「心配させるなよ。あたしゃ、勇の内記どのか、御妻女となにかあり、お前さんが日下の家を飛び出したのかと思ったぜ」
「それが……、日下家を飛び出さねばならぬことになるかもしれないのです」
「殺された女のためにかい？」
「そうです」
「なに者だい、その女は？」
「存じません。見たこともない女です」
「どこなんだい、殺しの現場は？」
「三光院稲荷のすぐ裏の仕舞家です」
「なる程……、お前さんの受持区域だな」
日下兵馬は、四谷から内藤新宿を受持っていたのだ。――三光院稲荷は、新宿のはずれにあった。

——本郷もかね安までは江戸の内……と言う川柳があるが、新宿も、四谷大木戸までが江戸の内で、新宿は、代官所支配の甲州街道、青梅街道の宿駅であった。

しかし……、ここは、向島や目黒などと同じように、いわゆる両支配地で、喧嘩、泥棒、人殺しなどは、町奉行所が扱うことになっていたのだ。

「——で……、誰がしらせて来たのだい？」

「それは……、誰も、しらせて来ません」

城之介は、キョトンとした顔で、兵馬を見た。

「じゃ、女が殺されてるのをみつけたのは、誰なんだい？」

「わたしです」

「へエー、そいつアまた、うまく行き合ったものだなア」

「行きあったのではありません。目がさめると、横に女が殺されていたんです……」

城之介は、しばらくの間、言葉が出なかった。

いつの間にか、手早く着替えをしたお葉が、ぬるい砂糖湯をつくって持って来た。

「他のお方なら、冷やで一ぱい……と言うところですけど、旦下さんは余りいけない方だから、これにしましたよ……」

「済みません、お葉さんにまで心配をかけて……」

兵馬は、ゴクゴクとノドを鳴らして砂糖湯を呑んだ。

——気のきいたことをしやがる……、城之介は、お葉の機転が嬉しかった。

「——兵馬、落ち付いたところで、最初からもう一度話してくれ。——お前さん、女の死人と一ツ床に寝ていたようなことを言ったが、あたしの聞き違いかな？」

「いいえ、その通りなのです。女は殺されていました。だが、あたしが殺したんじゃありません。第一、いままでに、会ったことも、見たこともない女なんです」
「お前さん、外泊したのかい？　珍しいじゃないか」
「酔っていたのです。昨日は、三光院稲荷の春祭りでした」
「なる程……、四月の十五日か。あちらこちらで稲荷祭りがあったわけだな」
「で……、四谷伝馬町の刈豆屋伝右衛門達に招かれて、三光院稲荷門前の〝大吉〟で馳走になりました……」
「刈伝か……。知ってるよ。大店だな。その他には？」
「同じ刈豆屋仲間の宇兵衛と、芳三郎です」
刈豆屋とは、馬に食わせる飼糧を扱う店のことである。四谷伝馬町一丁目の西側には、こんな店が沢山集まっていたので、俗に刈豆店と呼ばれたくらいであった。
「――いつになく酔いまして、〝大吉〟を出たのも覚えておりません。ふッと気がつくと、見知らぬ家に泊まっており、横に、口をきいたこともない女の顔があったのです」
「それが、死人だった……と言うのかい？」
兵馬が、こッくりうなずいた。
「ハッと飛び起きたとたんに、女の姿が目に入りました。殆んど真ッ裸で、胸に、七首が一本、グサリッ……と、つきささって、ドロリッとした血潮が、布団から、畳へかけて、血溜まりをつくっていたんです……」

二

それからしばらくして、城之介は兵馬を、屋敷へ送って行った。

「――いつものことで飲み過ぎまして、兵馬に飛んだ介抱をさせてしまいました……」

城之介は、兵馬の妻や舅の内記には、そう言って、自ら悪友を買って出たのだ。

それから、自分の屋敷へ戻ってひと眠りした。

あとはいつもの通りだ。起き抜けに町内の湯屋へ行き、女風呂の一番湯をゆっくり楽しんで帰り、陽当りのいい縁側で、廻り髪結いに髷をいじらせ、十時には南町奉行所の定町廻り同心部屋へ入ったのだ。

他のものならともかく、相手が、普段きまじめな兵馬であるだけに、城之介は、その話を疑わなかった。

――兵馬は、なにも知らず、飛んでもない間違いに引きずりこまれたに違いない……。

幸い、夜明けに間があったので、誰にも見とがめられずに、その家を飛び出すことが出来た……と、兵馬がいっている。

――いずれ、そのうちに、新宿の宿場役人から、人殺しの訴えが奉行所にとどくことであろう……。万事は、それからだ。なまじっか、こちらから乗り込めば、兵馬を窮地に追いこむことになるだけだ……。城之介は、そう考えたのだった。

同心部屋へ行ってみると、もう、兵馬が坐っていた。――やはり、蒼い顔だ。悪いことに、いつもは遅い同心筆頭の早水茂太夫が、珍しい早や出仕で、熱いお茶をすすっていた。

「――新宿からは、まだなんの訴えもありません……」
兵馬が、茂太夫のスキを見て、城之介の耳へささやいた。
「あわてるこたアねエよ……。落ち付いて落ちついて……」
そう言ったものの、十一時を過ぎてもなんの変りもないと、城之介までソワソワし始めた。
もう、ボツボツ受持の町々へ、見廻りに出かけなきゃアならない……。
「――兵馬、由良さんにだけ、話しておくとしようか？」
「おまかせします。あたしには、どうすればよいのか、見当もつきません」
城之介は、退屈そうな顔をしている由良三九郎を同心部屋から連れ出し、兵馬から聞いたことを話した。
「――ヘエー、なんとまた派手な騒ぎにまき込まれたもんだなア」
「由良さんは、兵馬の言うことを信じてやって下さるんですか？」
「信じるね。これがお前さんのことだったら信じないがね。もし、あたしのことだったら、お前さんは信じるかね？」
「絶対に信じないでしょうなア」
「そうはっきり言わなくてもいいだろう。とにかく、兵馬がかみさん以外の女と寝るなんて、てんで考えられねエことだよ。更に、その女房や、日下の家まで捨てて、浮気相手の女を殺すなんて、あたしが女道楽をよすのと同じことだ」
「――ありッこねエ……と言うわけですか？」
「まアね……」
そう言ってから、三九郎は、尤もらしく、首を傾げた。

「しかし、こいつア臭せエなア」
「どう臭いんです？」
「こいつア悪戯じゃねエかな……。つまりね、兵馬が目をさましてギョッとする。すると、殺されてる筈の女が、ムックリ起き上がって、バア……なんてね。悪い洒落さ」
「しかし、女はムックリ起き上がらなかったんですよ」
「それはさ、なんしろ真夜中だろ、女もうっかり寝込んじゃってた。一方兵馬は泡ア食って飛び出しちゃった」
「そうでしょうか？」
「そうだと思うねエ。察するに、このお芝居の作者は、刈豆屋共だな。場所が内藤新宿だ。銭さえはずめば、お芝居の片棒をかつぐ女にゃ困らねエやね」
新宿には、あやしげな女を抱える旅籠屋が五十二軒あった。——表面は旅籠屋だが、内実は女郎屋で、抱えられている女は飯盛と呼ばれた。
宿屋の女中で、客の食事の飯を盛る……と言うところからこう呼ばれたのであろうが、言うまでもなく、本職は女郎だった。
——内藤新宿は旅籠五十二軒、飯盛百五十人に限ってお目こぼしあり、女の多くは品川風なれど、品いささか落つ……と、〝岡場所栗毛〟に書いてあり、〝色里三十三ケ所息子巡礼〟には、——追分山新宿寺。本尊つかう金の無駄始末。開帳銭二朱……と記載されている。とにかく、大した女達でなかったことはわかるわけだ。
「——しかし、見ず知らずの女が、兵馬をかつぐわけはないでしょう」
「勿論、このひと幕の作者は別にいるのさ。あたしの考えでは、刈豆屋どもだと思うね。——へへへ

……、いかがです、旦那。今夜の趣向は……なんてね、おでこをピシャリと叩く積りだった。ところが、女が寝くされてて手筈が狂った……。そんなところじゃねエかな」

「もしそうだとすると、怪しからぬ話ですなア。仮にも南町奉行所同心である日下兵馬を町人どもが――」

「まアまア、そう堅ッ苦しく考げエることはねエだろう。大体兵馬は堅過ぎる。刈豆屋なんかには金持の通人が多い。――あの若くて、融通のきかぬお町の旦那を可愛がってやろう……なんて、不心得にゃア違げエねエが、格別悪気があったわけじゃアねエんだろう」

三九郎はすッかり悪戯と決めているようだった。

だが、城之介は、なんとなく仕事が手につかなかった。兵馬にいたっては、時々、ソッと、額のあぶら汗を拭いていた。

「――体が悪いんじゃないか？　無理をしない方がいいぜ……」

茂太夫が、とうとう兵馬にそう言ったほどであった。

その日の昼過ぎに、城之介と兵馬は、とうとう四谷伝馬町の自身番へ顔を出した。

「――あ……、これはこれは……」

出迎えた町役人が、刈豆屋の伝右衛門であった。

「昨夜は、大変失礼をいたしました……」

伝右衛門が、兵馬に小腰をかがめた。

「なぜ、自身番へ来ているのだ？」

そう言う兵馬の言葉を聞いて、――まずいな……と、城之介は思った。兵馬は、まるで親の仇にでも出会ったかのように、息をはずませているのだ。

ところが、刈伝の方は、ケロッとしていた。

「当町内の町役人は、半月代りに自身番へ詰めることになっておりますので……。あたくしは、月のあと半分を受け持っております」

言われてみれば、昨日が三光院稲荷の祭りで四月の十五日。きょうから四月もなかば過ぎと言うわけだった。

「――そうか……」

兵馬は、スーッと、大きく息を吸いこんでから、唇を舐めた。――夜明け前からの心労で、口がカラカラにかわいているらしい……。

「昨夜は、ことの外酔うた」

「それほどにも見えませなんだが……」

「わしが〝大吉〟を出たのは、幾時くらいであったかなア？」

「九時……、ちょいと前でしたでしょうか」

それから伝右衛門は、ドキリッとするようなことを言った――

「――お怨笹を……と申しますと、――野辜なことを言うな。このまま屋敷へ戻れるか……と仰有って、座敷から庭伝いに、ひとりでお帰りになりましたが……。あれから、どちらへ？」

三

「――なにかある！」

四谷伝馬町の自身番を出て七、八間歩くと、城之介が、ひとり言のように言った。

「え?!」
「由良さんは、悪戯だと言った。が……、あたしのカンでは、刈伝は何か隠している」
「そうお考えですか?」
「考えざるを得ないだろう。いいかい、兵馬、——野暮なことを申すな、このまま屋敷へ戻れるか……、と言ったのがお前エなんだ」
「それも、全然おぼえがありません」
「ない筈さ。お前さん、そんなことを言ってやしないんだ」
「じゃ……、つくりごとでしょうか?」
「言っちゃ悪いが、——野暮を申すな。このまま屋敷へ戻れるか……なんて、お前さんのセリフじゃないぜ」
「は……。あたしも、そんなことを言えるとは思いませんが、或は酒の勢で……」
「生酔い本性たがわず……。いくら酔っても、心にもないことは言えないものさ」
「そうでしょうか……」
「それに、お前さんに、九時頃からたずねて行けるような女があるとも考えられない」
「仰有るとおりです。あたしには、そんな相手は、天地神明に誓ってありません」
「自慢にゃアならねエよ。江戸ッ子の中の江戸ッ子と言われる定町廻りの旦那だ。情婦のひとりや半分あって当り前さ。つまり刈豆屋の伝右衛門は、日下兵馬を買いかぶった。——お町の旦那だ、ちょいちょい浮気をしているだろう……、そう考えて、あんなでたらめを喋ったのさ」
「なぜでしょう?!」
城之介は、呆れて兵馬を眺めた。

「そのわけは、あたしも知りてエよ。ただ、こう言うことは言えるな。兵馬は昨夜、——九時ちょいと前に、料亭〝大吉〟の座敷から、座伝いに出て行った……」

「刈豆屋伝右衛門は、そう言っていましたな」

「つまり、お前エが〝大吉〟を出たのは、その時、同じ座敷にいたものの外、誰も知らない……と言うことになる。これは、〝大吉〟で調べたって、なんにもならないぜ……と、ゲタを預けられたようなものさ」

兵馬が、ハッと顔をあげた。

「じゃ、刈豆屋伝右衛門は——」

「まだ、なんとも言えねエ……。とにかく、昨夜の家へ行ってみよう」

「はい……。しかし、あたし達が死体をみつけたんじゃ、まずいんじゃありませんか？」

「本当は、訴えがあってから御出役とゆきたいところだが、どうにも気になって、もう待っていられねエ……。で、その家と言うのは？」

「飛び出したとき、初めて気がつきました。〝大吉〟のすぐ裏手の家です」

〝大吉〟は、内藤新宿の岡場所としては、珍しく、女に客をとらせず、料理一本でもっている店だった。

江戸で、お上からお許しを頂いている——つまり官許の遊女街は吉原だけだった。その他は、深川、品川、新宿始め数多くの色町は全てお目こぼしで、言うなれば私娼である。

吉原のことを〝苦海〟と言った。他の色町は〝苦の海〟ではない。〝陸〟であり、〝岡〟である……と言うので、岡場所なる言葉が生まれた……と言われている。

その岡場所内藤新宿は、昼を過ぎたばかりで、色っぽさは、これっぽっちもなく、馬をひく人足達

が右往左往していた。

料亭〝大吉〟も、寂がたりなそうな小女が、はれぼったい顔で、やっと表の掃除にとりかかったところであった。

〝大吉〟の粋な板塀添いに裏手へまわると、竹藪が続き、小さな沼などがあった。——表通りとは打ってかわり、静かで、いなかびた風景だった。

「あしこです……」

兵馬が、竹藪を背にした、一軒家を指さした。——生け垣などをめぐらした、茶室風の、ちょいと洒落た家だった。

「——はてな?!」

自然木をあしらった門を入ると、兵馬が首を傾けた。

「どうかしたのかい?」

「雨戸があいているんです！　あたしが目をさましたときには、しまっていました」

「と言うことは、お前さんが出たあとで、誰かが中へ入ったと言うことになるぜ」

「だから、驚いたのです」

「中へ入りゃ、当然、女の死骸をめッけなきゃアならねエな……」

城之介も、首をひねりながら、縁側へ廻り、あいている障子から、中をのぞきこんだ。

「——おッ！」

城之介が、驚いて、うしろの兵馬を振返った。——座敷の中に、女が坐っていたのだ！

女は、三十二、三であろう……。ムッチリと、胸と膝がふくらみ、髷がつややかに、ひと目でそれとわかる、玄人風の着付けだった。

その女が、花を生けていたのだ！

「――おや……」

女は、顔をあげると、城之介より、兵馬を見て、ニッコリ笑った。

「――日下の旦那……。昨晩は……」

「お前とは？」

城之介がたずねた。

「あたしですか？　〝大吉〟の女主人、お仙と申します」

「じゃ、これは、〝大吉〟の持ち家かい？」

「ええ……、ま、うちの離れみたいなもんですけれど……」

城之介と兵馬は、顔を見合わせた。

「――ここですよ。間違いありません。この座敷に女の死骸が……」

兵馬が、城之介にささやいたが、お仙の様子からは、そんな間違いがあったとは考えられず、事実、死骸はおろか、血潮のあとさえもなかった。

四

「――やっぱり、あたしが考げエたとおり、悪戯なんだよ……」

千秋城之介から新宿での話を聞くと、由良三九郎が、そう言って城之介と日下兵馬を見比べた。

南町奉行所の同心部屋では、相談の出来ること柄ではなかった。

で……、奉行所から余り離れていない竹川河岸のお菜の家の二階に、三人が集まったのである。

夕暮れには、ちょいと間があった。階下から、下手な宮本節が聞こえて来る。町内の若い者が、お葉に稽古をつけて貰っているのであろう。

〝――咲く花の、散るとはかねて知りながら、心なくおとすは風かや春雨の、晴れぬ思いをしょんぼりと……〟

節はまずいが、いい文句だ。宮本節の名曲〝名酒盛色之中汲（なさけざかりいろのなかくみ）〟――通称〝お菊〟のひと節だった。

「――心なく、落すは風かや春雨の……か。まッこと、若くて美しい女が殺されていたのなら、この文句がピッタリだが……」

「信じて頂けませんかッ」

兵馬が、思い詰めたように三九郎を見詰めた。

「あたしは、ハッと飛び起きるときに、女の手か肩かにさわったのですよ。それこそ、氷みたいに冷え切っていました」

「手だろうな……」

三九郎が、事もなげに言った。

「青唐辛子（あおとうがらし）で手をこすると、血の気が止まって、死人のようにひやッこくなるんだ」

「でも、ドロリッとした血溜まりまで出来ていたんです」

「紅がらに糊をまぜると、黒ずんで血溜まりみてエに見えるもんだぜ」

「七首が女の胸に――」

「手品の小道具、バネ仕掛けの七首があるよ。グサリッと、つき刺したように見えるが、実は、刃先が中へひっこむのさ」

「あー……、あたしには、悪戯とは思えないんです！」

兵馬が、頭を抱えた。

「悪戯でねエとすると、兵馬……、お前エ、頭がどうかしてたんじゃねエかい？」

「由良さん！」

キッと、気色ばむ兵馬に、三九郎が、ニヤリと笑い返した。

「むきになるなよ。大体、あまり飲める方じゃねエ。それが、刈豆屋共から無理に杯をさされて、珍しく酔っぱらった。そんな時には、ありもしねエことを、あったように思うことがあるんだな。妄想ッてやつだよ」

「けさ、目が醒めたとき、酔いはさめていました」

「そいつアどうかなア……。あたし達飲み馴れたものでも、深酒のあとは、二日酔いで気分が悪りいからなア」

城之介は、兵馬が可哀そうになった。だが、どこかが狂っているのは間違いのないこととしか考えようがなかった。

兵馬は、見も知らぬ女が素ッ裸で殺されていたと言うが、その現場を訪ねてみると、〝大吉〟の女将が平然と花を生けていたし、たたみの上には、ひとッたらしの血潮のあともなかった。

「兵馬……、もう一ツ、何か思い出せないか？」

「何をでしょう？」

「なんでもいいんだ。いままでの話では、由良さんのおっしゃる通り、悪戯か、妄想としか考えられない。そこでだ、もう一ツ何か思い出してくれると、ズバリッと割り切れる手掛りになるかもしれない」

兵馬は首を傾げた。

そのとき、稽古を終ったお葉が、酒の仕度をして上がって来た。

「あ……」
突然、兵馬がハッとしたように、お葉を見た。
「そ、それは、なんと言うのです？」
「え？」
「髪です。その髪の形ですよッ」
「あら……」
お葉は、ちょいと恥かしそうに、手を鬢の方へ廻した。
「嫉しがンなよ。兵馬は髪の形を聞いてるんだ。この髪がどうかしたのかい、兵馬？」
「あの女が、同じような髪を……」
「結ってたのかい？」
たたみこんでたずねる城之介へ、兵馬が大きくうなずき返した。
「そう言やア、見かけねエ髪だねエ。よく似合うぜ、師匠……」
さすがに、三九郎は女を扱うコツを心得ていた。
「そうでしょうか……。初めて結ったんですけど、上方の方ではやっているそうですよ。〝お千代〟と言うんです」
「〝お千代〟……。上方風にしちゃ、イキじゃないか」
「ズブの素人衆には向かないでしょうね。と言って、芸者衆がこれじゃお座敷がつとまらないし、やっぱり、あたし達のような芸ごとの師匠か、親分衆のおかみさん……と言うところでしょうか……」
こんどは、城之介がお葉にたずねた——
「もとからある形かい？」

「いいえ……、近頃ですよ。今年になってから、江戸へ入って来たんだと思うんだけど」
城之介は、兵馬を見詰めた——
「もう一度、とっくりお葉の髪を見てくれ。これと同じ髪だな？」
「間違いありません。ハッと飛び起きた瞬間から、妙に眼の底へ焼きついているんです」
「由良さん……」
城之介が、三九郎へ顔を向けた。
「どう思います？」
三九郎は、腕を組んで、ジッと考え込んだ。
「人間てなア、妙なもんなんだ。つまンねエことが、やけに目についたり、忘れなかったりするもんだよ。あたしゃね、五年前に万引き女をとッ捕まえ損なった。自慢にならねエ話だがね、あたしの手を振切って逃げやがったものさ」
「相手が女だ。やんわりと摑んだんでしょう」
「へへへ……、こわれちゃいけねエ……と思ったてエのかい？　そうだったかもしれねエな。とにかく、キッと振返るなり、パッと手を払って逃げやがった。チラッと、顔を見ただけなんだ。ところが、その万引き女の右の口もとに、ちっぽけなホクロがあった。顔は忘れても、そのホクロだけは、いまだに目に残ってるよ」
「つまり、兵馬が見た女の髪形は、本当なんだ……と言うんですか？」
「そんな気がするなア。そして、兵馬の言ったこと全てが、妄想なんかじゃねエような気がして来たんだよ」
「じゃ、悪戯一本槍ですか？」

「いや、——女の体が氷みてエに冷たかった……。ドロリッと血が溜まっていた……。グサリッと七首が突き刺さっていた……。そう言う兵馬の言葉は、みんな本当だと思えて来たのさ」
「じゃ、どうします？」
「三人力を合わせて、洗いなおそうじゃねエか」
「——相済みません。お手数をかけます」
兵馬が、思わず両手をついた。
「なアに、ひとごとじゃアねエよ。あたし達だって、いつ、どんなめにあわされるかわからねエんだからなア……」

五

翌日……。
城之介は、小者の勘弁の勘八をつれて、新宿の床番所へ行った。
床番所は、木戸番所と言うのが正しい呼び名だが、町奉行所ではわざと床番所と言っていた。
街道筋では、要所要所に木戸をつくり、そこに番所をつくり、宿場役人や在所の名主がつめて、道中諸般の雑用を処理していたものである。
新宿も、甲州街道・青梅街道の宿場であり、やはり木戸があった。これは、四谷の大木戸とは別のものである。本来なれば、木戸番所は、町奉行所同心の受持ち外なのだが、両支配の新宿では、同心達も時々この番所へ出張って調べをした。
そこで、普通の木戸番所と区別して、新宿の床番所と呼んだのである。

「――あ、お町の旦那……、おいでなさいまし……」

詰めていた宿場役人が三、四人、あわてて土間へ降りた。

「――どうぞ上へ……。なんしろ他の番所と違いまして、むさくるしゅうございますが……」

確かに、この番所はひどいものだった。囲炉裏を囲んで万字型にひいた畳は色がちぐはぐで、たばこの焼けこげが、あちらこちらに飛んでいた。

その上、炉端には、うッすらと、ほこりが溜まってさえいるのだ。

――吉原は蝶、新宿はアブが舞い……、と言う川柳がある。吉原の色町は田ンぼの中で、春になると菜の花が咲き、蝶が飛び交うが、新宿の岡場所は、凄まじい駄賃馬に群がるアブが舞っている……と言う意味なのだが、それほど馬の多い新宿の街道筋だ。一日中ほこりに包まれているようなものだった。

「――なる程ひでェや……」

城之介は、腰を降して、あたりを見廻した。

「申しわけございません。この通り街道へ晒されております。たたみなどもたまったものではございません。すぐ日焼けしてしまいます……。それでも、二、三日前にひき直しました。焼けた方を隅へ、いままで日の当らなかった方をまン中へ……。へへへ……、きょうなどは、まだきれいな方でございますよ」

「なにかと苦労が多いな」

「ここへ集まる人足がざッと三千人、馬が七千匹でございますからなア」

「それだけ、宿の重役達は儲けも大きいわけだ」

「飛んでもございません。一番の稼ぎ高は、なんと言っても四谷馬喰町の刈豆屋さんでしょうな。七

千匹に食わせる豆でございます。大した石高なので……。それに……」

宿場役人のひとりは、ニヤリと笑いを浮かべた。

「その豆も、お上のお定めより品を落して」

「待ちな……」

城之介は、ジロリッと、その男を睨んだ。

「そんな不正を働いてる刈豆屋があるのかい？」

「いえ……、ま、ちょいと品を落せば、儲けが一段と跳ね上がるだろう……と、まアそう考えたようなわけで……」

男は言葉を濁したが、城之介は、あり得ることだと思った。

新宿の人足にも、いろいろの種類があり、一番格の高いのは御朱印人足と言われた。——幕府御用の品物を扱う人足である。それから宿次ぎ御証文人足……。これは、参勤交替の大名道具を扱う連中だ。御朱印人足が三十人、この御朱印組の下働きが三百八十人だった。また、御証文人足は二百五十人と定められ、この下働きが六百人ほどいた。

この人足達だけでも、馬を千五百匹ほど持っており、これには、力をたくわえさせるため、上質の豆を、定められた量だけ食わさねばならなかった。

その豆を、ちょいと安いものを使えば……。

「刈豆屋は笑いが止まらねエだろうなア」

「旦那……。そのことは、お聞き流しになすッて……」

「わかったよ。だが、お前達も刈豆屋みてエなもんだぜ」

「と仰有いますと？」

「飛んだ豆で儲けてるじゃねエか」

城之介は、飯盛女たちのことを言ったのだ。——奉行所がお目こぼしをしている飯盛女は百五十人だが、そんな人数で、群がる人足達をこなせる筈がない。しかも新宿へ遊びに来るのは人足だけではない。——百社目は三光院と息子きめ……と言うざれ句がある。江戸では、百社納札と言って、神社仏閣百カ所へ名札を納めて歩く行事がある。その百社目の打ち止めを、下町の息子連中は必ず吉原の九郎助稲荷へ行ったが、山ノ手のドラ息子共は、遠い新宿三光院稲荷に決めていた。——尾のない狐に抱かれに行く……と言うわけだ。

このように、人足以外の客も多い。当然、女の数も相当おいておかなければならない。

「おい、いま、飯盛の本当の数はどれくらいだ？　四、五百もいるか？」

「と、飛んでもない！　ひゃ、百五十人でございますよ」

「それにしちゃ、行き合う女の数だけでも大したものだぜ」

「旦那……。色町にいるのは、飯盛だけじゃございませんよ。女将連中、女中や仲居達、それから遊芸の師匠……。へへへ……、どうかお手やわらかに」

「わかってるよ……。女師匠と言やア、近頃、小粋な髪がはやってるじゃないか。上方風でさ、〝お千代〟とか言ったなア」

「あー……、ちょくちょく見かけますが、あれは粋な髷ですねエ」

「この地許に、あの髪を結える髪結いがいるのかい？」

「へエ……、お紋と言いましてね、腕のいい女髪結いですよ。へへへ……、腕もいいが、飛んだ上玉で……。髪結いをさせとくなア惜しいようなもんでございますよ」

その言葉に、城之介が、チラリッと勘八を見た。

――合点……と、勘八が飛び出して行く。ほんの、たばこ二、三服の間に、勘八は女髪結いのお紋をつきとめ、ここ二、三日の間に、〝お千代〟髷を結った女達の名を調べ上げてくるだろう……。

兵馬が見たと言う殺された女が、その中にいるかもしれないのだ……。

「ときに、〝大吉〟の女将は、ひとりものかい？」

城之介の言葉に、宿場役人達は顔を見合わせた。

「なんでエ。亭主持ちか……。つまらねエ」

「旦那……」

ひとりの男が、いやしげな笑いを浮かべた。

「〝大吉〟の女将をどうなさろうッてお考えで？」

「あったかそうないい女だ。ひとりものなら口説いてみてエなア」

「ひとりものでございますよ、表向きはね」

「わかった。情夫がいるのか」

「いいえ……、言えば、うしろだてですよ」

「けッ……」

城之介は、わざと、いまいましげに舌打ちをした。

「ひとの持ちものじゃ手が出せねエなア……。何者だい？　あれだけの女を養うんだ。なまやさしいことじゃねエ。さしずめ、〝大吉〟のお仙の旦那は、宿場役人の中だろう」

「とてもとても！」

男は、大げさに手を振った。

「われわれでは歯が立ちません。刈芳さんですよ、旦那……」

「刈芳?! あー、刈豆屋の芳三郎か……」

城之介は、ひとりうなずいた。——昨夜、兵馬を招いたのは、刈豆屋伝右衛門と、同業の宇兵衛、それから芳三郎の三人だ……。

その時、勘八が、目の色を変えて飛び込んで来た。

「どうしたッ。わかったか?」

「わかりましたよ。〝大吉〟の裏できア」

「〝大吉〟の裏?! 裏は、〝大吉〟の離れと、竹藪と、沼だぜ」

「沼ですよ」

城之介が、ハッと顔をあげた。

「勘の字ッ!」

「そうなんで……。胸ンとこをえぐられて、沼に浮かんでましたよ」

六

ドロリッと澱んだ沼のほとりには、既に、三九郎と兵馬が来ていた。

「——兵馬……」

振返った兵馬が、泣き出しそうな顔で、城之介を見詰めた。

「あの仏かい?」

城之介が顎をしゃくったところには、青い水草にまみれて、女髪結いお紋の死骸が浮かんでいた。

浅黄の腰巻が一枚からんでいるだけの赤裸だが、崩れた髪は、〝お千代〟髷の面影を残していた。
「――死骸をあげます……」
土地の世話人らしい男が二、三人、気味悪そうに、沼の中へ入って行った。
「――旦那……、あちらに、お茶の仕度をしておきましたから……」
そう言う声に振返ると、刈豆屋の伝右衛門が立っていた。
「そうかい。世話アかけるな……」
城之介は、三九郎と兵馬を目顔で促して、伝右衛門について行った。
案内されたのは、〝大吉〟の離れだった。
「――さアさアどうぞ……」
女将のお仙が出迎え、刈豆屋の芳三郎と、宇兵衛が、家の中で頭を下げていた。
「――お揃いだなア……」
そう言う城之介の言葉に、芳三郎と宇兵衛が、ギョッとしたように顔をあげた。
座敷には、酒と肴の用意がととのっていた。
「――折角だが、御用最中だ。番茶を貰いてエな」
三九郎が、そう言って、足の指で座布団を引き寄せ、辺りを見廻した。
長い間使わなかったとみえて、寒々とした部屋だったが、床の間には掛け物もかけてあったし、花も生けてあった。更に、床脇のあかりとりの窓の前には、緋毛氈をひいて、女ものの文机が置いてあった。
「お前エ達、お紋となにか、ひっかかりがあるのかい？」
「い、いいえ……」

伝右衛門が、あわてて手を振った。

「ここで、雑俳でもひねくろうかと、気のあった三人が集まってますとね、沼に死人が浮かんでるッてエので、驚いて飛び出したんですよ。すると、かねがねお世話になっている日下の旦那始め、お三人さんがいらしたもんですから……」

「呼んでくれたッてわけかい？」

伝右衛門は、三九郎の言葉に、うなずいた。

「――ときに、伝右衛門……」

今度は城之介が、口を開いた。

「若い兵馬だ、罪なことはしねエで貰いたい」

「旦那……。あたくし達は……」

「いずれ、あたしや由良さんの手で、刈豆の吟味はするがね」

「えッ?!」

「まさか、品をおとしてやしねエだろうな？　兵馬は馳走になったそうだが、あたし達はお前エ達に恩も恨みもねエ。遠慮なく、調べさせて貰うぜ」

すると、芳三郎が、膝を乗り出した。

「旦那……。本日のところは、お紋のお調べでございましょう。刈豆につきましては、いずれ日をあらためまして――」

「黙れッ！」

城之介は、キッと、辺りへ目を配った。

「たたみを、敷き違えてやしねエかい？」

——ひえッ……、と、男三人とお仙が、同時に驚きの声をあげた。
「日に焼けたところと、焼けねエところが、入れまじっている。これは、ここ一日か二日前に嫁きかえたものと思うがどうだ？」
「あ、あのウ……、それは……」
お仙が、泳ぐように手を振り動かして、ゴクリッと、生つばをのみこんだ。
「違うと言うのかい？　タップリ血潮を吸いこんだたたみをどう始末したらいいか……。頭をひねッたろうなア。ふッと思いついたのが、たたみを嫁きかえるッて手だ」
城之介は、ツカツカと緋毛氈へ近づくと、パッと足で跳ね上げた。
「——こいつはどう言うわけだ、伝右衛門？」
城之介が指さしたところは、ドス黒く色が変っていた。——血溜まりを拭きとったあとだった。
「——申しわけございません！」
伝右衛門達が、たたみに頭をすりつけた。
「お堅い日下さまにお親しく願おうと、酔いつぶれた旦那の寝床へ、お紋を忍び込ませました。ところが、夜明けに、日下さまが飛び出してお行きになったので、どうしたことかと思って中へ入ってみますと……」
「お紋が殺されていた。兵馬がやったと思ったかい？」
「め、滅相なッ……。お紋は前々から——」
出し抜けに、お仙が立ち上がった。——目が吊り上がり、唇がワナワナと震えていた。
「——あん畜生ッ、淫乱なんだッ。殺したッて飽き足りないんだよッ。お前さんもお前さんだッ。お紋なんかと乳くり合いやがってッ」

そう叫ぶと、お仙は芳三郎へ獅噛みついて、気違いのように泣き叫んだ。

「――と言うようなわけで、お紋殺しの下手人はお仙でした」

城之介は、初めて、兵馬の災難を同心筆頭の早水茂太夫へ打ちあけた。

「死骸を見て驚いた伝右衛門達は、さすがに兵馬へ罪をなすりつける勇気はなく、石をくくりつけて、死骸を沼へ沈めた上、たたみ入れ替えの小細工をしたんだそうです」

「飛んだめにあったなア……」

茂太夫は、兵馬を眺めて溜め息をついた。

「これからもあることだ。悪賢い町人共は、あの手この手で、あたし達を泥沼へ引きずりこもうとする。気をつけなきゃいけねエよ」

それから茂太夫は、城之介を眺めた。

「しかし、よくたたみの入れ替えに気付いたなア」

城之介がチラリと笑いを浮かべた。――床番所のたたみが教えてくれたのだ。

「それにしても……」

三九郎が、城之介の耳へ口を近づけた――

「こん度の一番手柄は、お薬師匠だぜ。〝お千代〟掘がたった一ツの手掛りだったのだからなア…」

昭和51年1月20日　発行

江戸の旋風
——冬衣おんな地獄——

¥ 650.
〈検印省略〉

著者　島田一男
発行者　矢貴東司
印刷者　堀内文治郎
発行所　株式会社 桃源社

〔103〕東京都中央区日本橋観音町1の5の1
電話（666）4001番（代表）
振替東京64351番

落丁・乱丁の節は
お取替え致します

（用紙特漉　北越製紙・市川工場）
1976 ©

(分) 0293 (製) 075109 (出) 5180

桃源社・ポピュラー・ブックス

止めの一撃

生島治郎

雨の高速道路の待避線で見た故障車の男は忘れようにも忘れられない恨みの男だった……非情な男の世界。

¥600

若殿剣法ぐらし

城昌幸

松平定の御曹子千代丸は、大名生活を嫌い自由奔放な生活を楽しむ。快刀乱麻の推理で活躍する若殿の勇姿

¥600

大密室

佐野洋

実験室の完全な密室に閉じこめられた男と女、女は死に男は昏睡状態……この事件の裏にひそむ悪辣な罠。

¥600

幽霊を抱いた重役

源氏鶏太

妻の不貞と、会社の不遇に悩み、辺鄙な温泉地で女と関係したが、それは死んだ女の幽霊であったのか。

¥620

風流奉行

山岡荘八

房州館山藩の御隠居・鳴鶴老人に談じ込まれ、相模屋の後家をめぐってのひと騒動……風流奉行大岡越前守

¥620

悪魔の火祭

高木彬光

私立探偵大前田英策が、みちのくの夜空を赤く染めるネブタ祭で、女の異妖な刺青に推理の糸にを潤む……

¥620

桃源社・ポピュラー・ブックス

復讐保険

高木彬光

謀殺実直と思われた弁護士の死から意外な裏面が次々と……その複雑な事件の謎に挑む検事霧島三郎。

¥600

億万長者

源氏鶏太

億万長者に夢を馳せ、それが現実に……金の無心に千客万来の騒動……大金がまき起こす様々な人間模様。

¥600

江戸へ百七十里

山手樹一郎

浪人長谷部平馬は御落胤の証拠の短刀を返上、一介の浪人となるが、世嗣争いの駒謀に巻き込まれて行く……

¥620

世界怪奇犯罪小説集

高木彬光

永い歴史の底には、無数の犯罪行為が蠢めく、それは人間の営み、歴史であり、神をも恐れぬ行為なのか……

¥600

湖底の囚人

島田一男

ダム建設のため、村を売った五人の地主、次々と謎の死をげ送る。後の二人にも殺人予告の魔の手が……

¥600

血の匂い

多岐川恭

夢と現実の間を繋ぐのは、事故で怪我をした時の〝血の匂い〟推理小説の手法を駆使して怪しの世界へ……

¥600

桃源社・ポピュラー・ブックス

江戸妖花帖
多岐川　恭
伊佐吉と弥七の名コンビが江戸市中にまき起こる事件の数々をどう説きあかすであろうか……傑作時代長編
¥600

落語新幹線
三代目三遊亭圓歌
江戸っ子の心底に流れる洒落た反骨精神や、ほのぼのとした哀愁を、新作・古典を通して笑いを贈る。
¥620

乱雲
松本清張
甲州から陸奥、佐久と信濃の地を席巻して北上する信玄と、善光寺平にこれを迎え撃つ謙信。宿命の決戦。
¥590

浪人横丁
山手樹一郎
泰平の夢をさます夷狄の上陸に、揺れる浜では夷人斬り、江戸では浪士強盗と……維新前夜の激動期を描き出す
¥600

特派事件記者
島田一男
東京日報の山さんと、タイムスのヤジさんが、巧みなおとぼけで他社を出し抜く、おなじみ特派事件記者。
¥620

報酬か死か
生島治郎
私立探偵志田司郎は、報酬の魅力に惹かれて事件に乗り出し、死に直面するが、刑事時代の感と推理で……
¥600